加古川市文化財調査報告 24

石守廃寺発掘調査概要報告書

平成 23 年 3 月

加古川市教育委員会

加古川市文化財調査報告 24

石守廃寺発掘調査概要報告書

平成 23 年 3 月

加古川市教育委員会

例　　言

1. 本書は加古川市神野町石守に所在する石守廃寺の第1次と第2次発掘調査の概要報告書である。調査は文化庁の補助金を得て加古川市教育委員会が実施した。

2. 発掘調査は加古川市教育委員会文化課の岡本一士が担当した。調査期間は第1次調査が1983年8月25日から10月3日である。第2次調査は1984年11月19日から12月27日である。

3. 本書の編集は加古川市文化財調査研究センター、西川英樹が行った。

4. 遺物整理は主に平成22年度緊急雇用就業機会創出事業によって実施した。この事業は株式会社アコードに委託した。

5. 本書に記載した遺物の番号は本文・図面・拓本・写真を通して統一している。

6. 本書に掲載した遺物・写真・図面は文化財調査研究センターに保管されている。

7. 本書の作成に当たっては、京都府立大学文学部教授菱田哲郎氏から多大な教示を受けました。また、兵庫県立考古博物館の森内秀造氏、長濱誠司氏、岸本一宏氏から多くのご教示を受けました。記して感謝いたします。

本文目次

第１章　発掘調査の経過 …… 1
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 1
第３節　発掘調査・遺物整理・報告書刊行の体制 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3

第３章　遺構の概要 …… 9
第１節　塔跡 …… 9
第２節　金堂跡 …… 11
第３節　中門跡 …… 11

第４章　遺物の概要 …… 12
第１節　瓦 …… 12
第２節　土器 …… 23
第３節　金属製品 …… 23

第５章　まとめ …… 25
第１節　遺構 …… 25
第２節　出土瓦の系譜 …… 25
第３節　出土瓦の時期 …… 27
第４節　出土土器の時期 …… 28
第５節　瓦の出土傾向 …… 28

表　目　次

表１周辺遺跡分布図地名表 …… 7

図 版 目 次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 6
第２図　石守廃寺伽藍配置図

第 3 図　昭和 58 年度調査トレンチ配置図
第 4 図　塔跡平面図（昭和 58 年度調査）
第 5 図　塔跡基壇実測図（昭和 58 年度調査）
第 6 図　塔跡基壇西辺サブトレンチ南壁土層断面図
第 7 図　昭和 59 年度調査地及び伽藍配置図
第 8 図　昭和 59 年度調査中門跡平面図・断面略図
第 9 図　塔心礎略測図
第 10 図　軒丸瓦実測図 1
第 11 図　軒丸瓦実測図 2
第 12 図　軒丸瓦実測図 3
第 13 図　軒丸瓦実測図 4
第 14 図　軒平瓦実測図 1
第 15 図　軒平瓦実測図 2
第 16 図　軒平瓦実測図 3
第 17 図　軒平瓦実測図 4
第 18 図　軒平瓦実測図 5
第 19 図　丸瓦実測図 1
第 20 図　丸瓦実測図 2
第 21 図　丸瓦実測図 3
第 22 図　丸瓦実測図 4
第 23 図　丸瓦・平瓦実測図 1
第 24 図　平瓦実測図 2
第 25 図　平瓦実測図 3
第 26 図　平瓦実測図 4
第 27 図　平瓦実測図 5
第 28 図　平瓦実測図 6
第 29 図　平瓦実測図 7
第 30 図　平瓦実測図 8
第 31 図　鬼瓦・土器実測図
第 32 図　金属製品（風鐸）実測図 1
第 33 図　金属製品実測図 2

写真図版目次

写真図版 1　調査地全景写真 1
写真図版 2　金堂跡全景調査写真 1
写真図版 3　金堂跡調査写真 1
写真図版 4　金堂跡調査写真 2
写真図版 5　塔跡調査写真 1
写真図版 6　塔跡調査写真 2
写真図版 7　塔跡調査写真 3
写真図版 8　塔跡調査写真 4
写真図版 9　塔跡調査写真 5
写真図版 10　塔跡調査写真 6
写真図版 11　塔跡調査写真 7
写真図版 12　塔跡調査写真 8
写真図版 13　塔跡調査写真 9
写真図版 14　塔跡調査写真 10
写真図版 15　中門跡調査写真 1
写真図版 16　軒丸瓦写真 1
写真図版 17　軒丸瓦写真 2
写真図版 18　軒丸瓦写真 3
写真図版 19　軒丸瓦写真 4
写真図版 20　軒丸瓦・軒平瓦写真 1
写真図版 21　軒平瓦写真 2
写真図版 22　軒平瓦写真 3
写真図版 23　丸瓦写真 1
写真図版 24　丸瓦写真 2
写真図版 25　丸瓦・平瓦写真 1
写真図版 26　平瓦写真 2
写真図版 27　平瓦写真 3
写真図版 28　平瓦・鬼瓦・土器写真 1
写真図版 29　土器写真 2
写真図版 30　金属製品写真 1
写真図版 31　金属製品写真 2
写真図版 32　金属製品写真 3
写真図版 33　金属製品写真 4
写真図版 34　塔心礎写真

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

石守廃寺は加古川の支流である曇川西岸の段丘上に所在する奈良時代の寺院跡である。戦前からその存在が知られていたが、本格的な発掘調査は一度も実施されたことがなかった。調査地の当時の現況は水田であったが、この水田について 1982 年に土地所有者から加古川市教育委員会に、土地売却についての相談があった。

調査地東隣の畑（道路の北側沿い）には、すでに塔跡から引き出されて原位置を失った塔心礎が残されており、遺跡からは古瓦が採集されていた。しかし、周辺に基壇状の隆起は見られず、伽藍配置や遺構の残存程度などの詳細はまったく不明であった。そのため、加古川市教育委員会では上記のような経緯も踏まえながら、伽藍配置を究明し、後日の保護のための資料を獲得することを目的として発掘調査を実施することとした。調査は 1983 年と 1984 年の 2 ヵ年において実施した。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は土地所有者の承諾を得て実施した。第 1 次調査は 1983 年 8 月 25 日から 10 月 3 日までである。トレンチによる調査を実施し、遺構の検出にしたがって拡張を行った。調査を実施した水田は加古川市神野町石守 729－2 である。この調査では、塔跡基壇を検出した。トレンチの拡張により、北辺を除く東辺、西辺、南辺を確認した。また、塔跡基壇の東側で、金堂跡と推定される基壇も検出された。出土遺物としては、多量の瓦片の他、風鐸 5 点、水煙片、金銅製蓋等が出土した。

第 2 次調査は 1984 年 11 月 19 日から 12 月 27 日まで実施した。調査場所は加古川市神野町石守 729－2 である。この調査では金堂跡基壇と中門跡が検出された。また、塔跡についても第 1 次調査では未確認であった北辺が検出された。遺物では瓦類のほか、風鐸 4 点、水煙片等が出土した。

調査後、遺構は地中保存され、現在（平成 23 年）に至っている。

第3節　発掘調査・遺物整理・報告書刊行の体制

1　発掘調査

1983年第1次調査

調査担当者　加古川市教育委員会文化課　岡本一士

1984年第2次調査

調査担当者　加古川市教育委員会文化課　岡本一士

2　遺物整理

平成22年度緊急雇用就業機会創出事業により（株）アコードに委託した。

（株）アコード遺物整理員

監督者　西森忠幸

整理員　佐藤敦子・西川美佳・北川由紀子・水瀬富嗣・庄司友子・永井紀美

3　報告書編集　文化財調査研究センター　西川英樹

なお、風鐸・水煙片の実測図は『加古川市史第4巻』に使用されている図を再トレースした。塔心礎略測図は『加古川市史第4巻』に使用されている図を基にして作成した。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

加古川左岸地域は野口段丘群、日岡段丘群、加古段丘群などの段丘地形が発達している。これらは海進現象と隆起によって形成された地形である。形成時期は数万年前～数十万年前頃と推定されている。石守廃寺は加古川の支流である曇川西岸沿いに所在する。曇川両岸沿いには台地層が形成されており、廃寺は丘陵末端部に位置する。

周辺の遺跡で最も古い時代の遺跡は旧石器の散布地である日岡山遺跡である。この遺跡からは安山岩製とチャート製のナイフ形石器や黒曜石の細石刃石核などが採集されている。一方、石守廃寺北東側の西条丘陵上では、最も古い時代の遺跡として旧石器の散布地である神野城山遺跡が存在する。

日岡山南側の平野部には、沖積地の微高地上に弥生時代～中世の集落跡である美乃利遺跡や弥生時代～平安時代の集落跡である溝之口遺跡が存在する。また、段丘上には坂元遺跡が存在する。この遺跡からは、縄文時代晩期の埋甕や弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代後期の埴輪窯跡など多くの遺構・遺物が発見された。奈良時代後期の集落は賀古駅家の駅子の集落であると考えられている。一方、石守廃寺北東側の西条方面では、西条廃寺下層から弥生時代中期後半の竪穴住居跡１棟が検出されている。また、丘陵下には弥生時代から平安時代までの集落跡である神野遺跡が存在する。この遺跡からは弥生時代後期の多角形竪穴住居跡が検出された。石守廃寺北東約 600mの曇川東岸沿いには弥生時代の集落跡である手末遺跡が存在する。この遺跡の弥生時代後期の竪穴住居跡からは多量の弥生土器が出土した。これは、東播磨地方における弥生土器編年の基準資料のひとつとなっている。西条丘陵上には弥生時代後期の墳丘墓である西条 52 号墓が築造された。この墳丘墓については、調査記録が刊行され、詳細な情報が明らかとなった。調査記録によれば、西条 38 号及び 60 号も弥生時代の墓であるという。

日岡山には古墳時代前期に築造された日岡山古墳群が存在する。日岡陵古墳（前方後円墳、全長約 86m）、南大塚古墳（前方後円墳、全長約 90m）、西大塚古墳（前方後円墳、全長約 74m）、北大塚古墳（前方後円墳、現存長約 53m）勅使塚古墳（前方後円墳、全長約 55m）の５基の前方後円墳と東車塚古墳（消滅）、西車塚古墳、狐塚古墳などの詳細不明であるが円墳と考えられている古墳からなる。古墳時代後期にも約 20 基程の群集墳が築造されたが、日岡山 2 号墳などを除いて、その多くが日岡山公園造成時に破壊された。西条丘陵側では、明確に古墳時代前期と断定できる古墳は築かれていない。古墳時代中期には行者塚古墳（前方後円墳、全長約 99m）、人塚古墳（直径約 60m、突出部の一部残存）、尼塚古墳（全長 51.5m）の 3 基が築造された。古墳時代後期には数十基からなる群集墳が築造された。西条古墳群は行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳の 3 基を除いて、宅地造成工事の

ため消滅した。後期古墳のうち、西条21号墳は土取りにより東半が削平されていたが、一辺約16m、高さ約3mの方墳である。主体部は6基あり、木棺直葬である。円筒埴輪片や家形埴輪が出土した。

石守廃寺南方の丘陵上には、石守古墳群5基が存在する。発掘調査が実施されていないため、時期など詳細は不明である。また、北西側の丘陵には若神社古墳が築かれていたが、すでに削平されている。また、稲根神社裏の丘陵上には2基の円墳とされる二塚1号墳と2号墳が築かれている。これは古墳時代後期の2基の円墳とする説と後円部と前方部に横穴式石室を構築する1基の前方後円墳とする説がある。

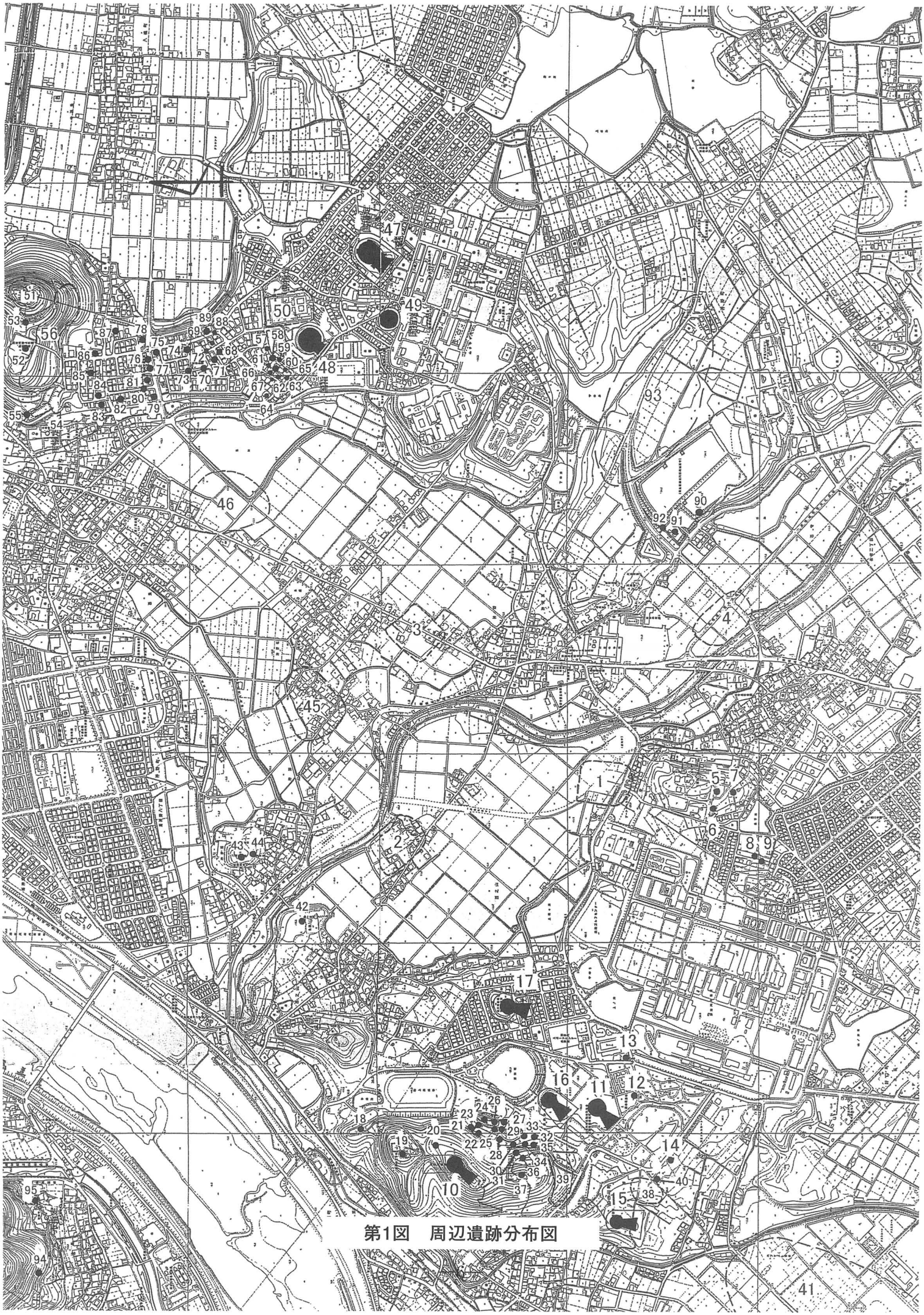
石守廃寺北西約500mの位置にある石守構居跡からは圃場整備に伴う構居周辺の調査により奈良時代の土器が出土した。遺構は複数のピットが検出された。この構居跡には土塁と伝えられる高まりが一箇所残っている。また、石守廃寺北東約600mの位置には手末構居跡が存在する。この遺跡は、平成11年に加古川市教育委員会により発掘調査が実施され、16世紀頃の城館跡で一町四方の範囲を有すると推定された。

加古郡の古代寺院としては、石守廃寺から約1.5kmの位置に西条廃寺が存在する。1981年～1983年に発掘調査が実施された。調査の結果、塔を西に、金堂を東に配し、その北側に講堂を配することが判明した。中門は掘立柱による八脚門で、そこから掘立柱の柵列が派生して回廊の役割を果たす。金堂は西に正面を向けている。法隆寺式に類似する伽藍配置を有する寺院であることが判明した。また、野口町野口には野口廃寺が存在する。平成6年度、7年度に加古川市教育委員会による発掘調査が実施された。その結果、塔跡、講堂跡、小堂宇跡、掘立柱建物跡などが検出されている。

参考文献

西口和彦・岡本一士『西条廃寺発掘調査報告書』加古川市教育委員会1985年
田中眞吾「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史第1巻』1989年
岡本一士・山本祐作・渡辺昇・友久伸子『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市教育委員会1992年
西谷眞治「日岡陵古墳・勅使塚古墳・狐塚古墳・東車塚古墳・西条古墳群」『加古川市史第4巻』1996年
高野政明「西大塚古墳・南大塚古墳・北大塚古墳・行者塚古墳・人塚古墳・尼塚古墳」『加古川市史第4巻』1996年
菱田哲郎・高橋克壽・森下章司他『行者塚古墳発掘調査概報』加古川市教育委員会1997年
山田清朝・他『美乃利遺跡』兵庫県教育委員会1997年
岸本道昭「播磨の前方後円墳研究序説」『播磨学紀要6号』2000年
西川英樹『手末遺跡発掘調査報告書』加古川市教育委員会2003年
西川英樹『野口廃寺発掘調査概要報告書』加古川市教育委員会2004年

西川英樹『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅱ』加古川市教育委員会 2006 年
山田清朝『美乃利遺跡 2』兵庫県教育委員会 2006 年
中川渉『坂元遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会 2006 年
森下章司『尼塚古墳発掘調査現地説明会資料』加古川市教育委員会 2006 年
篠宮正「東播磨地域の編年」『弥生土器集成と編年　播磨編』大手前大学史学研究所 2007 年
田中眞吾『兵庫の地理』神戸新聞総合出版センター2007 年
長濱誠司『石守廃寺』兵庫県教育員会 2008 年
松本正信・加藤史郎他「西条 52 号墓調査の記録」西条古墳群発掘調査団『第 9 回播磨考古学研究集会の記録　弥生墓からみた播磨』2009 年
渡辺昇・西口圭介・山上雅弘・鐵英記・長濱誠司・岡田章一・篠宮正「坂元遺跡Ⅱ」兵庫県教育委員会 2009 年



第1図　周辺遺跡分布図

1	石守廃寺	３６	日岡山 19 号墳
2	石守構居跡	３７	日岡山 20 号墳
3	手末構居跡	３８	日岡遺跡
4	天神前遺跡	３９	日岡山遺跡
5	石守１号墳	４０	日岡山壷棺墓
6	石守２号墳	４１	美乃利遺跡
7	石守３号墳	４２	若神社古墳
8	石守４号墳	４３	二塚１号墳
9	石守５号墳	４４	二塚２号墳
１０	日岡陵古墳	４５	高田構居跡
１１	南大塚古墳	４６	神野遺跡
１２	西車塚古墳	４７	行者塚古墳
１３	東車塚古墳	４８	人塚古墳
１４	狐塚古墳	４９	尼塚古墳
１５	勅使塚古墳	５０	西条廃寺
１６	西大塚古墳	５１	西条城跡
１７	北大塚古墳	５２	城山１号墳
１８	日岡山１号墳	５３	城山２号墳
１９	日岡山２号墳	５４	西条蔵骨器群
２０	日岡山３号墳	５５	西条土壙墓
２１	日岡山４号墳	５６	神野城山遺跡
２２	日岡山５号墳	５７	西条１号墳
２３	日岡山６号墳	５８	西条２号墳
２４	日岡山７号墳	５９	西条３号墳
２５	日岡山８号墳	６０	西条４号墳
２６	日岡山９号墳	６１	西条６号墳
２７	日岡山 10 号墳	６２	西条７号墳
２８	日岡山 11 号墳	６３	西条９号墳
２９	日岡山 12 号墳	６４	西条 10 号墳
３０	日岡山 13 号墳	６５	西条 12 号墳
３１	日岡山 14 号墳	６６	西条 13 号墳
３２	日岡山 15 号墳	６７	西条 14 号墳
３３	日岡山 16 号墳	６８	西条 21 号墳
３４	日岡山 17 号墳	６９	西条 21－2 号墳
３５	日岡山 18 号墳	７０	西条 23 号墳

７１	西条 24、26、27、28、30 号墳	８４	西条 52 号墓
７２	西条 25 号墳	８５	西条 53 号墳
７３	西条 29 号墳	８６	西条 58 号墳
７４	西条 31 号墳	８７	西条 59 号墳
７５	西条 32 号墳	８８	西条 61 号墳
７６	西条 34 号墳	８９	西条 61－2 号墳
７７	西条 35 号墳	９０	神野大林窯跡１号窯
７８	西条 36 号墳	９１	神野大林窯跡２号窯
７９	西条 37 号墳	９２	神野大林窯跡３号窯
８０	西条 38 号墳	９３	神野北山遺跡
８１	西条 39 号墳	９４	地蔵寺５号墳
８２	西条 40 号墳	９５	地蔵寺６号墳
８３	西条 51 号墳		

表１周辺遺跡分布図地名表

第３章　　遺構の概要

第１節　塔跡

塔跡・金堂跡が検出された水田は標高約 14.6mの高さを保ち、周辺の水田より約 1m 高い位置にあった。現存する塔心礎は、昔この水田から引き出されたものである。鎌谷木三次の論文「播磨国石守廃寺」『兵庫史学第 18 号』昭和 33 年に詳しい経過が書かれているため、少し長くなるが引用する。記述によれば廃寺付近の地形は「明治の中頃までは殆んどが松林であったと云う。然るにその後、開墾に遇って現在見られるような段々風の耕田に変わったと。（中略）心礎の現存する神野村石守字丸山七二九ノ二も今は開墾されて耕田になっている。（中略）心礎は、もと同番地の北隅と南隅を結ぶ対角線上の北隅を距る約一〇米位の附近に表面を約二〇糎程度露出した姿で埋没していたと。然るに昭和八年、この心礎は発掘されて附近の妙見堂の庭前へ移置された。ところが、その後、妙見堂の斎主であった厚海儀一氏が病死したので、遺族の者は、これは嘗って信仰の対象であった塔に用いられていた心礎を搬出したことの祟りであるとの恐れを起し、昭和十一年六月、再び現在の処へ戻したが、更に昭和二十年には妙見講の信者が集って、心礎の上に、いま見られるような供養塔を建てたと云う」と記している。「開墾に際しては、心礎の周辺から相当量の古瓦破片が発掘されたそうである。」また、心礎の上の供養等について「南無妙法蓮華経供養塔と刻彫している」と記している。地籍図に記された石守 729－2 番地は昭和 58 年（1983 年）の発掘調査地である。発掘調査の結果、上記の記述の正確性が確かめられたといえる。

また石見完次著『東播磨の民俗・加古郡石守村の生活誌』昭和 59 年の記述では、これは「昭和 8 年、伝兵衛池の上の妙見道場へ運ばれ、やがて祭主が亡くなったので、もとの場所に近い現位置に戻し、保存されている」と記している。この著書ではすでに昭和 58 年の加古川市教育委員会による発掘調査についての記述もあるので、ここに記す「もとの場所に近い現位置」とは発掘調査時に心礎があった場所のことであろう。調査時でも心礎の上には石碑が置かれていた。心礎は現在、近隣の寶塔寺境内に移され、石碑は除かれている。

発掘調査は、水田に幅約 3m、長さ約 28mのトレンチを設定して実施した。トレンチは遺構の検出にしたがって拡張を行った。ここから検出された塔跡基壇は一辺約 11mの方形である。耕作土上面から約 12～14cm 下で検出された。

第１次調査で東辺、西辺、南辺の３辺を確認した。基壇上部はすでに削平を受けており、礎石は検出されなかった。検出された基壇の高さは南辺で約 70cm、東辺で約 50cm、西辺約 50cm である。外装は北辺を除く各辺においては地覆石を据えない凝灰岩の自然石を使用した石積である。石は約 20～30cm 程度の大きさのものが中心で、最も大きいものは約 70cm 程であった。石積の残りは悪く、下から 1～2 段程度が残るのみであった。

第 2 次調査によって検出された北辺は様相が異なっていた。外装は約 10～20cm 程度の河原石を使用した石積である。地覆石はやはりなく、下から 2～3 段程度が残存していた。北辺中央には、石積の外側に平瓦を立てならべていた。平瓦は凸面を前に向けて 9 枚並べられていた。これを瓦列と呼ぶこととする。瓦列の幅は約 2.4mである。東から 4 枚目は丸瓦の広端部を下にして凸面を前に向けて立てている。5 枚目と 6 枚目の間は一枚分空いている。この部分は丸瓦を基壇と直角の南北方向に数段重ねて積んでいる。東端からこの部分までで約 1.5mである。6 枚目から 9 枚目までは約 90cm である。西端の 9 枚目はずれており、長さも他の瓦に比べ短い。これは瓦列の一部ではないかもしれない。瓦はすべて立て並べた上部が割れているが、割れ方は不規則である。割り付けのある写真を観察すると位置は基壇北東隅から瓦列 1 枚目までの距離がおおよそ 5m～5.1mである。基壇北西隅から瓦列西端までは約 3.6～3.7mである。瓦列をそのまま階段痕跡とすると塔中心より西側に位置することとなる。また、写真から瓦を観察すると補修用と考えている HIV類の平瓦が存在している。この遺構は、階段とその周辺部を補修した痕跡ではないかと思われる。

基壇上部からは、塔心礎の抜き取り跡の土壙が検出された。トレンチ調査のため、全体を検出していないが、径約 3.3m、深さ約 1 m程度である。埋土はすでに撹乱されていたという。位置は塔基壇の中心にあたる。上記の鎌谷の記述にある戦前の心礎抜き取り跡であろう。

基壇の構築は、西辺に設定したサブトレンチの土層断面図から、地山層の上に暗黄褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、暗黄褐色砂質土、淡赤褐色粘質土、赤褐色粘質土など主に粘質土を積み上げて構築している。地山は標高約 14.0mの高さで、基壇下には雨落ち溝と考えられる深さ約 26cm の素掘りの溝が巡っている。西辺サブトレンチでは埋土は暗灰褐色粘質土であった。幅は残りの良い基壇東辺で測ると約 90cm である。基壇から雨落ち溝までの距離は約 80cm である。

塔心礎は現在、近隣の寶塔寺に移されている。境内に塔基壇の高まりを造成して、その中心部に据えている。凝灰岩製で、現況で地上に出ている部分は高さ約 15～18cm、平面約 1.7m×約 1.8mで、いびつな多角形である。礎石上部に円形孔を有する。孔は上径 60cm、底径 60cm の円筒形で、深さ約 17～20cm である。円形孔底部には径 9cm 程度の水抜き孔が掘られている。礎石の内部を刳り貫き、側面まで貫通している。水抜き孔は外側に向けて広がる形状である。

円形孔上端部は高さが不揃いである。また心礎は円形孔の部分が最も高く、そこから離れるほど低く傾斜していくが、均一な傾斜面は作られていない。これらのことから、心柱は円形孔にはめ込まれていたものと考えられる。約 1.5km 離れた西条廃寺の塔心礎と比較するとその形態の違いが注意される。

第2節　金堂跡

主に1984年の第2次調査によって検出された。塔跡の東側に位置し、南面する基壇である。東辺及び北辺はすでに削られているため、残存していない。南辺、西辺を検出したが、全長は不明である。基壇は地山を削り出した後、盛土をして構築している。外装は瓦積である。略測図から判断すると検出長は東辺約11.8m、西辺約9.5mである。瓦積は地覆石を置かず、地面から直接積み上げているが、少し傾斜しており、西側が高く、東側が低くなる。瓦積の手法は平瓦の凸面を上にして側面を前に出す平積である。割った平瓦を使用しているものも目立つ、また、広端面を前面に向けて積んでいる瓦もあり、乱雑な手法という印象を受ける。

南辺の一部に瓦積の存在しない部分がある。略測図から判断すると、幅は約3mで、南西隅から東へ約6.3mの地点から始まる。この部分の土中には瓦辺が多く含まれていた。これは階段の裏込めではないかと推測される。瓦積の写真からは補修用と考えられるHIV類の平瓦が数段積まれている状況が確認できる。また、階段の裏込めと推測される箇所から出土している瓦片にも同様にHIV類の平瓦が写っていることを確認できる。このことから、瓦積及び階段痕跡は築造当初の姿をそのまま残しているものではなく、補修を受けていると考えられる。

西辺は、瓦積の残りが非常に悪く、北側の一部が残存していたのみである。主に割った平瓦を、凸面側を上部に向け、1段～2段、最高で4段積んでいる状況が確認された。

基壇上面は削平のため、礎石の設置痕跡は検出されなかった。また、基壇下南側に浅い溝状の窪みが検出されたが、明確に雨落ち溝と判断することはできなかったということである。

金堂の検出により、石守廃寺の伽藍配置は西に塔、東に金堂を配置する法隆寺式であることが明らかとなった。これは近隣の西条廃寺とも共通している。しかし、西条廃寺は金堂の正面を塔に向けている点が異なっている。石守廃寺はより、標準的な法隆寺式の伽藍配置であると言うことができる。

第3節　中門跡

塔南辺から南へ17.5mの位置で検出された。東西方向に溝状の掘り方を設定し、柵列を樹立する遺構である。掘り方が途切れる部分が一箇所存在する。西側の掘り方は検出長4.4m、幅約1.3mである。東側の掘り方は検出長1.1m、幅90cmである。西側の掘り方から柱穴2基、東側の掘り方から柱穴1基を検出した。この柵列はさらに調査区外に延びると考えられる。

西端で検出した柱穴（柱穴1）は平面形が南北に長い楕円形で、長径74cm、短径55cm、深さ33cmである。その東隣の柱穴（柱穴2）は東西に長い楕円形で、長径86cm短径74cm、深さ55cmである。東側の掘り方から検出された柱穴（柱穴3）は南北に長いいびつな楕円形で、長径73cm、短径50cm、深さ47cmである。

柱間距離は、柱穴 1～2 の距離が 1.5m、柱穴 2～3 の距離が 1.2mである。塔と金堂の中間に中軸線を設定すると、中軸線は掘り方が途切れる柱穴 2 と 3 の間を通る。このことから、中門は幅 1.2mで、柵列の一部に開閉装置を取り付けた構造物であったと推定される。

第４章　遺物の概要

第１節　瓦

最も多く出土した遺物である。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦に分けて記述する。軒丸瓦はⅠ類～Ⅴ類に分類する。軒平瓦はⅠ類からⅢ類に分類する。丸瓦はすべて行基式であり、形態に大きな相違点が無いため、細分はしていない。平瓦はⅠ類からⅤ類に分類する。鬼瓦は脚部及び上部の破片資料である。

(1) 軒丸瓦

NMⅠ類

細弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。外縁は幅 7mm～1cm の直立縁である。外区には輻線文を巡らせる。花弁はすべて突線によって表現している。主要伽藍の中で最も多く出土しており、創建期の軒丸瓦と考えられる。瓦当径は 16ｃｍ～17ｃｍ程度である。中房の蓮子が 1+8 のNMⅠA類と 1+7 のNMⅠB類の二種に分けられる。NMⅠB類は中房の圏線が太く、花弁が圏線から離れている点などいくつかの点で異なり、両者は別笵であることが明瞭にわかる。

NMⅠA類の中房を観察すると、木目に沿って割れたと思われる線状の笵傷を確認することができる。笵傷の進行から NMⅠA1 類(あまり目立つ笵傷は無く、一条線の短い笵傷を確認する程度である)→NMⅠA2 類(平行する 3 条～4 条程度の笵傷を確認できる)→NMⅠA3 類（笵傷により蓮子が一箇所連結する）に細分することができる。(写真図版 17) 丸瓦部は一点のみ狭端部まで残る資料があり、行基式であることを確認することができた。

1 は塔跡から出土した。色調は灰白色～淡黄色を呈する。瓦当径 16.3ｃｍ、中房径 5.6ｃｍ、瓦当厚は下端で 2.5ｃｍである。蓮子は 1＋8 である。丸瓦部凹面の接合部には指押さえ跡が顕著に残る。凹面に布目圧痕が残る。布目は縦糸 33 本×横糸 27 本／3ｃｍである。

2 は塔跡から出土した。瓦当下部を欠く。蓮子は 1＋8 である。中房内には 4 条程度の笵傷がある。ⅠA2 類である。色調は黒色を呈する。瓦当径 16.8ｃｍ、中房径 5.8ｃｍである。

3 は塔跡から出土した。表面には煤が付着し、軟質でかなり摩滅している。瓦当径 16.8ｃｍ、中房径 5.8ｃｍである。丸瓦広端部幅約 16ｃｍである。蓮子は 1＋8 で、目立つ笵傷は無い。ⅠA1 類である。

4 は金堂跡から出土した。須恵質で暗青灰色を呈する。瓦当上部を欠く。蓮子は 1＋8 で、

3条程度の笵傷があり、ＩA2類である。中房径5.6ｃｍ、瓦当厚は下端で2.7ｃｍである。

5は淡黄色を呈し、焼成は堅緻である。瓦当径16.9cm、中房径5.7cmである。中房の蓮子は1＋8で、目立つ笵傷は無く、ＩA1類である。丸瓦凹面の接合部には指押さえ痕が顕著に残る。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸30本×横糸30本／3ｃｍである。

6は塔跡から出土した。瓦当径16.3ｃｍ、中房径5.4ｃｍである。瓦当厚は下端で3.2ｃｍである。須恵質で明青灰色を呈し、焼成は堅緻である。蓮子は1＋8である。中房内には4条の平行する笵傷を確認できる。ＩA2類である。丸瓦は瓦当裏面に比較的高い位置で接合し、凹面凸面両方に接合粘土を付加して固定する。凸面側の接合粘土は厚さ1.2ｃｍである。

7は瓦当上部のみが残るが、丸瓦部の接合状態が良く観察できる資料である。軟質で、暗灰色を呈する。丸瓦は凸面を幅2.5ｃｍにわたって斜めに削っている。丸瓦の厚さは2ｃｍで、接合面の厚さは7mmとなる。瓦当裏面に半円弧状の溝を設けている。丸瓦の上下に接合粘土を付加して固定する。凹面側の接合粘土には指押さえ痕が顕著に残る。

8は淡黄色を呈し、焼成堅緻である。瓦当径16ｃｍ、中房径5.5ｃｍ、瓦当厚は下端で2.5ｃｍである。蓮子は1＋8である。笵傷の進行により、蓮子が一箇所連結している。ＩA3類である。塔跡から出土した。

9は須恵質で明青灰色を呈し、焼成堅緻である。瓦当径16.8ｃｍ、中房径4.7ｃｍである。中房の蓮子は1＋7である。圏線が太く盛り上がり、幅5mmある。蓮弁が中房の圏線と離れている。ＩＢ類である。塔跡から出土した。

ＮＭⅡ類

無芯三重圏文軒丸瓦である。須恵質で焼成堅緻、胎土に白砂を含む資料が多い。瓦当径がＮＭＩ類より小さく、14～15ｃｍ程度である。第一圏～第二圏間が狭く、第二圏～第三圏間が広くなる。各圏の間隔や外縁の幅、高さ等は概ね似た数値である。このことからすべて同笵と考えられる。金堂跡及び塔跡から出土する。外縁は素文の直立縁である。第一圏線内にヘラ書きで、「大」の文字や四花弁を刻む資料が存在する。丸瓦は接合粘土を凹面凸面両方に付加して固定する。接合位置が低く、瓦当上部に接合粘土を多く付加する。接合粘土を傾斜させて付加するため、側面から見ると瓦上部が斜めにそり上がる形態となる。丸瓦はＩＡ類同様、広端部凸面側を斜めに削って接合している。瓦当裏面に半円弧状の溝が残る資料が存在する。狭端部まで残る資料は存在しないが、石守廃寺で出土している丸瓦は全て行基式であるため、行基式丸瓦が付くと推定される。

10は須恵質で灰色を呈し、焼成堅緻である。胎土に1mm以下の白い砂粒を含む。表面はかなり剥離している。瓦当径14.5ｃｍ、第一圏内径4.4ｃｍ、第一圏～第二圏間7mm、第二圏～第三圏間1ｃｍ、第三圏～外縁間1ｃｍ、外縁は高さ3mm、幅1ｃｍである。瓦当厚は下端で2.3ｃｍである。金堂跡から出土した。

11は淡黄色を呈し、焼成堅緻である。胎土に白砂はあまり含まない。瓦当径15ｃｍ、第一圏内径4.6ｃｍ、第一圏～第二圏間8mm、第二圏～第三圏間1.3ｃｍ、第三圏～外縁間1

ｃｍ、外縁幅１ｃｍ、高さ 5mm である。丸瓦部凹面に布目圧痕が少し残る。布目は縦糸 18 本×横糸 19 本／3ｃｍである。

12 は須恵質で、暗灰色を呈し、焼成堅緻である。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 14.3ｃｍ、瓦当厚は下端で 2.5ｃｍである。第一圏内径 4.3ｃｍである。第一圏線内にヘラ書きで「大」の文字を刻む。文字の向きは瓦の上下とほぼ合っている。第一～第二圏間は 9ｍｍ、第二～第三圏間は 1.2ｃｍ、第三圏～外縁は約 1.2ｃｍで、第一～第二圏間が狭く、第二～第三圏間が広くなる。外縁は素文の直立縁で、高さ 4mm、幅 7ｍｍである。丸瓦は低い位置に取り付けている。凹面凸面両方に接合粘土を付加して固定する。凸面側の接合粘土は瓦当裏面から斜めに傾斜させて付加する。丸瓦部側面はヘラ削りする。凹面側縁に狭い面取りはしていない。凹面には布目圧痕、布とじ痕が残る。布目は縦糸 20 本×横糸 20 本／3ｃｍである。

13 は瓦当径 14.5ｃｍ、灰色を呈し、須恵質で焼成堅緻である。第一圏内径 4.4ｃｍである。第一圏線内にヘラ書きで四花弁を刻む。彫りが非常に浅いため、数メートル離れると明瞭に認識することは困難となる。第一圏～第二圏間 7mm、第二圏～第三圏間 1.2ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で、高さ 5mm、幅 1.1ｃｍである。丸瓦部凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 20 本×横糸 18 本／3ｃｍである。

14 は須恵質で焼成堅緻、灰色を呈する。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 14.3ｃｍ、第一圏内径 4.2ｃｍである。第一圏線内にヘラ書きで「大」の文字を刻む。文字の上下と瓦の上下は概ね合っている。ヘラ書きはごく浅いため、数メートル離れると文字は明瞭に認識できなくなる。第一圏～第二圏間 7ｍｍ、第二圏～第三圏間 1ｃｍ、第三圏～外縁間 9mm である。外縁は素文の直立縁で高さ 4ｍｍ、幅 1ｃｍである。丸瓦部は凹面に布目圧痕が残る。布目は縦糸 20ｃｍ×横糸 18ｃｍ／3ｃｍである。

15 は金堂跡から出土した。須恵質で焼成堅緻、灰色を呈する。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 14.5ｃｍである。第一圏内径 4.5ｃｍ、第一圏～第二圏間 8mm、第二圏～第三圏間 1.1ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で高さ 5mm である。瓦当厚は下端で 3cm である。丸瓦部凹面に布目圧痕が残る。布目は縦糸 20 本×横糸 19 本／3ｃｍである。側面はヘラ削りする。凹面側縁に面取りは施していない。

16 は塔跡から出土した。須恵質で焼成堅緻である。暗灰色を呈する。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 14.5ｃｍである。第一圏内径 4.4ｃｍ、第一圏～第二圏間 7ｍｍ、第二圏～第三圏間 1.2ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で高さ 4mm、幅 1ｃｍである。瓦当厚は下端で 3.5ｃｍである。

17 は塔跡から出土した。須恵質で焼成堅緻である。灰色～暗灰色を呈する。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 15ｃｍである。第一圏内径 4.2ｃｍ、第一圏～第二圏間 7ｍｍ、第二圏～第三圏間 1ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で高さ 5mm、幅 1.1ｃｍである。瓦当厚は下端で 3.4ｃｍである。丸瓦を低い位置で接合する。瓦上部が反り上がる。

18 は金堂跡から出土した。須恵質で焼成堅緻、灰色を呈する。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 14cm、第一圏内径 4.3ｃｍである。第一圏線内にヘラ書きで「大」の文字を刻む。文字の上下と瓦の上下は概ね合っている。第一圏～第二圏間 7ｍｍ、第二圏～第三圏間 1ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で高さ 3ｍｍ、幅 1ｃｍである。丸瓦部は凹面に布目圧痕が残る。丸瓦部の取り付け位置は瓦当上部から 4ｃｍ下である。丸瓦部の上下に接合粘土を付加して固定する。
凸面側は縦方向のハケ調整を施す。

19 は金堂跡から出土した。暗灰色を呈し、須恵質で焼成堅緻である。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。この資料では丸瓦部の接合状態を確認することができた。瓦当裏面には半円弧状の溝が設けられ、丸瓦は凸面を斜めに削って接合している。丸瓦の取り付け位置は低く、瓦当上部から 5cm 下に取り付けている。接合粘土を凹面凸面両方に付加して固定する。取り付け位置が低いため、凸面側の接合粘土は厚く盛っている。瓦当径 14.5cm、第一圏内径 4.5ｃｍである。第一圏～第二圏間 8mm、第二圏～第三圏間 1.3ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で高さ 4ｍｍである。瓦当厚は下端で 2.5ｃｍである。丸瓦の広端部幅は約 14ｃｍである。

20 は塔跡から出土した。須恵質で焼成堅緻である。暗青灰色を呈する。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。瓦当径 14.2ｃｍである。第一圏内径 4.3ｃｍ、第一圏～第二圏間 7ｍｍ、第二圏～第三圏間 1ｃｍ、第三圏～外縁間 9mm である。外縁は素文の直立縁で高さ 5mm、幅 8mm である。丸瓦部を低い位置で接合し、瓦上部が反り上がる。

21 は青灰色を呈し、須恵質で焼成堅緻である。胎土に 1mm 以下の白い砂粒を含む。この資料では丸瓦部の接合状態を確認することができた。瓦当裏面には半円弧状の溝が設けられ、丸瓦は凸面を斜めに削って接合している。丸瓦の取り付け位置は低く、瓦当上部から 3cm 下に取り付けている。接合粘土を凹面凸面両方に付加して固定する。取り付け位置が低いため、凸面側の接合粘土は厚く盛っている。瓦当裏面と凸面との間に 5mm 程度の隙間が出来ている。瓦当径 14.3cm、第一圏内径 4.5ｃｍである。第一圏～第二圏間 7mm、第二圏～第三圏間 1.1ｃｍ、第三圏～外縁間 1ｃｍである。外縁は素文の直立縁で高さ 3ｍｍ、幅 1ｃｍである。

ＮＭⅢ類

変形重圏文軒丸瓦である。須恵質で灰色を呈する資料が目立つ。出土点数は少い

22 は暗灰色で焼成堅緻である。瓦当面に幅の広い圏線を一重巡らせている。圏線内には蓮子を 1＋8 配する。圏線は幅 1ｃｍ、高さ 4ｍｍである。外区は無文である。外縁は素文の直立縁でやや丸味を帯びる。幅 1.2ｃｍ、高さ 8mm である。胎土に 1mm 以下程度の白砂を含む。瓦当厚は下端で 3.7ｃｍである。

23 は金堂跡から出土した。灰白色を呈し、須恵質で焼成堅緻である。瓦当径 14.5ｃｍである。瓦当面に幅の広い圏線を一重巡らせている。圏線内には蓮子を 1＋8 配する。圏線は幅 1ｃｍ、高さ 4ｍｍである。外区は無文である。外縁は素文の直立縁でやや丸味を帯びる。

胎土に 1mm 以下程度の白砂を含む。丸瓦は広端部側凸面を斜めに削って接合している。接合粘土を凹面凸面両方に付加して固定する。瓦当裏面の接合粘土には指押さえ痕を多く残している。瓦当厚は下端で 3.4ｃｍである。

24 は金堂跡から出土した。暗青灰色で焼成堅緻である。瓦当面に幅の広い圏線を一重巡らせている。圏線内には蓮子を 1＋8 配する。圏線は幅 1ｃｍ、高さ 4ｍｍである。外区は無文である。外縁は素文の直立縁で丸味を帯びる。幅 1.5ｃｍ、高さ 9mm である。胎土に 1mm 以下程度の白砂を含む。瓦当厚は下端で 3.8ｃｍである。丸瓦部が外れており、丸瓦部接合以前の瓦当厚と接合粘土の境がよく観察できる。接合前の瓦当厚は外縁端から 2.5ｃｍである。

NMⅣ類

NMⅣ類は破片一点のみの出土であり、全体の形状は不明である。変形重圏文軒丸瓦であろう。

25 は NMⅣ類とした軒丸瓦であるが、一点のみの出土である。破片のため、全体の文様構成は分からない。淡黄色を呈し、軟質である。外縁は幅 5mm であるが、ほとんど剥離している。一重に圏線が巡り、圏線内側に蓮子が一個確認できる。外区には珠文 3 個が確認できる。珠文間の距離は 3.5ｃｍである。瓦当厚は 3ｃｍである。丸瓦部の状況は不明である。金堂跡から出土した。

ＮＭＶ類

単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。軟質で、表面黒色ないし黄色～黄橙色となる個体が多いことが特徴である。笵傷により、蓮子が一箇所、圏線と繋がっており、出土資料はすべて同笵と考えられる。瓦当部側面に笵端の痕が残る。また、瓦当裏面に丸瓦を接合するための半円弧状の浅い溝を設けている資料が存在する。丸瓦部が完存する資料は存在しない。色調、焼成が類似する丸瓦に 42 があり、これは、行基式である。

26 は瓦当面上部を一部欠損するがほぼ完存している。瓦当径 15ｃｍ、中房は圏線で表現している。中房径 4.5ｃｍ、中房内の蓮子は 1＋4 である。蓮弁は外側を一重の線で縁取りしている。蓮弁の多くは丸味を帯びる。間弁や珠文帯は存在しない。文様は蓮弁の間隔や形状が不揃いで、稚拙な印象を受ける。外縁は素文の直立縁で、高さは 9mm である。色調は表面黒色で、一部黄橙色を呈する。瓦当厚は 2.5ｃｍである。金堂跡から出土した。

27 は瓦当上部を欠く。黄橙色を呈し、軟質である。瓦当厚は 2.5ｃｍである。中房は圏線で表現し、径 4.5ｃｍである。圏線は幅 5mm である。蓮弁は丸味を帯び、一重線で縁取る。間弁・珠文帯等の表現は無い。外縁は素文の直立縁で、高さ 9mm である。丸瓦部を欠くが、瓦当裏面に接合痕跡が一部残る。丸瓦部は瓦当の外縁端から 2.5ｃｍ離れた位置で接合している。塔跡より出土した。

28 は瓦当径 15ｃｍ、中房は圏線で表現し、径 4ｃｍである。圏線は幅 5mm である。中房内の蓮子は 1＋4 である。蓮弁は一重線で縁取っている。蓮弁の多くは丸味を帯びる。間弁や珠文帯は存在しない。文様は蓮弁の間隔や形状が揃わず、稚拙な印象を受ける。外縁

は素文の直立縁で、高さは 9mm である。この個体では破損状態から丸瓦部の接合状況を観察することができた。広端面は無加工で、瓦当裏面に接合している。その上下に接合粘土を付加して固定している。

(2) 軒平瓦

NHⅠ類

斜格子文軒平瓦である。金堂跡及び塔跡から出土する。創建期の軒平瓦と考えられる。桶巻き作りによる製作である。瓦当面の斜格子文は叩き板によって施文している。顎部の形態は段顎で、平瓦凸面に粘土を貼り付けて成形している。平瓦部は全体が残る資料が存在しないが、桶巻き作りであることや凹面の布目が細かいこと、凸面の縄目叩きを不完全に擦り消している資料がかなり存在することから考えると、HⅡ類（桶巻き作りで縄目叩きを擦り消す平瓦）が使用されていると考えられる。

29 は瓦当面右端を一部欠損している。斜格子文は一部不連続となる箇所があり、施文は叩き板によるものと考えられる。須恵質で焼成堅緻である。側面はヘラ削りしている。凹面には布目圧痕、桶枠板圧痕、布とじ痕が残り、桶巻き作りによる製作である。布目は布とじ痕を境に方向が変わっている。布目は縦糸 22 本×横糸 23 本／3ｃｍである。顎部の形態は段顎で、厚さ 2.1ｃｍ、長さ 6ｃｍである。平瓦部凸面には斜格子叩き目が一部残存する。

30 は瓦当面の約半分を失っている。斜格子文は文様が一部不連続となる箇所があり、叩き板による施文と考えられる。瓦当面は厚さ 4ｃｍである。凹面は摩滅しているが、布目圧痕、布とじ痕を確認することができる。桶巻き作りによる製作である。顎部の形態は段顎で、厚さ 2ｃｍ、長さ 6.5ｃｍである。平瓦凸面に顎を貼り付けて接合している状況を確認できる。平瓦部凸面は縦位の縄目叩きを不完全に擦り消している。また、一部に斜格子叩きを施している。塔跡から出土した。

31 は瓦当面の厚さ 3.4ｃｍ～4.6ｃｍである。瓦当面の幅 32ｃｍである。斜格子文は不連続となる箇所があり、叩き板による施文と考えられる。側面はヘラ削りする。須恵質で焼成は堅緻である。顎部の形態は段顎で、厚さ 2ｃｍ、長さ 5.8ｃｍである。横ナデを施している。平瓦部凸面は残存部では叩き目を完全に擦り消している。凹面は布目圧痕、桶枠板圧痕、布とじ痕が残る。桶巻き作りによる製作である。布目は布とじ痕を境に方向は変化していない。布目は縦糸 24 本×横糸 26 本／3ｃｍで細かい。金堂跡から出土した。

ＮＨⅡ類

変形唐草文軒平瓦である。出土量は多く、大半が金堂跡から出土している。一枚作りによる製作である。凹面の布目は粗い。顎部の形態は曲線顎である。瓦当は外縁が無く、文様は型押しによる施文である。文様は左右非対称で特異な構成である。唐草文は凸線で表現されている。

32 は金堂跡から出土した。瓦当面がほぼ完存する。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦

糸 18 本×横糸 22 本／3ｃｍである。側面はヘラ削りし、凹面側の角を狭く面取りする。顎部の形態は曲線顎である。凸面は縦方向や斜め方向にヘラ削りを施している。凸面には瓦当側から 10.5ｃｍの位置に赤色顔料が一部付着している。瓦の色調は黄色味を帯びる灰白色で焼成は良好である。

33 は瓦当面左半分を欠くが、平瓦部が狭端部まで残る資料である。全長 37ｃｍ、狭端幅約 23ｃｍである。色調は淡黄色で、焼成は良好である。凹面には糸切り痕、布目圧痕が残る。布目は縦糸 16 本×横糸 18 本／3ｃｍと粗い。側面はヘラ削りし、さらに凹面側の角を面取りする。顎部の形態は曲線顎である。凸面は縦方向や斜め方向のヘラ削りを施している。叩き目は残らない。瓦当側から 11ｃｍの位置に長さ 4ｃｍ、幅 2～3ｍｍの帯状に赤色顔料が付着する。これは建物を朱色に塗った際に付着したものであろう。

34 は金堂跡から出土した。瓦当面には横方向に大きな割れ目が出来ている。明青灰色を呈し、焼成は堅緻である。凹面には布目圧痕が残る。側面はヘラ削りする。布目は一部側面の上部に及んでおり、一枚作りによる製作であると分かる。凹面は瓦当部側を浅くヘラ削りしている。布目は縦糸 18 本×横糸 22 本／3ｃｍである。糸切り痕を確認できる。凸面は縦方向のヘラ削りを施す。顎部の形態は曲線顎である。瓦当部から 10～11ｃｍ離れた位置に赤色顔料が付着している。赤色顔料は幅 1ｃｍ、長さ 3.5ｃｍで、瓦当部と平行に帯状に延びる。

35 は塔跡から出土した。淡黄色で軟質である。凹面には布目圧痕が残る。布目は 17 本×18 本／3ｃｍである。側面はヘラ削りする。凹面側の角も狭く面取りする。顎部の形態は曲線顎である。凸面は縦方向のヘラ削りを施している。叩き目は残らない。赤色顔料は付着していない。

36 は金堂跡から出土した。明青灰色～淡黄色を呈し、焼成堅緻である。瓦当部は左右両端を欠損している。凹面には布目圧痕が残る。布目は 16 本×19 本／3ｃｍである。広端縁にもヘラ削りで面取りをしている。側面はヘラ削りする。布目が側面の一部に及んでおり一枚作りによる製作であると分かる。顎部の形態は曲線顎である。凸面は縦方向のヘラ削りを施している。瓦当部から 10～11ｃｍ離れた位置に赤色顔料が付着している。赤色顔料は幅 2ｍｍ～4ｃｍで一定しないが、長さ 15ｃｍに及び瓦当部と平行に帯状に延びる。

ＮＨⅢ類

忍冬均整唐革文軒平瓦である。西条廃寺出土の軒平瓦と同笵である。出土数はごく少い。

37 は塔跡から出土した。黒灰色を呈し、焼成堅緻である。瓦当部右側を欠損している。忍冬均整唐草文軒平瓦である。中心飾が上下逆転し、茎は上方向から下方向へ派生する。文様は突線により表現される。顎部の形態は曲線顎である。平瓦の凸面に粘土を貼り付けている。平瓦部凹面には布目圧痕が残る。布目は 28 本×23 本／3ｃｍである。凹面の広端部側をヘラ削りして面取りする。側面はヘラ削りする。凹面側の角も狭く面取りをする。平瓦部凸面は縦方向のヘラ削りを施す。

(3) 丸瓦

確認できた資料はすべて行基式である。大きく分ければ広端部幅が 18ｃｍ以上の大振りの瓦と 14～16ｃｍ台の小振りの瓦に分けることが出来る。それぞれの瓦は色調や胎土、焼成布目の粗密などに違いがあるが、全て行基式であり、細分は試みていない。

38 は塔跡から出土した。広端部幅 18.3ｃｍ、厚さ 1.6ｃｍで大振りである。型によって成形し、2 分割している。明青灰色を呈し、焼成堅緻である。凸面は縦位の縄目叩きを擦り消している。側面はヘラ削りをしている。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 19 本×横糸 19 本／3ｃｍである。二本のほぼ平行する布とじ痕が残る。布とじ痕は広端部付近で屈折し、距離を狭める。また、布のほつれを確認できる。

39 は塔跡から出土した。広端部幅 18.5ｃｍ、厚さ 3.2ｃｍと大振りである。型によって成形し、2 分割している。灰色を呈し、須恵質で焼成は堅緻である。胎土には 1ｍｍ程度の白い砂粒を含む。凸面は縦位の縄目叩きを擦り消している。側面はヘラ削りをしている。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 22 本×横糸 20 本／3ｃｍである。また、布とじ痕も確認できる。

40 は行基式丸瓦である。金堂跡から出土した。軟質で黒褐色を呈する。全長は 34.5ｃｍ広端部幅 15.5ｃｍである。型によって成形し、2 分割している。凸面は縦位の縄目叩きを擦り消している。側面はヘラ削りをしている。凹面は広端縁、狭端縁ともにヘラ削りして、面取りをしている。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 15 本×横糸 16 本／3ｃｍと粗い。布とじ痕と綴じ合わせ目が破れている状態を確認できる。糸切り痕、粘土板の合わせ目を確認できる。

41 は行基式丸瓦である。黒灰色を呈し、焼成は軟質である。型によって成形し、2 分割している。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 18 本×横糸 21 本／3ｃｍである。側面はヘラ削りする。凹面の両側縁も面取りする。広端縁、狭端縁ともにヘラ削りして、面取りをしている。凸面は縦位の縄目叩きを擦り消している。全長 33ｃｍ、広端部幅 16.5ｃｍ、狭端部幅 9.4ｃｍである。

42 は行基式丸瓦である。金堂跡から出土した。黒灰色を呈し、一部浅黄橙色となる。焼成は軟質である。型によって成形し、2 分割している。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 18 本×横糸 19 本／3ｃｍで粗い。側面はヘラ削りするが、面はやや丸味をおび、あまい感じである。広端部側をヘラ削りして面取りする。凸面は叩き目を擦り消している。全長 33.5ｃｍ、広端部幅 16ｃｍ、狭端部幅 10.4ｃｍである。

43 は金堂跡から出土した。明青灰色～暗灰色を呈し、須恵質で焼成堅緻である。型によって成形し、2 分割している。凸面は縦位の縄目叩きを横ナデで擦り消している。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 24 本×横糸 27 本／3ｃｍである。布とじ痕が残る。布目は布とじ痕を境に方向が変わっている。側面はヘラ削りを施している。広端部幅 16ｃｍである。

44 は行基式丸瓦である。全体に煤が付着し、焼成は軟質である。金堂跡から出土した。型によって成形し、2 分割している。凸面は縦位の縄目叩きを擦りしている。側面はヘラ削

りする。また、凸面に糸切り痕が残る。凹面の両側縁を面取りする。凹面は広端縁をヘラ削りして、面取りをしている。凹面に布目圧痕が残る。布目は縦糸 17 本×横糸 17 本／3ｃｍである。全長 33.2ｃｍ、広端部幅 15.2ｃｍ、狭端部幅 8.9ｃｍである。

45 は灰白色を呈し、軟質である。広端部幅 18.6ｃｍで、大振りな丸瓦である。型によって成形し、2 分割している。凸面は縦位の縄目叩きを擦り消している。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 27 本×横糸 26 本／3ｃｍである。また、布とじ痕と布の破れ目が確認できる。布目は布とじ痕を境に方向が変化する。側面はヘラ削りし、凹面両側縁もヘラ削りして面取りする。

46 は全体が残らないが狭端部が残り、行基式であるとわかる。須恵質で明青灰色を呈し焼成堅緻である。胎土に 1ｍｍ以下の白い砂粒を含む。凸面は縦位の縄目叩きをあまり擦り消さずに残している。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 22 本×横糸 23 本／3ｃｍである。また、布とじ痕を確認することができる。布目は布とじ痕を境に方向が変化する。側面はヘラ削りしている。

(4) 平瓦

ＨＩ類

桶巻き作りで、凸面にジグザグの叩き目を残す特徴的な平瓦である。

47 はほぼ完形である。凸面に縦位の縄目叩きを施した後、叩き目を擦り消し、その後ジグザグ方向の縄目叩きを施す。叩き板は幅約 7.5ｃｍ、長さ 24ｃｍ以上である。広端部を下に向けて置いた時に、右側から左側へ叩いている。右端の叩き目は左上がりで、交差する左側の叩き目は右上がりである。さらにこれと交差する左上がりの叩き目が存在するが、凸面の左半分は叩き目が擦り消されており、側面近くに左上がりの叩き目が一部残るのみである。凹面は摩滅しているが、布目圧痕、布とじ痕、分割界線を確認出来る。桶巻き作りによる製作であると分かる。布目は縦糸 28 本×横糸 26 本／3ｃｍと細かい。全長 35.7ｃｍ、広端部幅 24.5ｃｍ、狭端部幅 23ｃｍである。黄色を呈し、焼成は良好である。側面はヘラ削りする。胎土に石粒を含む。

48 は灰白色を呈し、焼成は軟質である。金堂跡から出土した。凹面はかなり摩滅しているが。布目圧痕を一部確認できる。側面はヘラ削りする。凸面は 47 同様にジグザグ方向の縄目叩きを施している。叩き板は幅約 7.5ｃｍである。叩き目は側面で途切れている。叩き調整は分割前に施していることが分かる。

49 は灰色～灰白色を呈し、焼成は堅緻である。塔跡から出土した。凸面にジグザグ方向の叩きを施している。叩き目は 47、48 と比較して乱雑な印象を受ける。側面はヘラ削りする。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸 23 本×横糸 23 本／3ｃｍである。凹面広端部側にヘラ削りによる面取りを施す。

ＨⅡ類

桶巻き作りで、凸面の縦位縄目叩きを擦り消す平瓦である。

50は金堂跡から出土した。淡黄色を呈し、軟質である。全長36ｃｍ、広端部幅26.8ｃｍ厚さ 1.3ｃｍ、狭端部幅 23ｃｍである。凹面に布目圧痕、布とじ痕が残る。布目は布とじ痕を境に方向が変化している。桶巻き作りによる製作である。側面、端面をヘラ削りする。凸面は縦位縄目叩きを擦り消している。

51は塔跡から出土した。暗青灰色～灰白色を呈し、焼成は良好である。広端部幅28.5ｃｍ、厚さ1.5ｃｍである。凹面には布目圧痕、布とじ痕、桶枠板圧痕が残る。桶巻き作りによる製作である。布目は縦糸30本×横糸35本／3ｃｍである。凸面は縦位の縄目叩きを縦方向のナデで擦り消している。

52はほぼ完形に近い。暗灰色を呈し、焼成堅緻である。金堂跡から出土した。全長39ｃｍ、広端部幅26ｃｍ、厚さ2.2ｃｍ、狭端部幅24.5ｃｍである。凹面には糸切り痕、粘土板合わせ目、布目圧痕、布とじ痕、桶枠板圧痕が残る。桶巻き作りによる製作である。布目は縦糸21本×横糸23本／3ｃｍである。布とじ痕は幅2ｃｍと太い。布目は布とじ痕を境に方向が変化する。側面、端面をヘラ削りする。狭端面に藁状圧痕が残る。凸面は縦位の縄目叩きを横ナデで擦り消している。

ＨⅢ類

一枚作りで、凸面の縄目叩きを擦り消さない平瓦である。縄目叩きは縦位が多いが、斜め方向の叩きも存在する。

53は塔跡から出土した。黒褐色～灰白色を呈する。焼成は良好である。全長 32.5ｃｍ、広端部幅29ｃｍ、狭端部幅24.5ｃｍである。側面は斜めにヘラ削りする。凹面側の角を狭く面取りする。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸23本×横糸23本／3ｃｍである。糸切り痕を確認できる。凸面は縦位の縄目叩きを擦り消さずにそのまま残している。

54は金堂跡から出土した。ほぼ完形である。明青灰色を呈し、焼成は良好である。全長33.5ｃｍ、広端部幅28ｃｍ、狭端部幅23.8ｃｍである。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸21本×横糸23本／3ｃｍである。布端を凹面広端縁から2ｃｍ程度の距離に確認できる。布は成形台を完全に覆っていなかったと考えられる。また糸切り痕も確認できる。側面はヘラ削りする。凹面側の角にも狭く面取りする。布目が一部側面と狭端面に及んでおり、一枚作りによる製作であると分かる。凸面は縦位の縄目叩きを残している。

55はほぼ完形の平瓦である。塔跡から出土した。黒灰色～淡黄色を呈し、焼成は軟質である。全長33ｃｍ、広端部幅26.5ｃｍ、狭端部幅24.5ｃｍである。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸18本×横糸17本／3ｃｍで粗い。側面はヘラ削りするが、縁が丸味をおびるあまい面である。凹面の広端部、狭端部両方に面取りを施す。凸面は縦位の縄目叩きをそのまま残している。

56は金堂跡から出土した。淡黄色を呈し、焼成は良好である。全長36ｃｍ、広端部幅29ｃｍ、厚さ 2ｃｍ、狭端部幅 24ｃｍである。凹面には布目圧痕、糸切り痕、粘土板合わせ目が残る。布目は縦糸21本×横糸18本／3ｃｍである。側面はヘラ削りする。凹面側の角にも狭い面取りを施す。凹面の狭端部側にも浅くヘラ削りして面取りを施す。凸面は縄目

叩きをそのまま残している。

57は表面に煤が付着し、暗灰色を呈する。焼成は軟質である。全長35ｃｍ、広端部幅27.3ｃｍ、狭端部幅25ｃｍである。凹面は布目圧痕が残る。縦糸16本×横糸17本／3ｃｍである。側面はヘラ削りする。凹面側の角も狭く面取りする。布目が一部側面に及ぶ。一枚作りによる製作である。凸面は縦位の縄目叩きをそのまま残している。

58は灰色～暗灰色を呈し、焼成堅緻である。全長33ｃｍ、広端部幅26.5ｃｍ、狭端部幅24ｃｍである。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸17本×横糸19本／3ｃｍである。凹面の広端部側、狭端部側両方に浅くヘラ削りして面取りする。凹面に糸切り痕が残る。側面はヘラ削りする。凹面の角にも狭く面取りする。布目が一部側面に及ぶ。一枚作りによる製作である。凸面には縦位の縄目叩きを擦り消さずに残している。

ＨⅣ類

凸面に大きな斜格子叩きを施した特徴的な平瓦である。斜格子文は縦方向に連ね、中心に縦線を一本通している。斜格子文の中央に珠文を配する。一枚作りによる製作である。焼成は軟質で、暗灰色～黄色を呈する資料が目立つ。

59は塔跡から出土した。表面黒色で内部は淡黄色である。焼成は軟質である。全長35.5ｃｍである。凹面には布目圧痕を残す。布目は縦糸19本×横糸18本／3ｃｍで粗い。側面にも布目が及んでおり、一枚作りによる製作である。凹面の広端部側を浅いヘラ削りで面取りする。凸面は縦方向に連続する斜格子叩きを施す。中央を縦方向に貫く陽線を通し、斜格子文の中央に珠文を配する。斜格子文は縦3ｃｍ、横6ｃｍである。叩き板は幅約6ｃｍ、長さ約34ｃｍの長手の叩き板である。

60は黒灰色～黄色を呈し、焼成は軟質である。凸面の叩き板は幅約6ｃｍである。59と同じ叩き板が使用されている。側面にも布目圧痕が残る。凹面の布目は縦糸19本×横糸18本／3ｃｍである。

ＨⅤ類

凸面に通常の斜格子叩きを施す平瓦である。斜格子の大きさはＨⅣ類に比べると小さいが、ＨⅣ類と同じ大きさで内部に縦線や珠文のない資料も破片であるが、一点確認している。

61は凸面に斜格子叩きを施す平瓦である。焼成堅緻で、暗灰色～淡黄色を呈する。破片であり、造瓦技法は充分に検討できていない。斜格子は縦1.5ｃｍ、横3ｃｍである。重ね叩きをしているため、叩き目が二重に見える。側面はヘラ削りする。凹面側の角も狭く面取りしている。凹面には布目圧痕が残る。布目は縦糸18本×横糸18本／3ｃｍである。

(5) 鬼瓦

62は板状を呈する鬼瓦の脚部の破片である。残存高23cm、厚さ3.3cmである。全体に厚く煤が付着する。裾部はほとんど広がらず直線的に立ち上っていく形態である。内側はアーチ状を呈する。

63は板状を呈する鬼瓦上部の破片である。厚さは2.4cmである。外縁は無く、表面に文様の一部と思われる幅約1cm、深さ約8mmのV字状の溝を円弧状に刻んでいる。

第2節　土器

64は杯B蓋である。径18cm、器高3.0cmで、扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は頂部から周縁部までヘラ削りしている。口縁端部を下方に屈曲させる。天井部と口縁部の境には明瞭な稜をもたず、口縁部は丸みをもつ。色調は暗灰色を呈する。

65～69は土師器皿である。磨滅のため、調整等は観察しにくい。口縁部に横ナデを施す。口径7.2cm～9.6cm、器高2.4cm～3.0cmで小型である。塔跡北側埋土より出土した。いずれも内外面に煤が付着する。また67、69は内面に油が付着する。これらは灯明皿として使用されたと考えられる。

70は杯Aである。口径13.6cm、器高3.3cm、底径7.4cmである。体部は内外面とも回転ナデを施す。底部外面は回転ヘラ切りである。口径に対し底径が小さく体部は強く外傾して立ち上がる。色調は灰白色である。

71は杯Aである。口径12cm、器高3.7cm、底径9cmである。底部と体部の境が丸く、不明瞭である。体部は外傾して立ち上がる。体部は内外面に回転ナデ調整を施す。

72は杯B蓋である。復元径13cm、器高1.4cmである。口縁部と天井部の間に段が生じる。口縁端部を下方に屈曲させる。色調は灰白色を呈する。塔跡から出土した。

73は杯B蓋の口縁部片である。小片のため、正確な径を復元できないが、64の杯B蓋に概ね近い径と考えられる。内面にかえりをもつ。口縁端部は屈曲しない。色調は灰色である。

74は鉢Aの口縁部である。細片のため、径は復元できない。外面は磨き調整を施し、内面は横ナデを施す。この個体と接合しないが、尖底となる底部付近の破片も出土している。金堂跡から出土した。

第3節　金属製品

風鐸

75から83は風鐸である。出土点数は9点である。うち5点は1983年の調査で塔跡基壇の南側約4m～5mの地点において、相輪片等とともに出土した。4点は1984年の調査で塔跡基壇北辺下の埋土から出土した。身のみの出土で、舌、風招等は出土していない。高さ約15cm、重量は約550g～約770gで平均約645gである。いずれも鍍金は見られず、にぶい緑青色を呈する。身は下縁部に向かって直線的に開く。横断面形は菱形である。外面に稜をもつ。下縁部は4箇所（片側2箇所）で弧状に強く湾入する形態である。身外面は無文である。身上部両面に方形または長方形の孔を穿つが、78と80は片面のみに孔を穿っている。紐は高さ約2.8cm～3.3cm程度で、約8mm～1cm程度の不整形な円孔を穿つ。75、77、79、80は円孔に鉄製の吊り金具が一部残る。特に80は残りが良く、環形に残存

している。

水煙片

84～87 は銅製水煙片である。いずれも塔跡基壇の南側約 4～5mの地点において、風鐸等とともに出土した。84 と 85 は水煙先端の火焔の破片である。平面は細長い三角形状で、先端は尖るが、下端部は少し丸味を帯びる。内部を逆ハート形に刳り貫いた様な形状となっている。西条廃寺出土例は先端部の破片であるが、形状は類似する。86 と 87 は、水煙を構成する部材の破片と考えられる。86 は 1 孔、87 は 2 孔を穿つ。片面は平坦に仕上げ、片面は台形に成形する。

金銅製飾釘

88 は金銅製飾釘である。塔跡南側において出土した。全長約 5cm である。釘頭部の表面に鍍金して装飾している。釘頭部は五花弁状の平面形で稜をもつ。釘本体は上部から下部に行くほど細くなり、先端は鋭く尖る。

金銅製舎利容器蓋

89 は金銅製舎利容器蓋である。塔跡南側において出土した。直径約 5.5cm、高さ約 7mm、厚さ約 1mm～2mm で、低い円筒形である。鍍金は蓋上部外面に比較的良く残っている。外側面にもわずかに鍍金が残る。内面は鍍金をしていない。

金具片

90 は金具片である。塔跡南側において出土した。用途不明の銅製品の一部である。全長 7.8cm、幅約 5～7mm、厚さ約 2～3mm で、細長い板状を呈する。弧を描いて湾曲するが、歪みがあり正円形ではない。両端とも折損しているので、本来はさらに長い金具である。現況は一端がさらに内側に屈曲している。

第5章　まとめ

第1節　遺構

今回の発掘調査において検出された遺構は、塔跡、金堂跡、中門跡である。塔跡は一辺約 11mの石積基壇である。東辺、西辺、南辺は凝灰岩による石積であるが、北辺と東辺北端は河原石による玉石積である。地覆石は各辺とも据えていない。基壇の残存高は約 50～70cm である。基壇中央からは塔心礎抜き跡の土壙が検出された。土壙は検出長約 3.3m、深さ約 1m 程度である。塔心礎は長く原位置を保っていたが、昭和 8 年に掘り出され、別の場所に移された。凝灰岩製で、径 60cm の円形孔を有し、心柱をはめ込んでいたと考えられる。北辺からは階段痕跡と考えられる瓦を立て並べた遺構（瓦列)が検出された。検出された瓦列の写真を観察すると HⅢ類と HⅣ類の平瓦の存在を確認できる。特に補修用と考えられる HⅣ類が存在することから、この遺構は当初のものではなく補修されていることが考えられる。

金堂跡は南辺検出長 11.8m、西辺検出長 9.5mで瓦積基壇である。瓦積には地覆石は据えていない。瓦積南辺からは幅 3mに渡って階段の裏込め痕跡も検出された。瓦積基壇南辺の写真を観察すると、補修用と考えられる HⅣ類の平瓦が何段も重ねて積まれている状況が確認できる。このことから、基壇の瓦積は当初のものではなく、補修されていると考えられる。

伽藍配置は法隆寺式である。西条廃寺では金堂の正面を西に向けていたが、石守廃寺は金堂が南面する通常の法隆寺式である。但し、金堂は瓦積基壇、塔は石積基壇とするなど堂宇によって基壇の外装が異なっている点に特徴がある。中門跡は西条廃寺では掘立柱による八脚門であったが、石守廃寺では東西に延びる柵列に幅 1.2mの開閉装置を取り付けた構造であったと推定される。

第2節　出土瓦の系譜

出土遺物の圧倒多数は瓦である。今回膨大な出土瓦をすべて検討したわけではなく、比較的残りの良い資料を選択している。そのため、統計的な処理は完全なデータではない。しかし、石守廃寺の傾向を知る上で充分参考になると考える。まず、分類を行った瓦について検討したい。

分類した瓦は軒丸瓦 5 種類、軒平瓦 3 種類、平瓦 5 種類である。これらの瓦のうち、特徴のある瓦について系譜関係を検討したい。軒丸側の中で最も出土点数の多い NM Ⅰ類(細弁十六葉軒丸瓦)の出自は野口廃寺で主体を占める鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦にあるようで、この瓦を雄型とする軒丸瓦が井内古文化研究室によって採集されている（今里幾次

1989、井内潔 1990)。野口廃寺は野口町野口に所在し、同じ賀古郡に所在する古代寺院である。

ＮＭⅡ類（重圏文軒丸瓦）の出自は後期難波宮である。この瓦の出現年代は「神亀 3 年（726）から天平 6 年（734）にかけての聖武朝難波宮造営を契機として新たに案出されたデザイン」であるとされる（中尾芳治 1972)。また、「重圏文軒瓦の組み合わせは難波宮・平城・長岡・平安の各宮跡など畿内を中心として、伊勢、播磨、備後、安芸、阿波などにその分布がみられるが、出土遺跡に国分寺、国衙、郡衙、駅館など官衙的な性格をもつものが多いことは、重圏文軒瓦の官衙的性格を示唆するものとして興味深い」とされ（中尾芳治 1972)、官衙を通じて広がる例の多いことが示されている。重圏文軒瓦の地方への広がりについては「国分寺造営の頃に各地に拡がると共に多様化し」たと推定されている（伊藤玄三 1973)。また、その分布範囲は「陸奥、上総、甲斐、伊勢、紀伊、淡路、阿波、備後、安芸などの国々」に及び（村井喜道 2009)、畿内のみならず東北、関東から中国、四国地方にまで拡散している。石守廃寺の重圏文軒丸瓦についても、これら多方面に及ぶ地方への拡散の一例として捉えることができるだろう。

ＮＭⅢ類（変形重圏文軒丸瓦）は出土点数が少なく、補修用と考えられる。文様は特異であり、正確な系譜は不明であるが、播磨国府系瓦の北宿式軒丸瓦の文様構成と似ている点があり、この瓦の文様が崩れたものである可能性が考えられる。

ＮＭⅣ類は出土点数一点で、小破片のため全体の形状を知ることが出来ない。塔・金堂ではあまり使用されていないと考えられる。系譜は不明である。

ＮＭＶ類も出土点数は少ない。塔・金堂においては補修用として使用されたものであろう。単弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、正確な系譜は不明である。外縁が素文の直立縁であることや蓮弁を縁取ること、中房圏線の径が小さいことが、播磨国府系瓦の毘沙門式軒丸瓦に似た特徴である。珠文帯がないなど標準点な毘沙門式とは異なる点もあるが、印象的な判断では毘沙門式の文様が崩れた瓦であろう。

ＮＨＩ類（斜格子文軒平瓦）は瓦当面に斜格子文を叩き板で施文する軒平瓦である。桶巻き作りであり、出土点数も多いことから主要伽藍で主体的に用いられた軒平瓦であると考えられる。顎は貼り付け段顎である。近隣から同じ瓦当文様の瓦は出土していないが、加西市吸谷廃寺、殿原廃寺、小野市河合廃寺など近隣で出土している貼り付け段顎の重弧文軒平瓦の系譜を引いていると思われる。加古川市内では中西廃寺からも段顎の重弧文軒平瓦が出土している。

ＮＨⅡ類（変形唐草文軒平瓦）は一枚作りによる製作で、石守廃寺の出土瓦での中では重量感があり、厚手の瓦である。瓦当文様は大きく変形した唐草文様であり、類例は掴めていない。系譜は不明である。

ＮＨⅢ類（忍冬均整唐草文軒丸瓦）は石守廃寺から約 1.5ｋｍ離れた西条廃寺から同笵の軒平瓦が出土している。西条廃寺創建期の軒平瓦である。この瓦は西条廃寺からもたらされたものと考えられる。石守廃寺における出土点数は極少なく、いつ頃どのような形でも

たらされたかは明確ではない。

ＨＩ類は桶巻き作りによる製作で、凸面にジグザグの縄目叩きを施す特徴的な平瓦である。加古川中流域における出土例が多く、加西市繁昌廃寺、小野市大寺廃寺、広渡廃寺などでも出土している。また河内地方でも多く出土しているという。加古川中流域と石守廃寺の関係を示唆する瓦であると考えられる。

第３節　出土瓦の時期

次に主要な瓦の時期について検討してみたい。

石守廃寺創建期の軒瓦と考えられるのはＮＭＩ類（細弁十六葉軒丸瓦）とＮＨＩ類(斜格子文軒平瓦)である。ＮＭＩ類は野口廃寺で最も出土数の多い鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦から派生したと考えられる。軒丸瓦の中で最も出土数が多く、塔跡・金堂跡の双方から出土する。これと組む軒平瓦がＮＨＩ類であろう。出土数が多い軒平瓦の中で、唯一桶巻き作りによる製作であり、これも塔・金堂の双方から出土している。この組み合わせが創建期瓦と考えられる。

平瓦ではＨＩ類～ＨＶ類まで分類しているが、桶巻き作りによるＨＩ類(凸面にジグザグ方向の叩き目を残す平瓦)とＨⅡ類が古い時期の平瓦と考えられる。ＨⅡ類は凸面の縦位縄目叩きを擦り消すタイプの平瓦であるが、ＮＨＩ類の平瓦部を観察すると、凸面は縦位の縄目叩きを擦り消している資料がしばしば見られる。ＨⅡ類がＮＨＩ類の平瓦部に使用されていると考えられる。ＨＩ類については、軒平瓦の平瓦部に使用されている例は確認出来ていない。これらの軒瓦と平瓦の時期は少し年代幅を持たせて８世紀前葉頃と考えておきたい。これを第一期瓦とする。ＮＨⅢ類とした西条廃寺と同笵の忍冬均整唐草文軒平瓦も製作時期はこの時期に該当する。しかし、石守廃寺においてはごくわずかしか出土しておらず、創建期にもたらされたものか、何らかの事情で後になってもたらされたものかは判断できない。

次の時期の瓦と考えられるのは、ＮＭⅡ類（重圏文軒丸瓦）である。この瓦は先の系譜関係の検討の中でも記述したように、後期難波宮の建設に当たって創出された瓦当文様で、地方への拡散は８世紀中頃～後半頃であるらしい。これと組む軒平瓦と考えられるのがＮＨⅡ類(変形唐草文軒平瓦)である。出土点数が多く、傍系の瓦とは考えられない。一枚作りによる製作である。顎部の形態は曲線顎で、凸面は狭端部までヘラ削りを施しているが、わずかに縄目叩きの痕を残す資料が存在する。ＨⅢ類（凸面に縄目叩きを残す平瓦）は出土数が非常に多く、一枚作りによる製作で、全長や幅も概ね合うため、平瓦部には基本的にこのタイプが使用されているのではないかと考えられる。NMⅡ類と NHⅡ類を第二期瓦とする。時期は８世紀中頃～後半頃と考えたい。HⅢ類もこの時期からの製作と考えられる。

次に第三期の瓦と考えられるのが、NMⅢ類、ＮＭＶ類、HⅣ類などの出土数の少ない塔・金堂では補修用として使用されたと考えられる瓦類である。具体的な時期を検討する材料は乏しいが、NMⅢ類は瓦当文様が播磨国府系瓦の北宿式軒丸瓦と似た点が見られる。また、

NMV類は同じく播磨国府系瓦の毘沙門式軒丸瓦と似た点が見られる。これらの瓦は播磨国府系瓦の瓦当文様が崩れた文様であると思われる。HⅣ類は凸面に大きな斜格子の叩き目を残す点が特徴的で、一枚作りによる製作である。色調や胎土、焼成にNMV類と類似する資料が目立つ。これらを第三期瓦とし、平安時代頃と考えたい。

第4節　出土土器の時期

次に出土した土器の時期について検討したい。64の杯B蓋、71の体部と底部の境が不明瞭な杯A、73の内面にかえりをもつ杯B蓋の3点は形態的に古い資料である。時期は8世紀を前後する頃であると考えられる。65～69の小型の土師器皿は形態の変化が乏しい器種で、時期は決めがたいが、塔跡埋土から出土していることから、寺院において灯明皿として使用されたものと考えたい。70の杯Aは口径に対し底形が小さく、体部が大きく開く。72の杯B蓋は口縁部と天井部の間に段が生じ、口縁端部を下方に屈曲させる。74の鉢Aは外面に磨き調整を施している。これらの須恵器は時期的に幅があるが、8世紀中頃～9世紀頃の土器である。

第5節　瓦の出土傾向

次に出土した瓦の傾向について、検討してみたい。表は出土瓦の塔・金堂別の出土点数を示している。遺跡全体における瓦の出土量は膨大であり、これは整理を実施した資料に

瓦名称	塔跡出土数	金堂跡出土数	合　　計
NMⅠ類	54	30	84
NMⅡ類	9	15	24
NMⅢ類	2	4	6
NMⅣ類	0	1	1
NMⅤ類	3	17	20
NHⅠ類	11	7	18
NHⅡ類	4	41	45
NHⅢ類	2	0	2
HⅠ類	1	1	2
HⅡ類	11	13	24
HⅢ類	22	28	50
HⅣ類	2	3	5
HⅤ類	1	0	1

基づくサンプル表である。

この表から、ＮＭＩ類(細弁十六葉蓮華文軒丸瓦)とＮＨＩ類(斜格子文軒平瓦)の創建期瓦が塔・金堂双方から出土していることが確認できる。また、ＨＩ類(凸面にジグザグ方向の叩き目を残す平瓦)とＨⅡ類(凸面の縄目叩きを擦り消す平瓦)の桶巻き作りによって製作された平瓦も塔・金堂双方から出土している。一方、ＮＨⅡ類（変形唐草文軒平瓦）は圧倒的に金堂からの出土である。

これと組みあうＮＭⅡ類（重圏文軒丸瓦）は塔・金堂双方から出土するが、金堂からの出土数が多い。ＮＨⅡ類はその多くが金堂で使用されたと考えられる。また注目すべき点はこの瓦には凸面に赤色顔料が付着する資料が 18 点と多く見られることである。これは建物を朱色に塗る際に付着したと考えられる。よって、ＮＨⅡ類は単なる補修瓦でなく、金堂の大きな改修などに際して製作された瓦である可能性がある。平瓦ではＨⅢ類(凸面に縄目叩きを残す平瓦)の出土量の多さが目立つ。これは塔・金堂ともに出土している。ＮＭＶ類（単弁八葉蓮華文軒平瓦）は補修用と考えているが、金堂での出土が目立つ。

ＮＭＩ類は蓮子が 1＋8 のＮＭＩＡ類と 1＋7 のＮＭＩＢ類に分類しているが、ＮＭＩＡ類はさらに中房内の笵傷の進行によって三段階に細分することが出来る。NMＩA1 類(あまり目立つ笵傷は無く、一条線の短い笵傷を確認する程度である)→NMＩA2 類(平行する 3 条～4 条程度の笵傷を確認できる)→NMＩA3 類（笵傷により蓮子が一箇所連結する)。これらの出土地点を示したものが下表である。

瓦名称	塔跡出土数	金堂跡出土数	合　　計
NMＩA1 類	5	3	8
NMＩA2 類	5	3	8
NMＩA3 類	4	1	5

資料数は NMＩＡ類の出土資料の中で、笵傷を判別できる資料に限られるため、サンプル数としては少ない。表を見ると当初の段階である NMＩA1 類と笵傷の進んだ NMＩA2 類では、塔・金堂双方で出土している状態が確認できる。最も笵傷の進行した NMＩA3 類では、塔からの出土が多くなり、金堂は少ない。

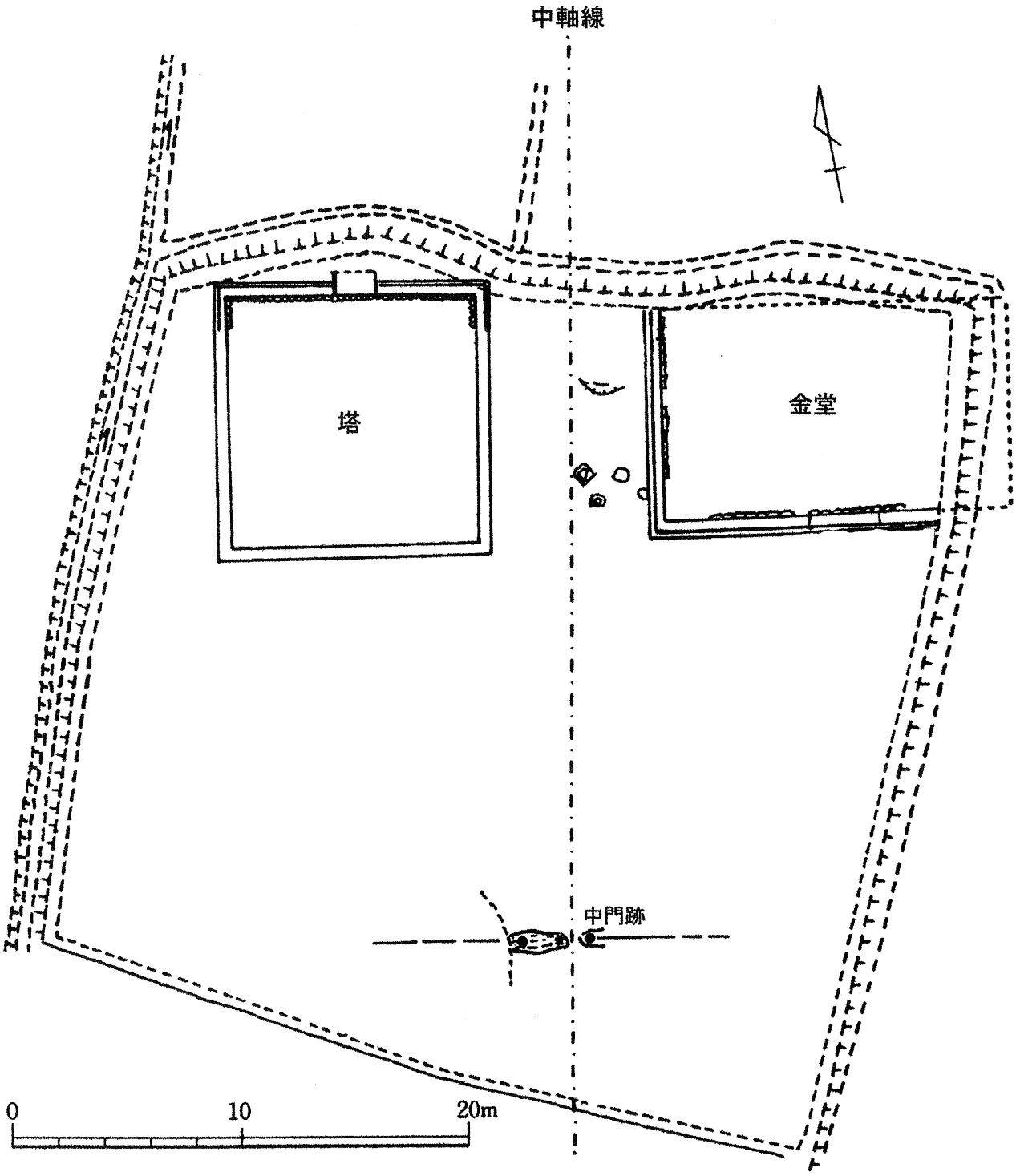
堂宇の一般的な築造順序は金堂→塔であると考えられている。上の表は資料数が少ないため、この結果をもって堂宇の築造順序を金堂→塔であると断定することは強引な解釈となるかもしれない。しかし、少なくとも金堂→塔という順序で築造されたことを否定する結果ではないという程度の事は言えるであろう。

石守廃寺については、平成 12 年度に加古川市教育委員会が塔・金堂の北側を発掘調査している。また、兵庫県教育委員会による発掘調査も行われており、これについてはすでに報告書も刊行されている。寺院の全体的な判断は寺域北側も加えた次回刊行の報告書において検討することとしたい。

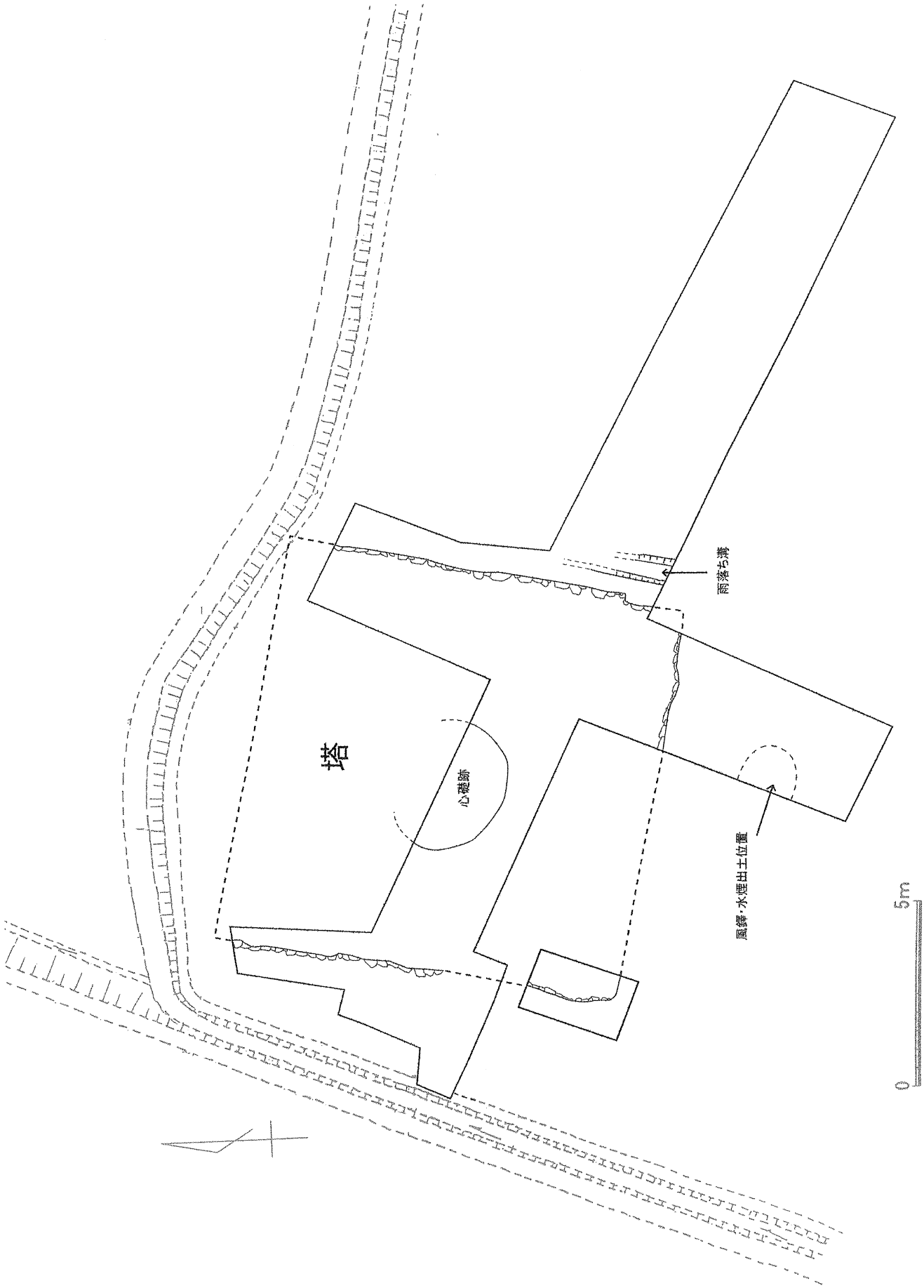
引用・参考文献

井内潔『東播磨古代瓦聚成』井内古文化研究室 1990 年
伊藤玄三「重圏文系軒瓦の製作年代の下限」『思想第 16 号』1973 年
今里幾次「石守廃寺」『加古川市史第一巻』加古川市 1989 年
今里幾次『播磨古瓦の研究』1995 年
石見完次『東播磨の民俗・加古郡石守村の生活誌』1984 年
岡本一士「石守廃寺」『文化財ニュース№27』加古川市教育委員会 1984 年
岡本一士「石守廃寺発掘調査終る」『文化財ニュース№28』加古川市教育委員会 1985 年
岡本一士「石守廃寺跡」『兵庫県史　考古資料編』兵庫県 1992 年
鎌谷木三次「播磨国石守廃寺」『兵庫史学第 18 号』1958 年
高井悌三郎・菱田哲郎他『播磨繁昌廃寺』加西市教育委員会 1987 年
中尾芳治「重圏文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」『難波宮跡研究調査年報』1971 年
中尾芳治・長山雅一郎・八木久栄『難波宮址の研究第 10』大阪市文化財協会 1995 年
長濱誠司『石守廃寺』兵庫県教育員会 2008 年
西口和彦・岡本一士『西条廃寺発掘調査報告書』加古川市教育委員会 1985 年
村居喜道「軒瓦製作技法から復元する奈良時代の瓦生産・供給体制」『名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報ｖｏL2』2008 年
森内秀造『志方窯跡群Ⅱ投松支群』兵庫県教育委員会 2001 年
吉識雅仁・中村弘『白沢放山遺跡（白沢 6 号窯跡）発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1998 年

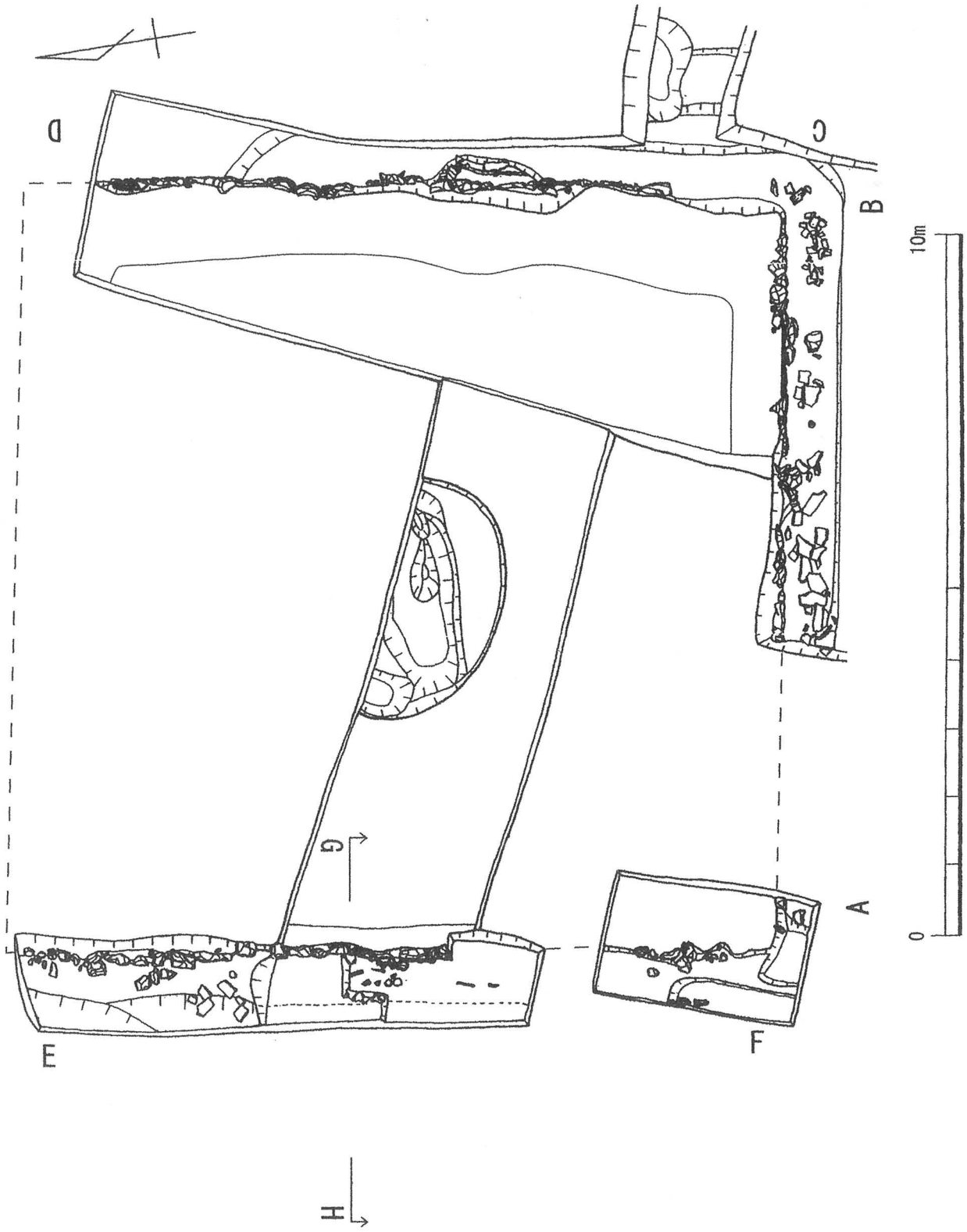
図　　版



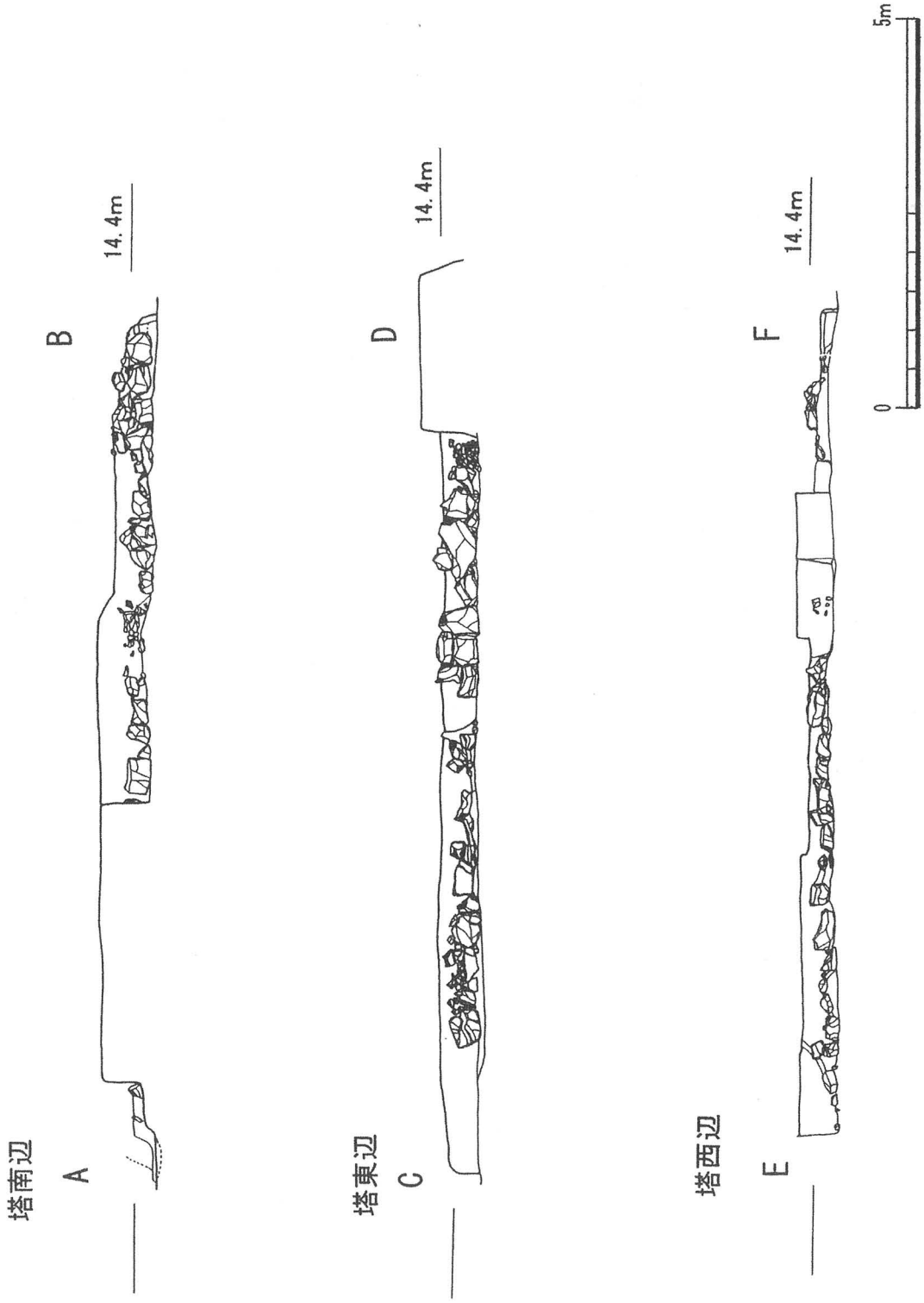
第２図　石守廃寺伽藍配置図



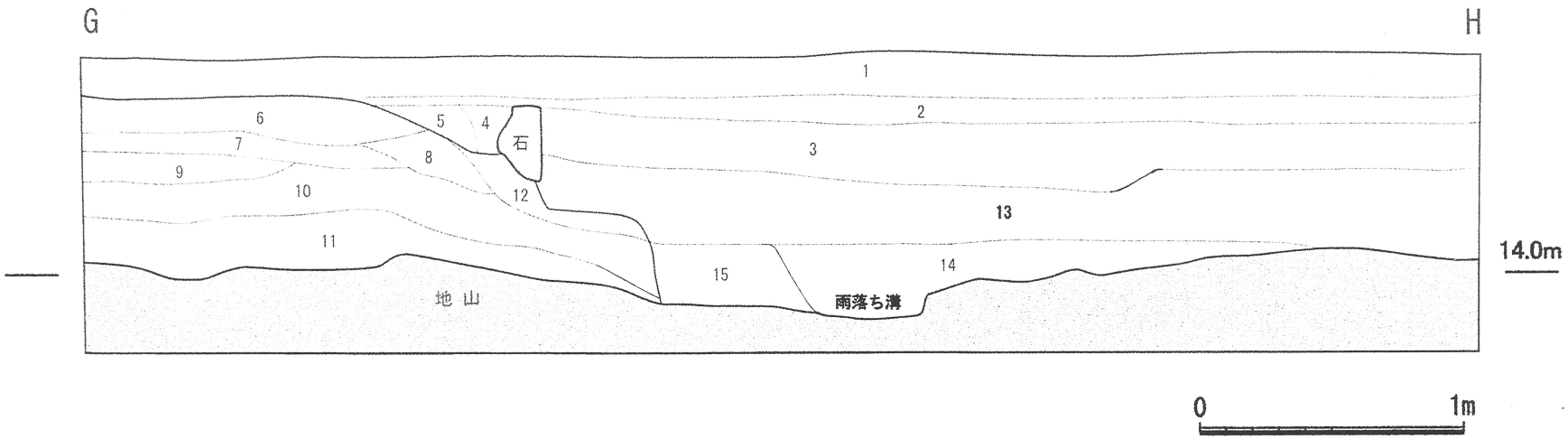
第3図　昭和58年度調査トレンチ配置図



第 4 図　塔跡平面図（昭和 58 年度調査）



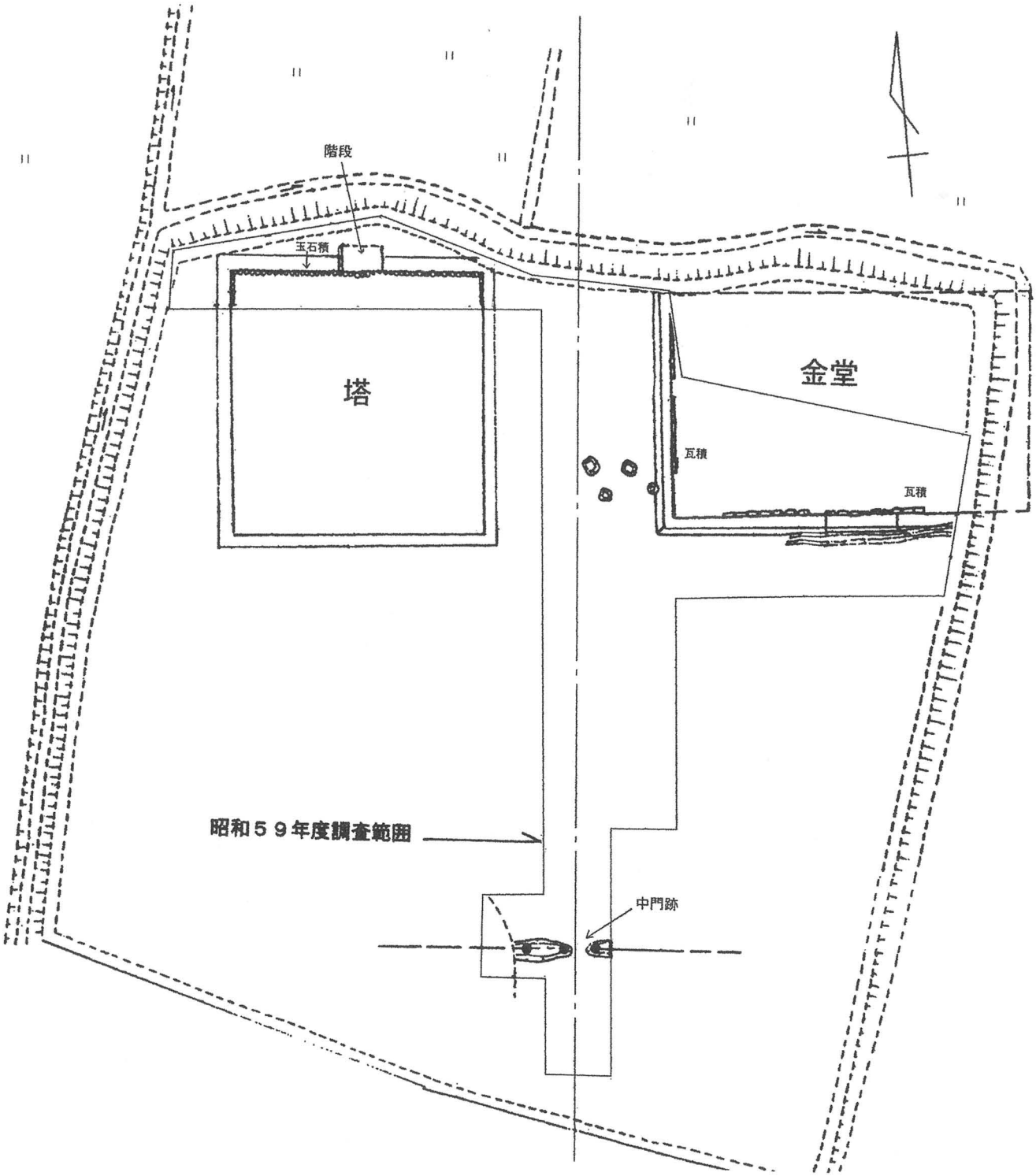
第5図　塔跡基壇実測図（昭和58年度調査）



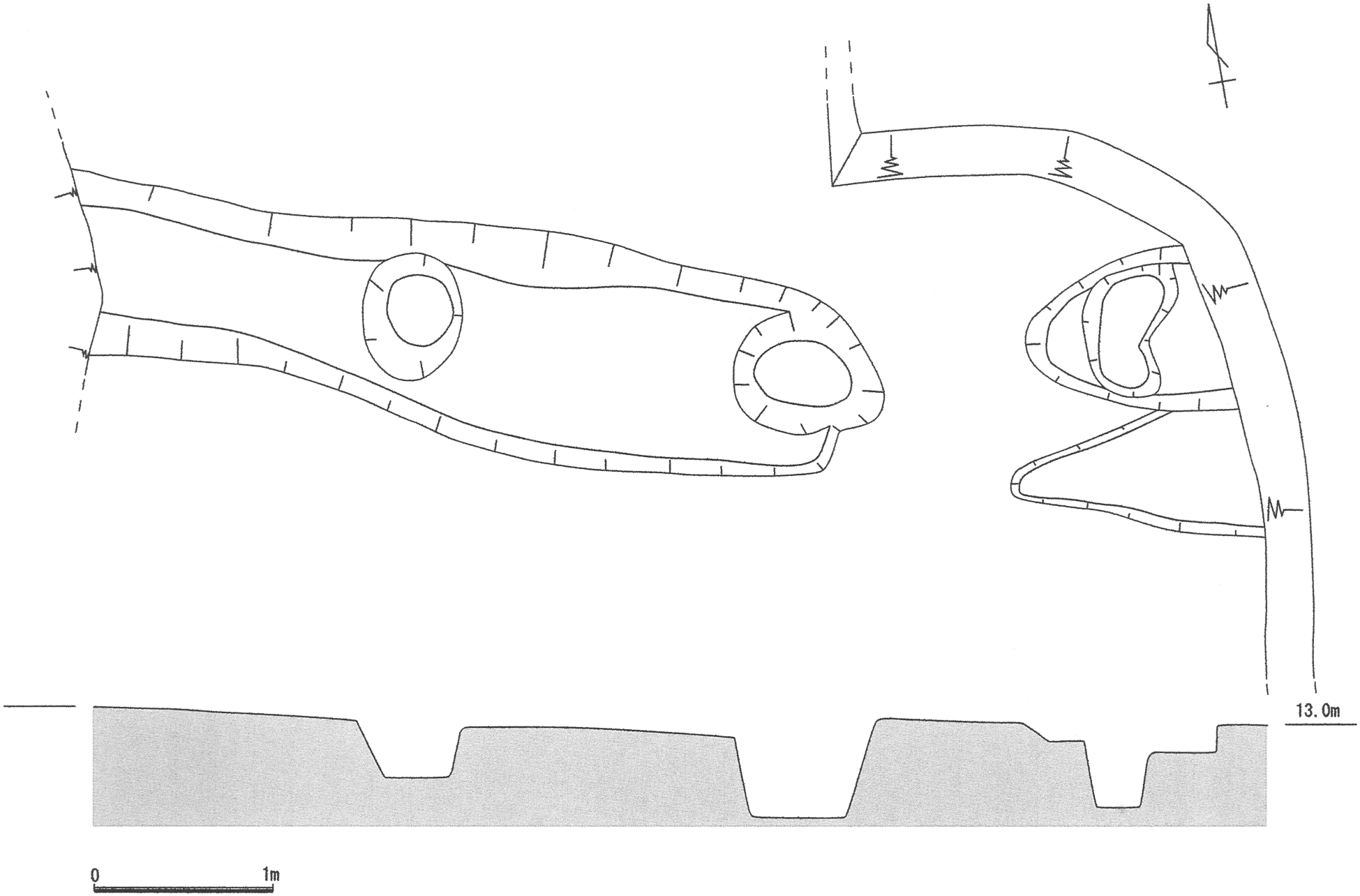
1. 表土
2. 黄灰褐色砂質土(床土)
3. 淡黄灰色粘質土(瓦・包含層)
4. 黄褐色粘質土
5. 灰色粘質度
6. 赤褐色粘質土
7. 淡赤褐色粘質土
8. 暗黄褐色砂質土(炭混り)
9. 暗灰褐色粘質土
10. 灰黄褐色粘質土
11. 暗黄褐色粘質土
12. 暗赤褐色粘質土
13. 灰褐色粘質土
14. 暗灰褐色粘質土
15. 黄褐色砂質土

基壇積土

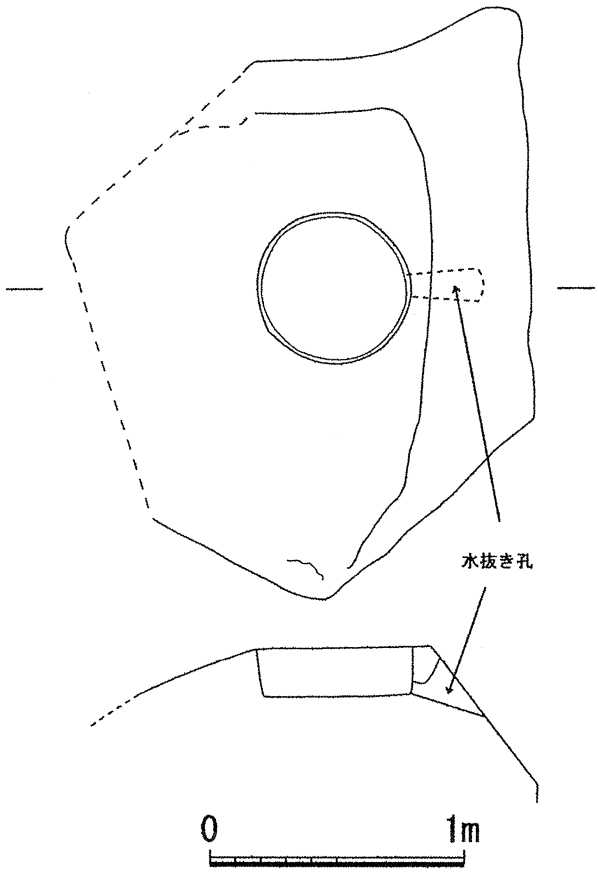
第６図　塔跡基壇西辺サブトレンチ南壁土層断面図



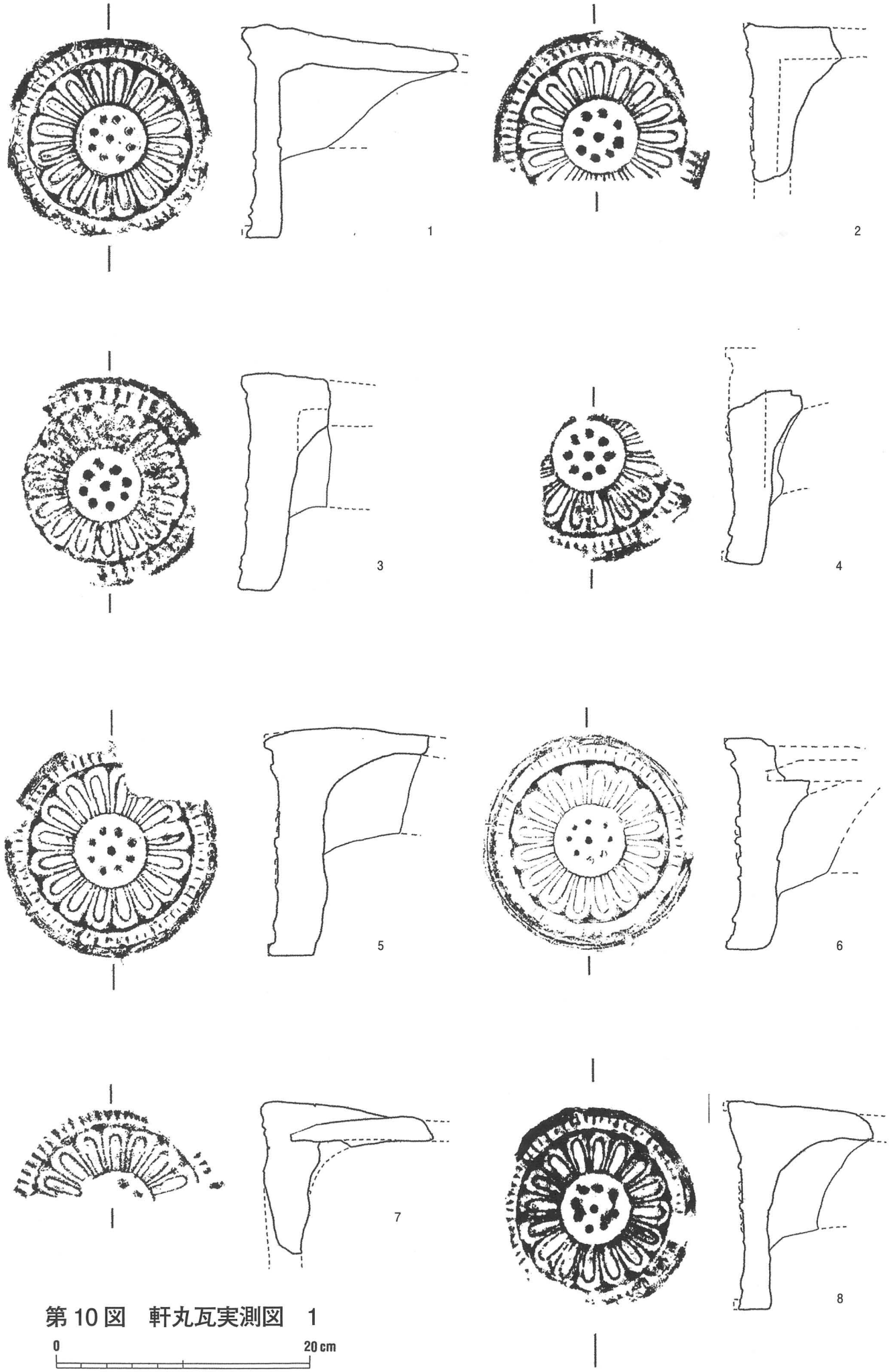
第７図　昭和 59 年度調査地及び伽藍配置図



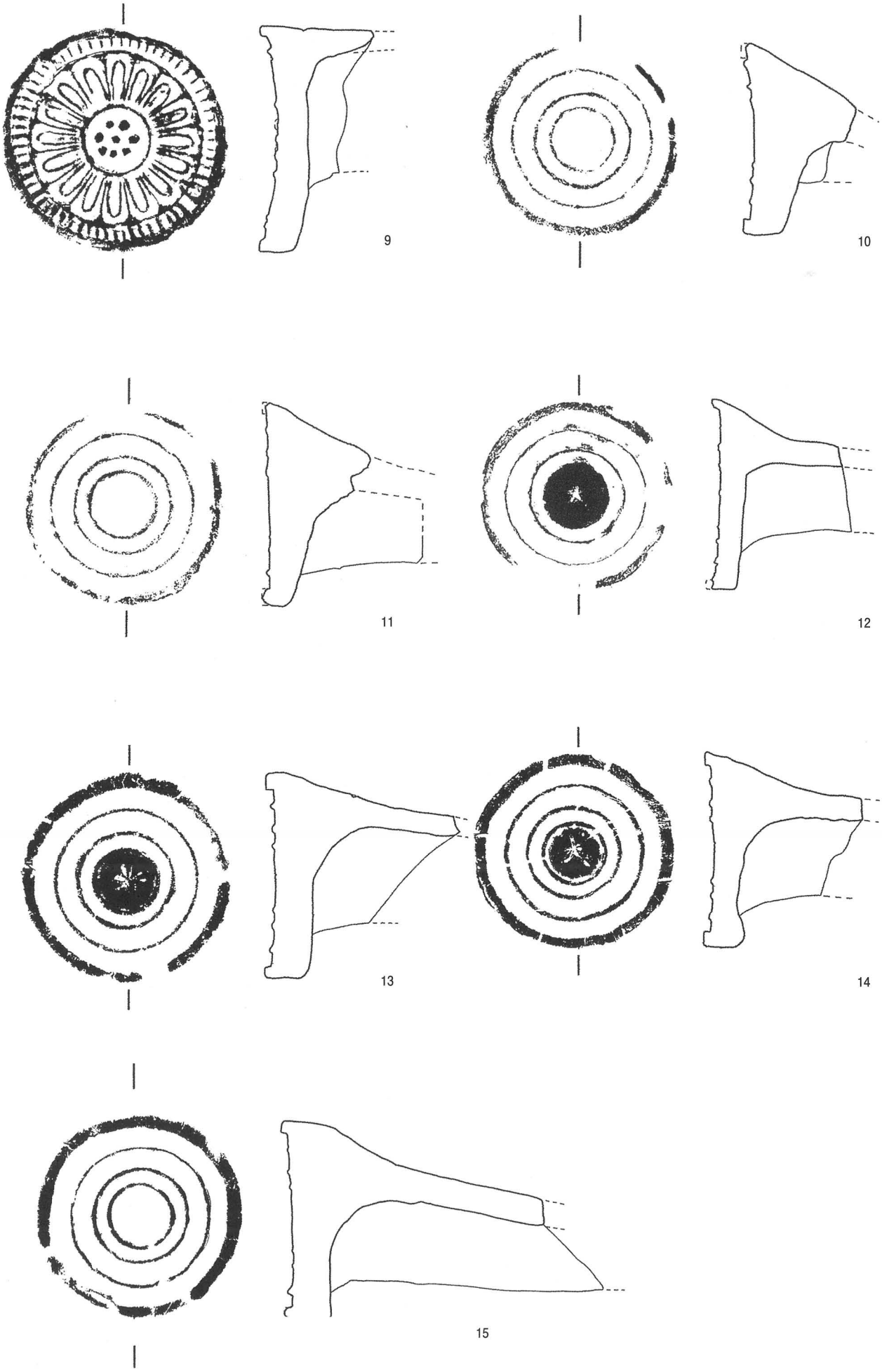
第8図　昭和59年度調査　中門跡平面図・断面略図



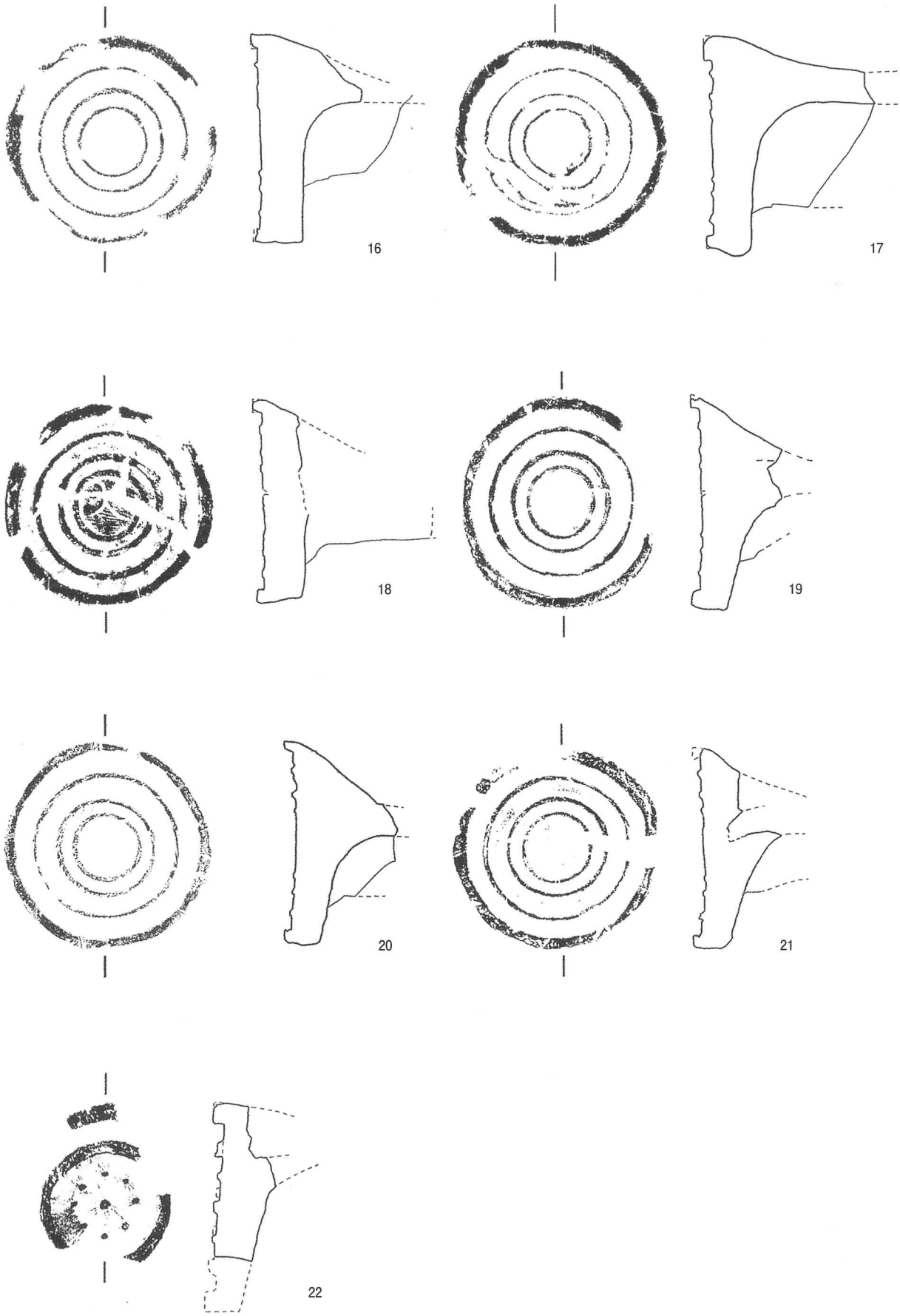
第９図　塔心礎略測図



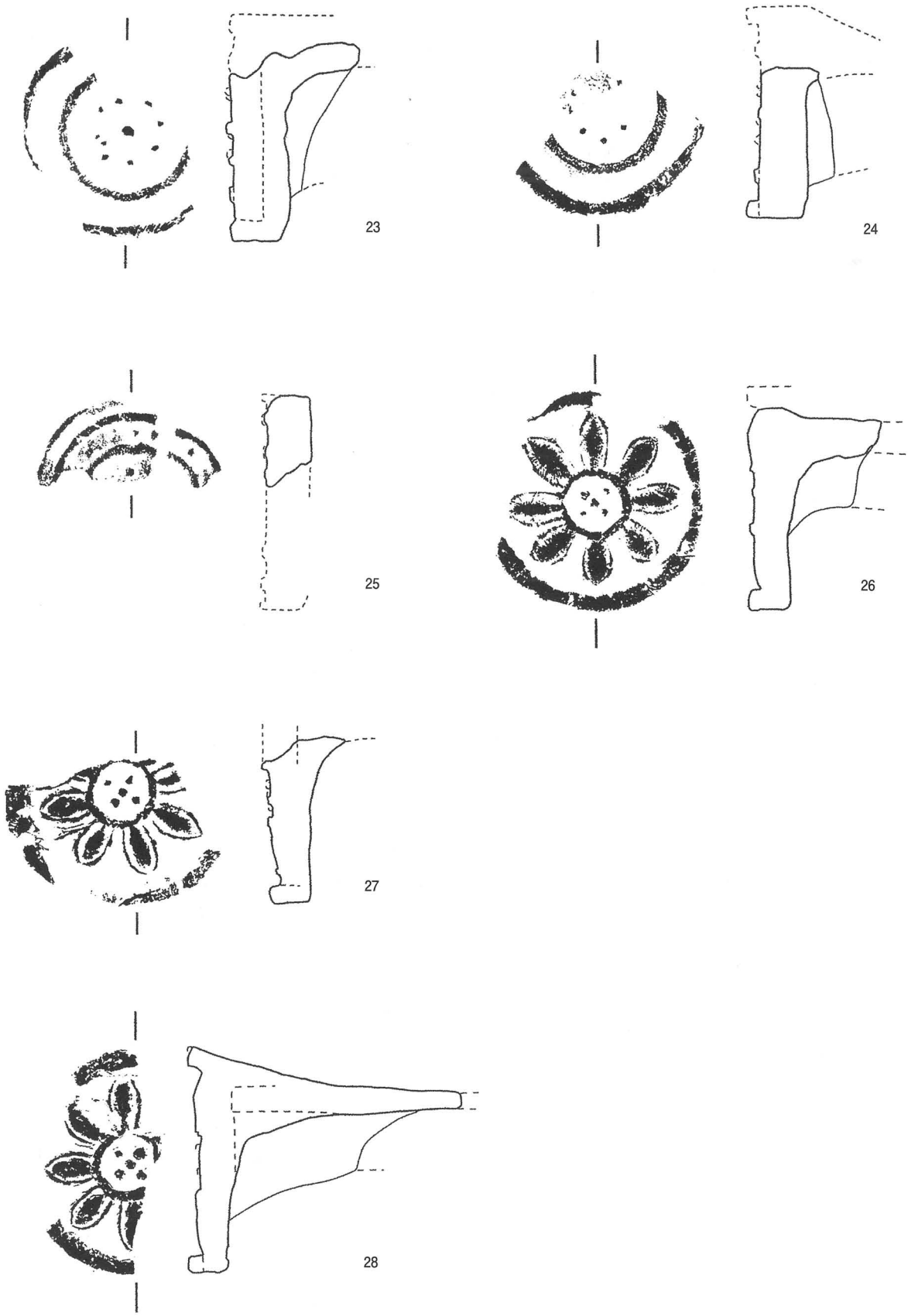
第 10 図　軒丸瓦実測図　1



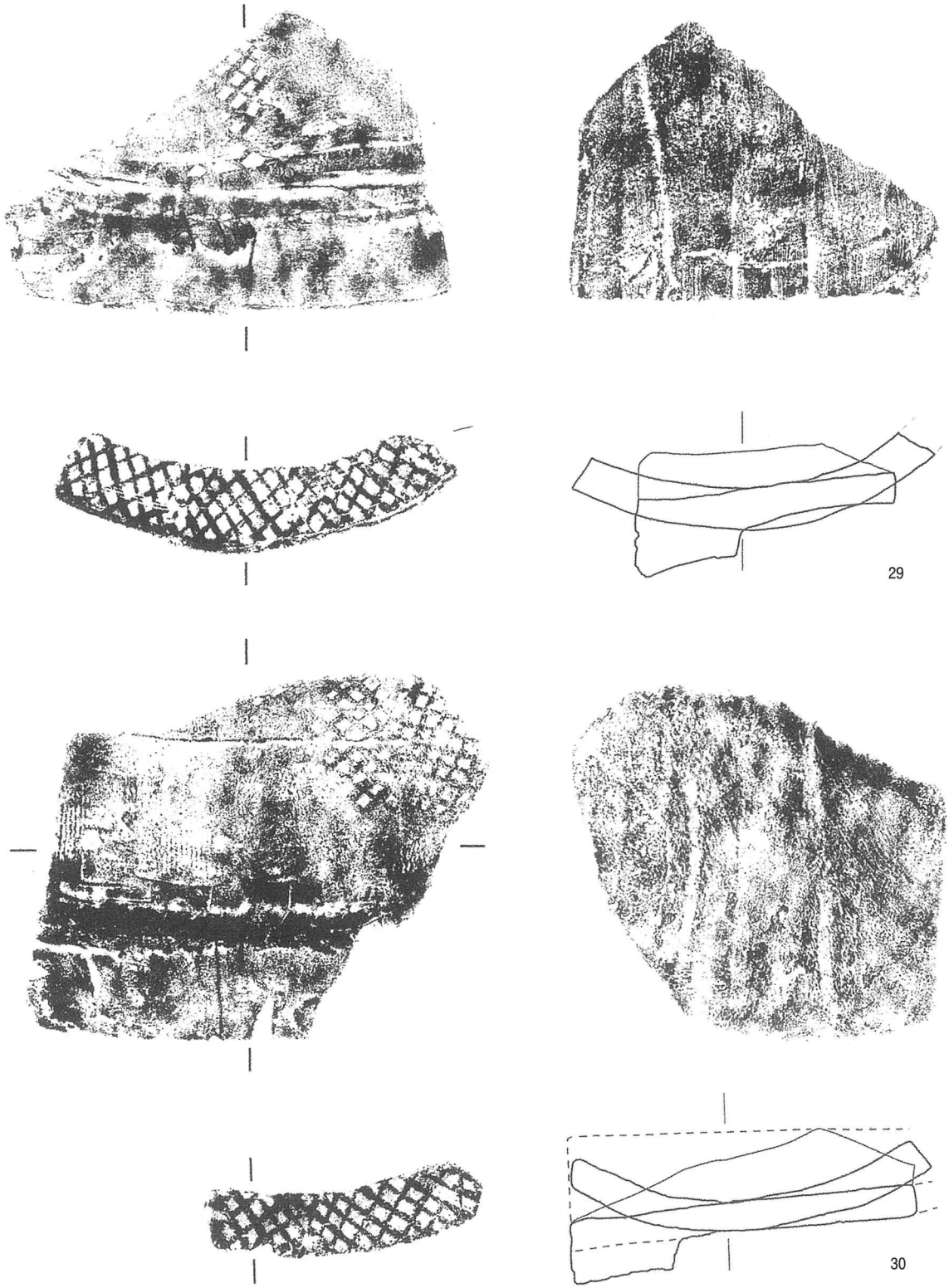
第 11 図　軒丸瓦実測図　2



第12図　軒丸瓦実測図　3

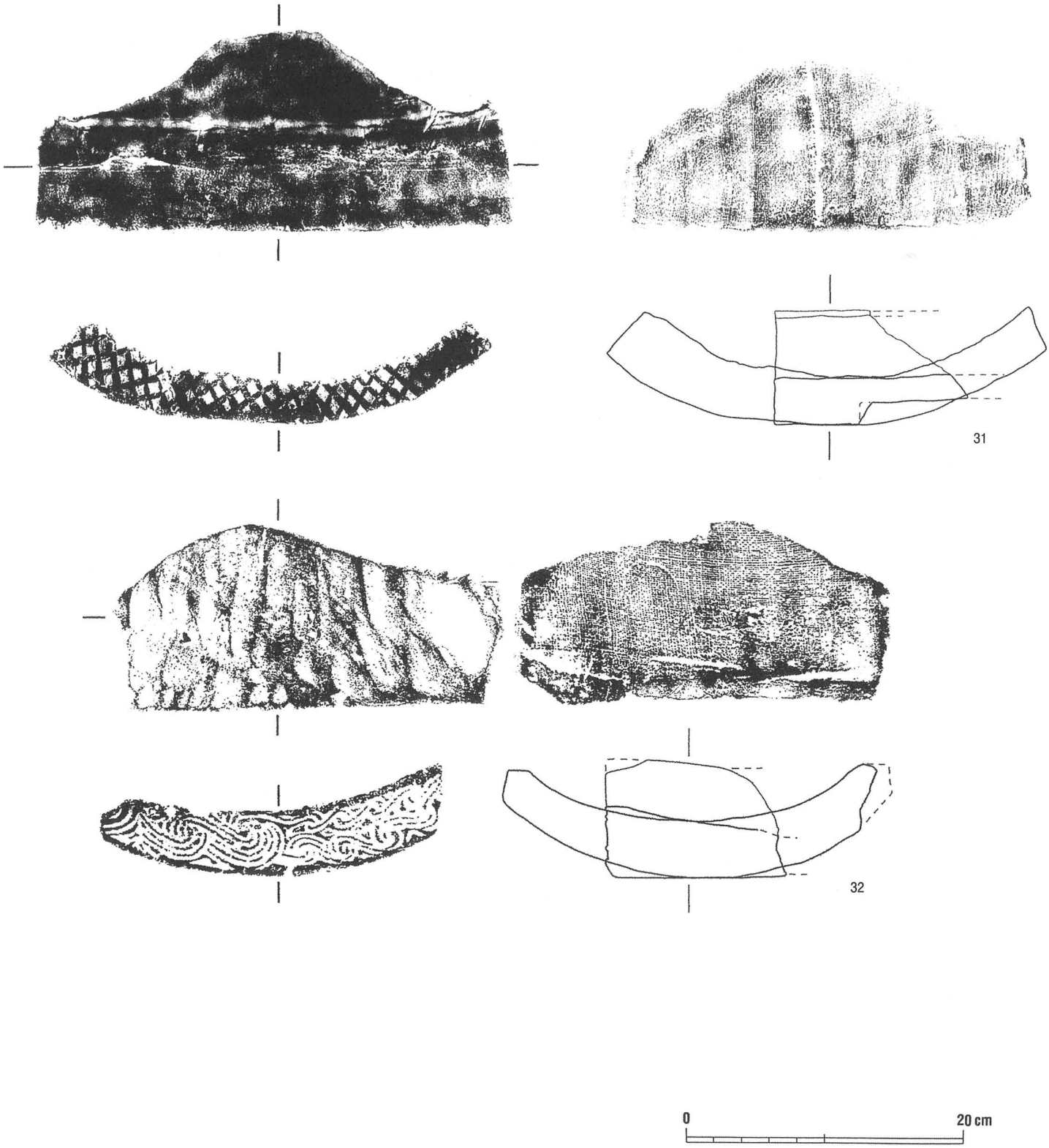


第13図　軒丸瓦実測図　4

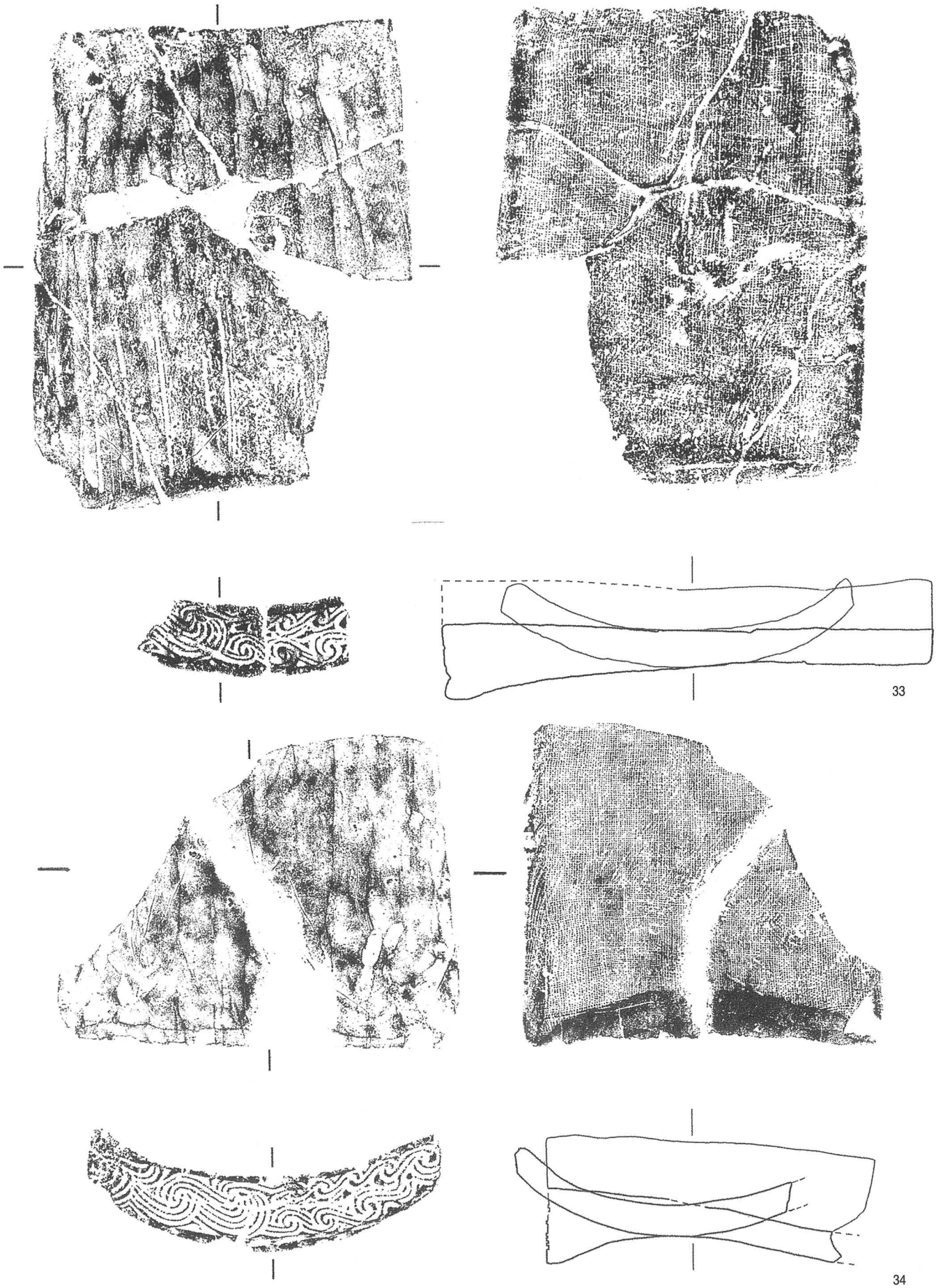


第14図　軒平瓦実測図　1

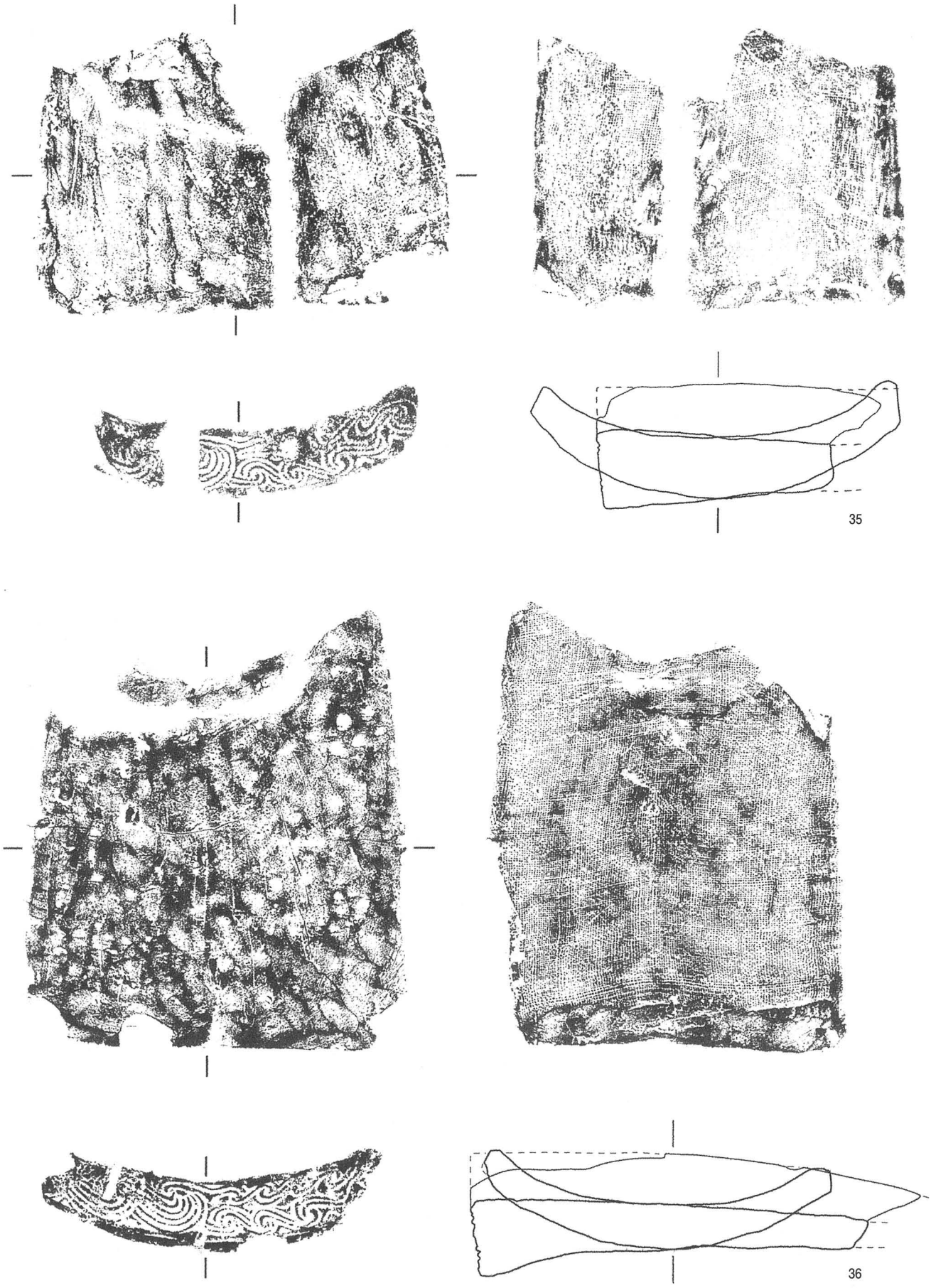
0　20 cm



第15図　軒平瓦実測図　2

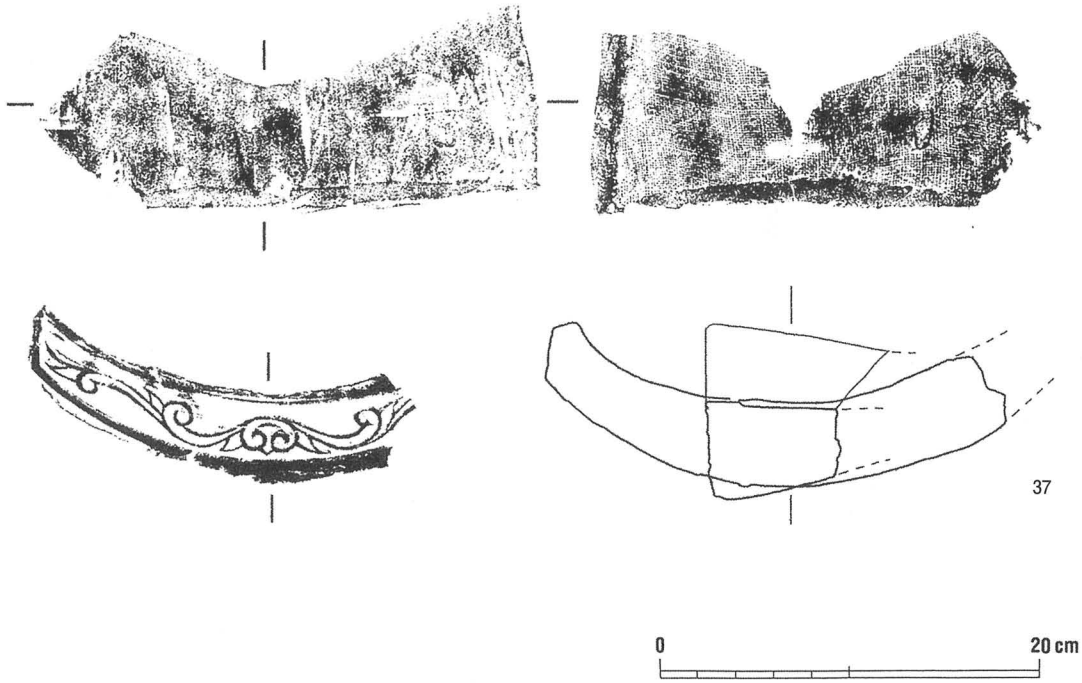


第 16 図　軒平瓦実測図　3

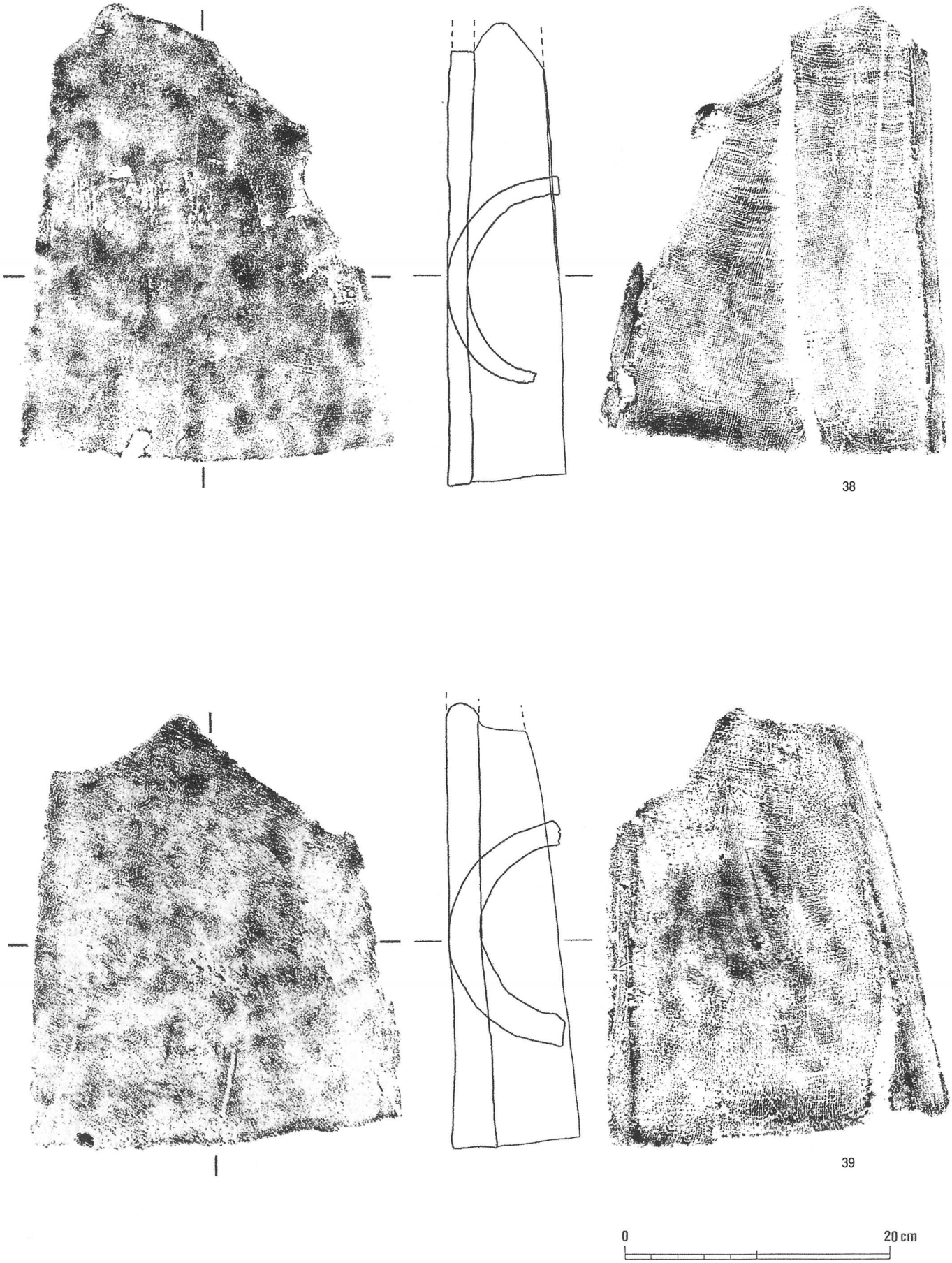


第 17 図　軒平瓦実測図　4

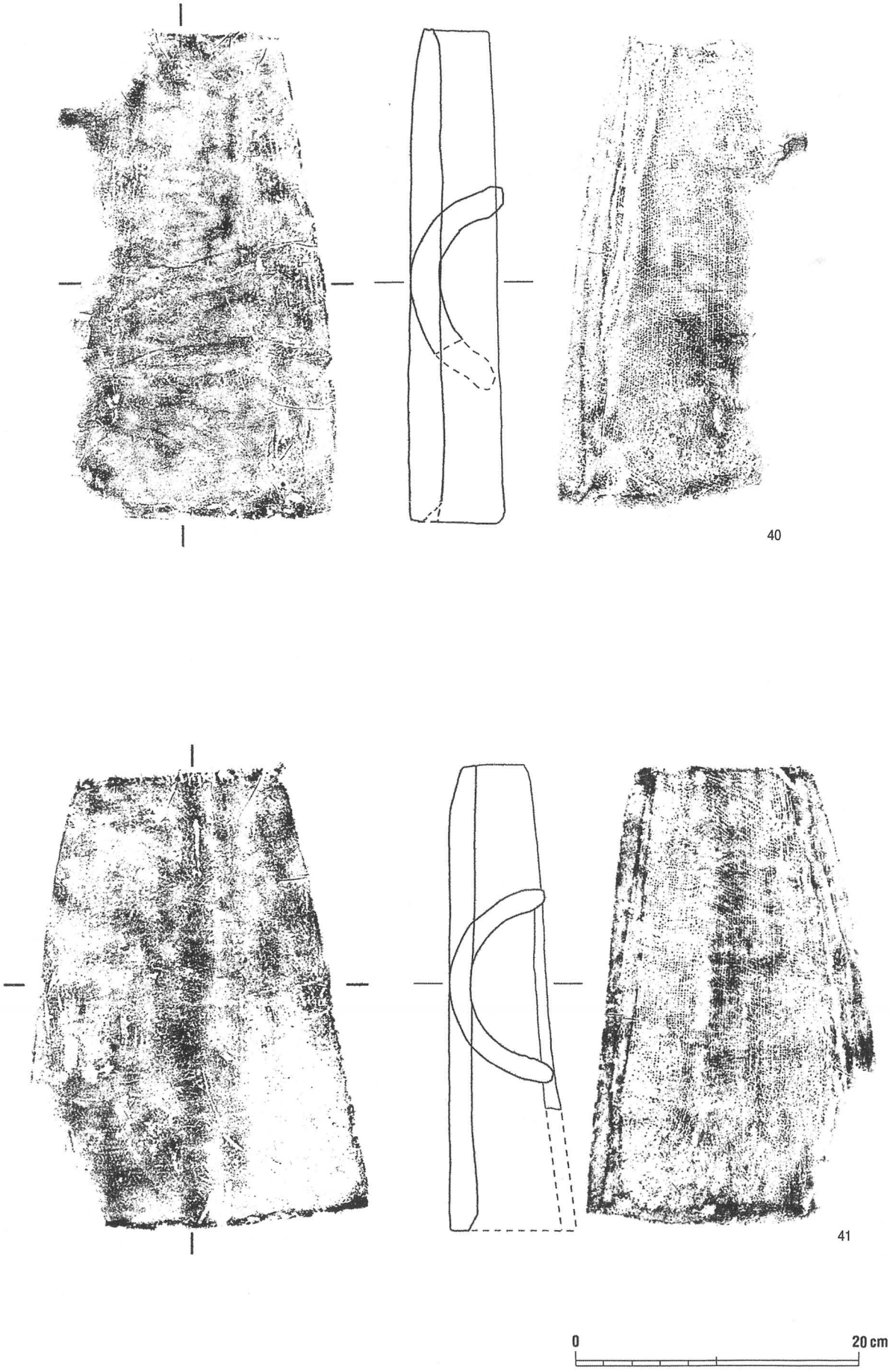
0　20 cm



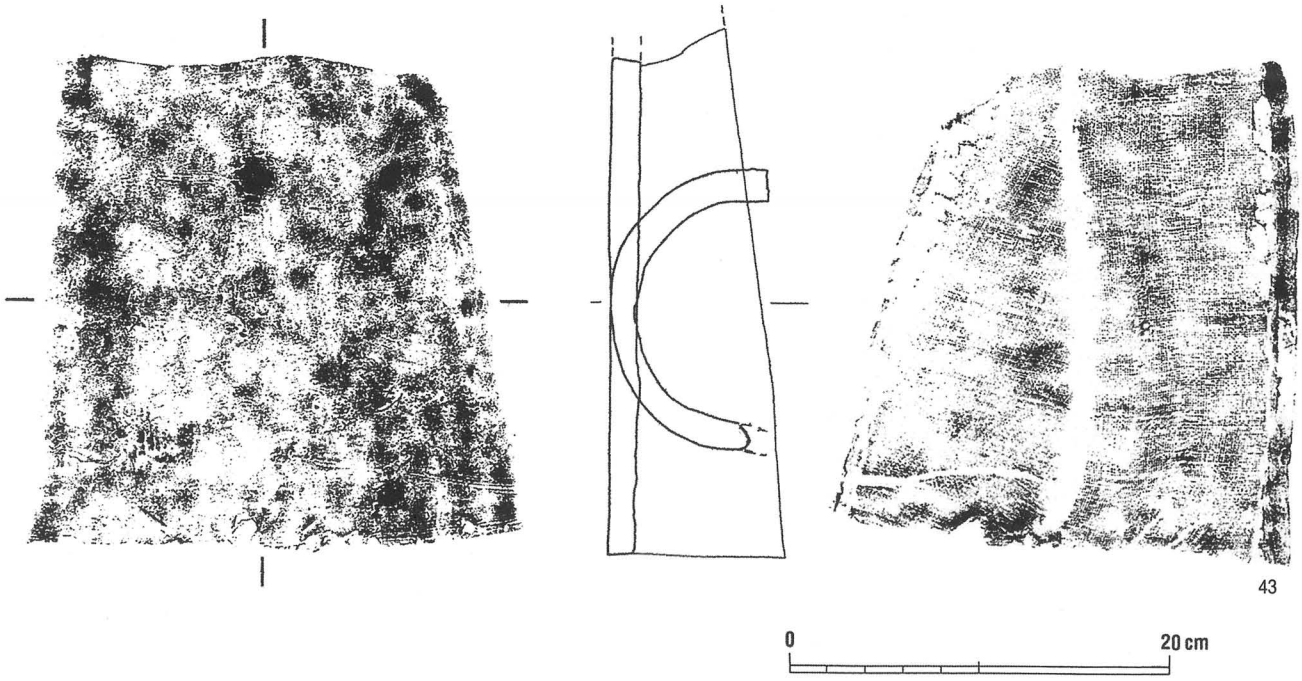
第18図　軒平瓦実測図　5



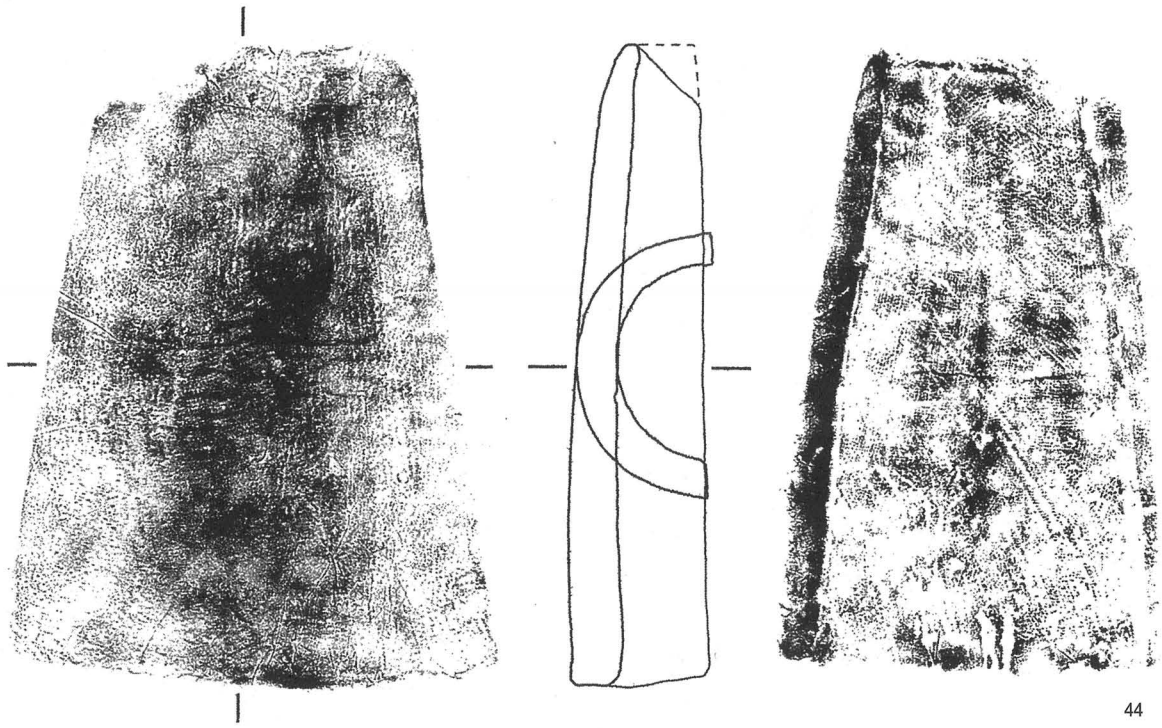
第19図　丸瓦実測図　1

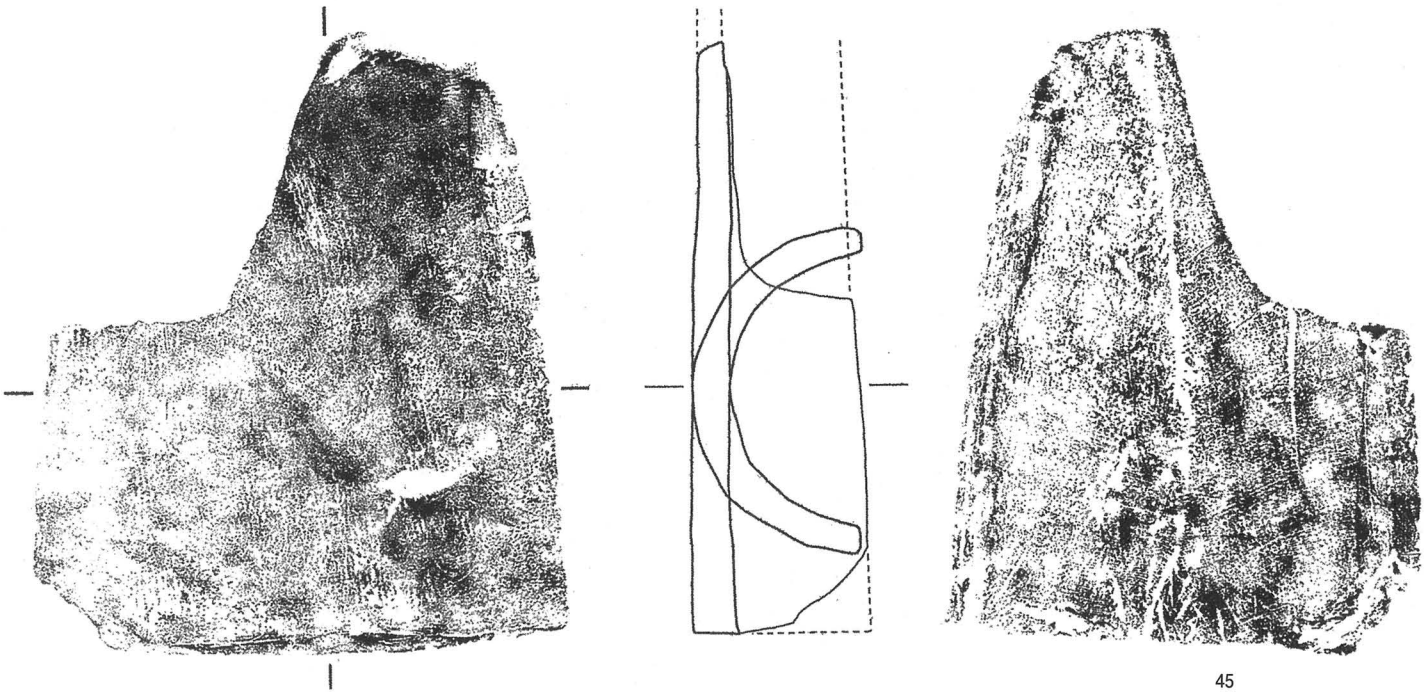


第20図　丸瓦実測図　2



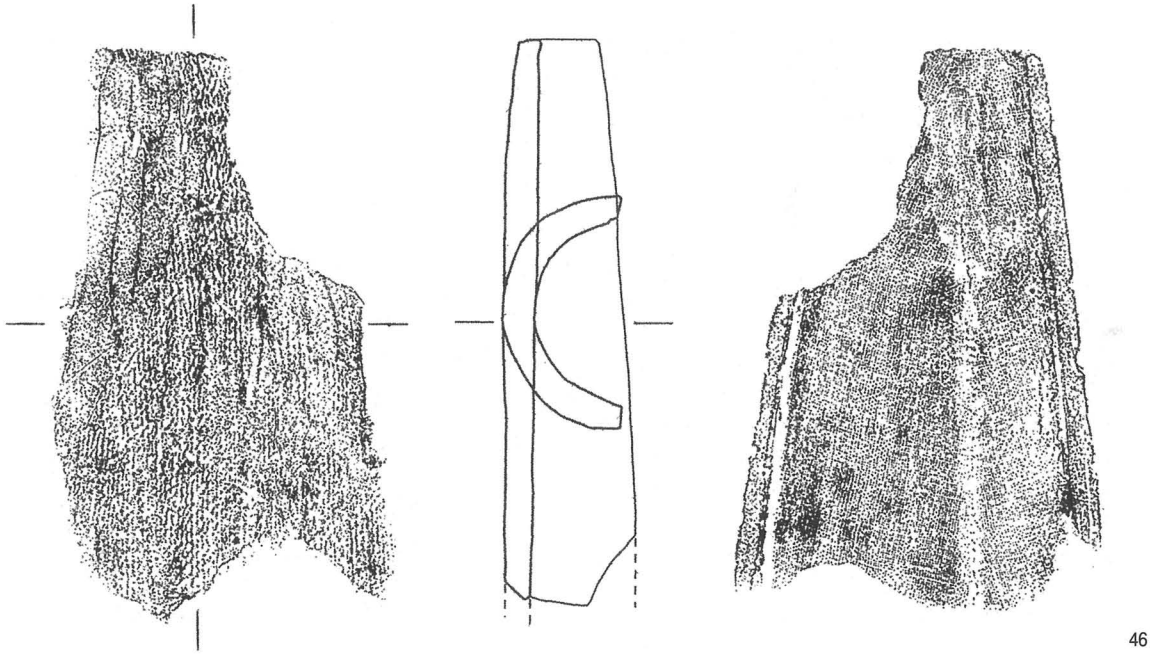
第21図　丸瓦実測図　3



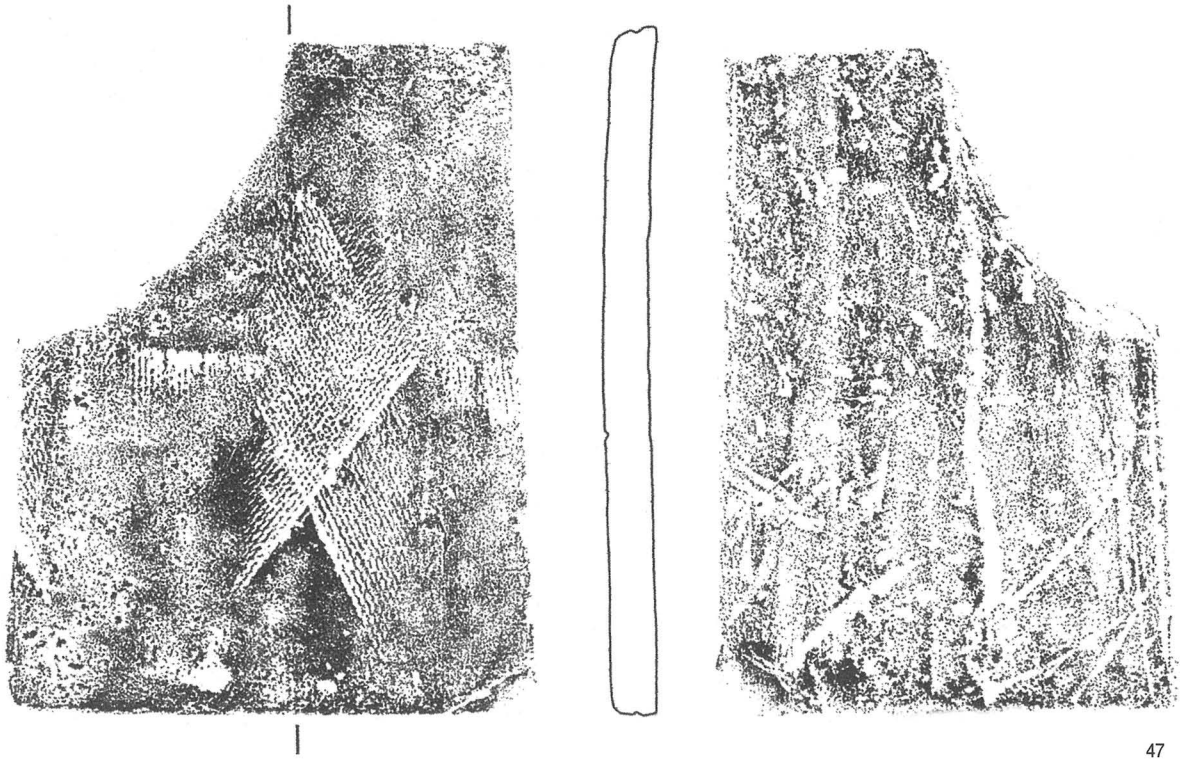


0 20 cm

第22図　丸瓦実測図　4



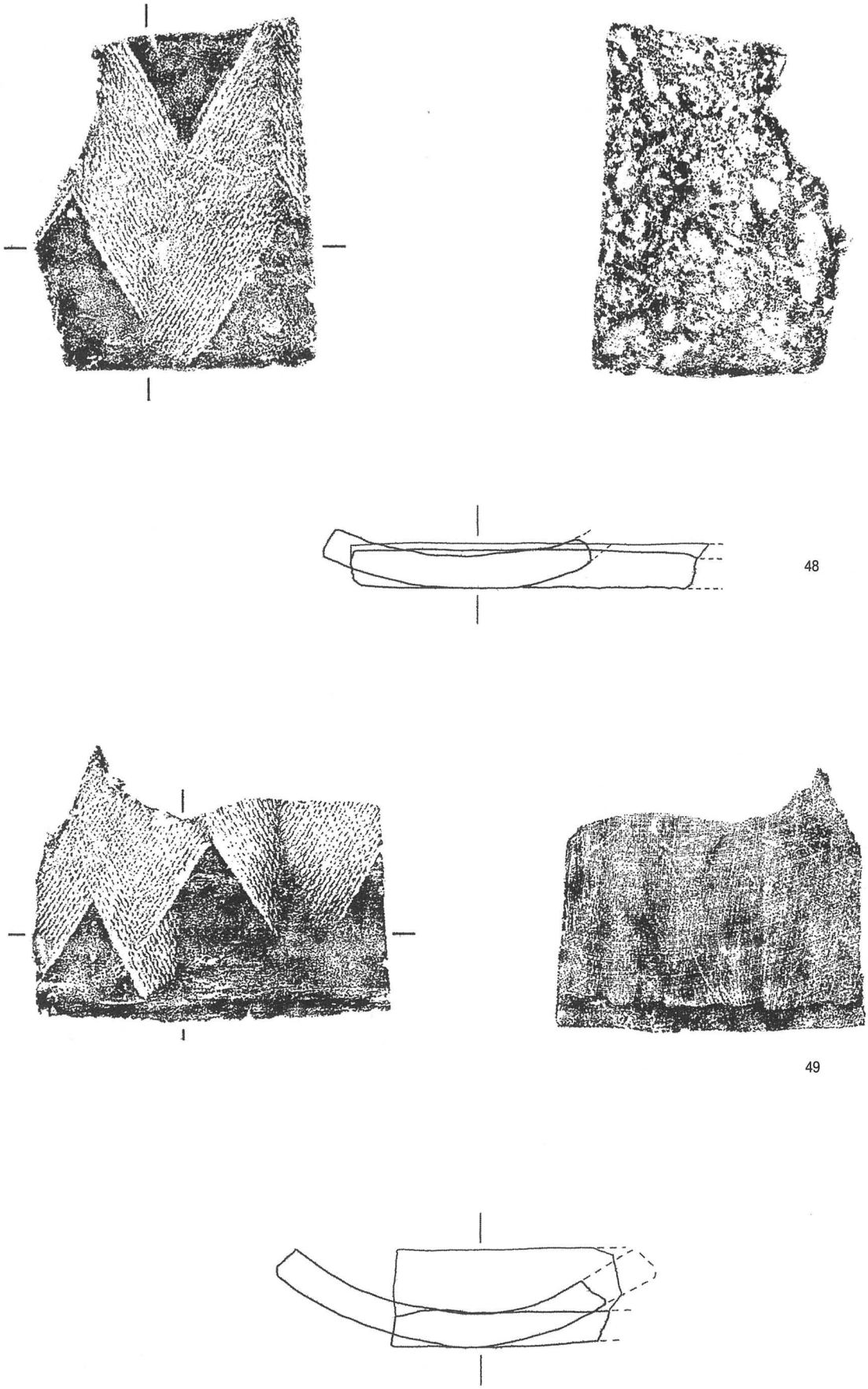
46



47

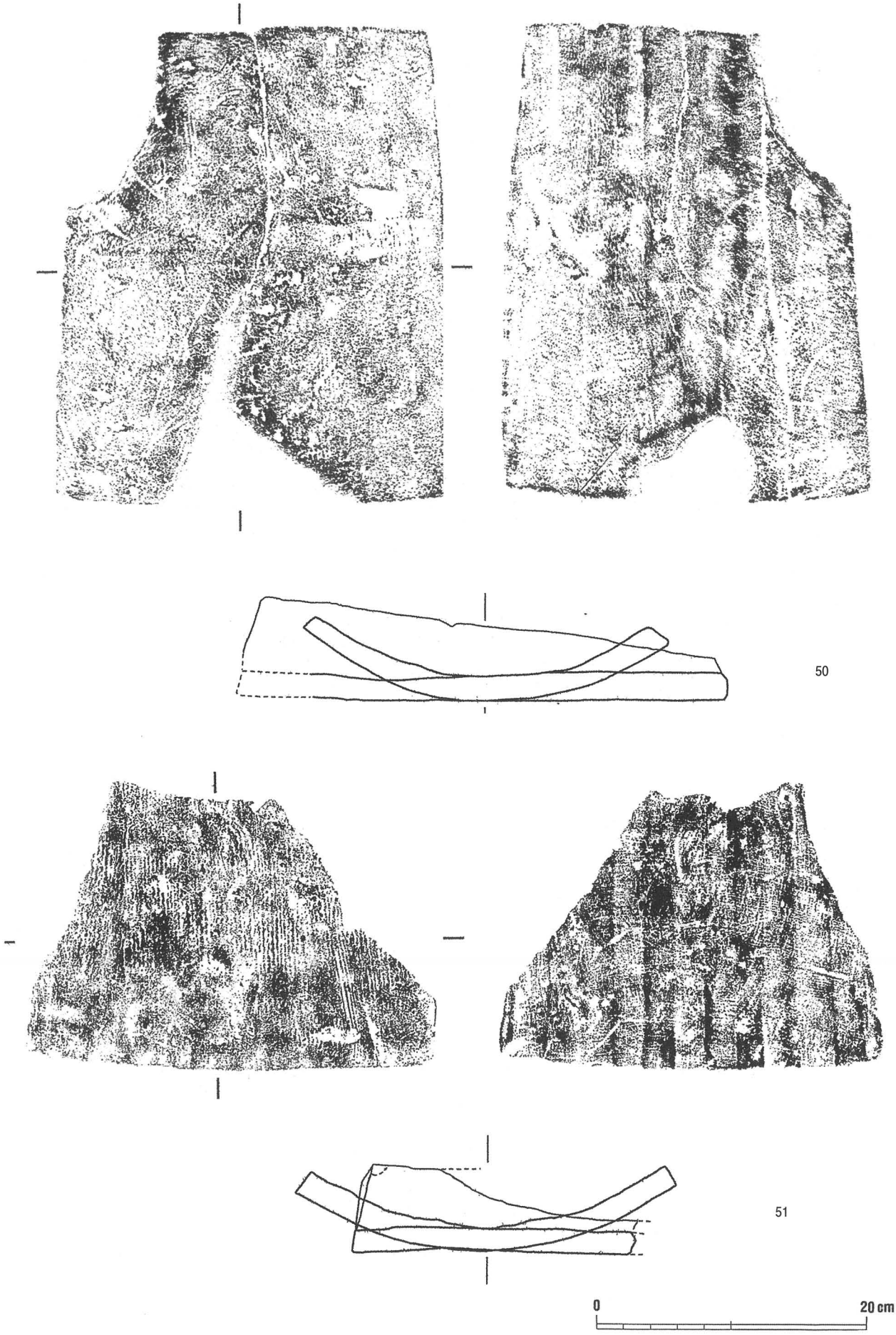
0 20 cm

第23図　丸瓦・平瓦実測図　1

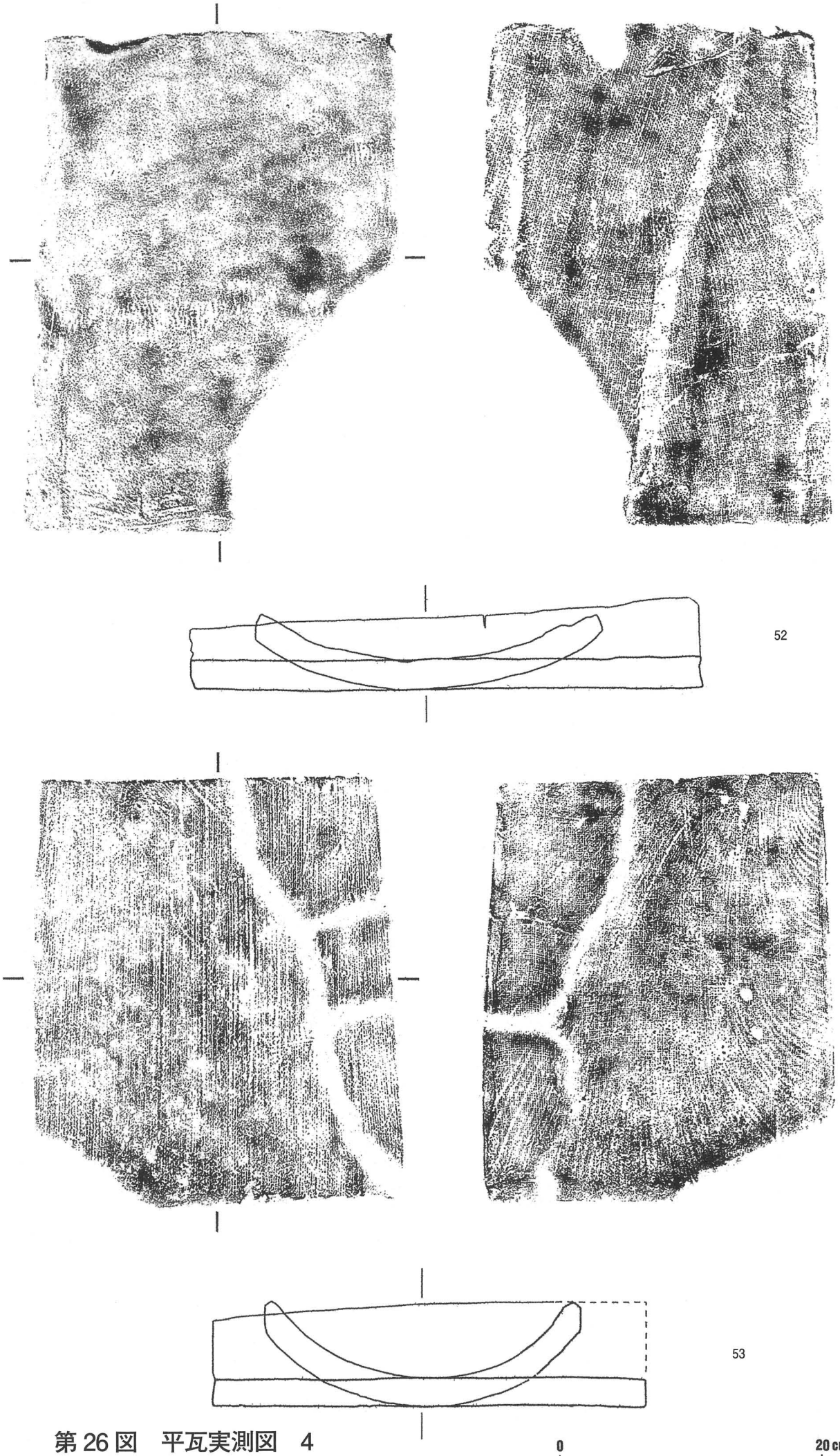


第24図　平瓦実測図　2

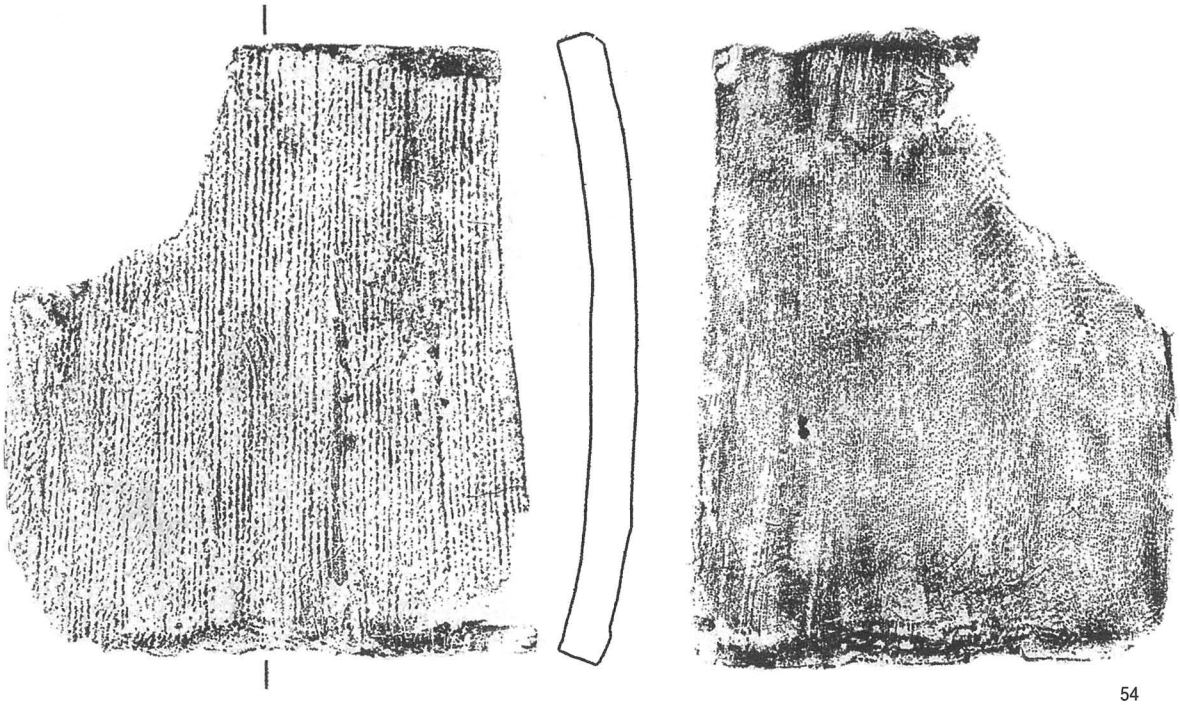
0　20cm



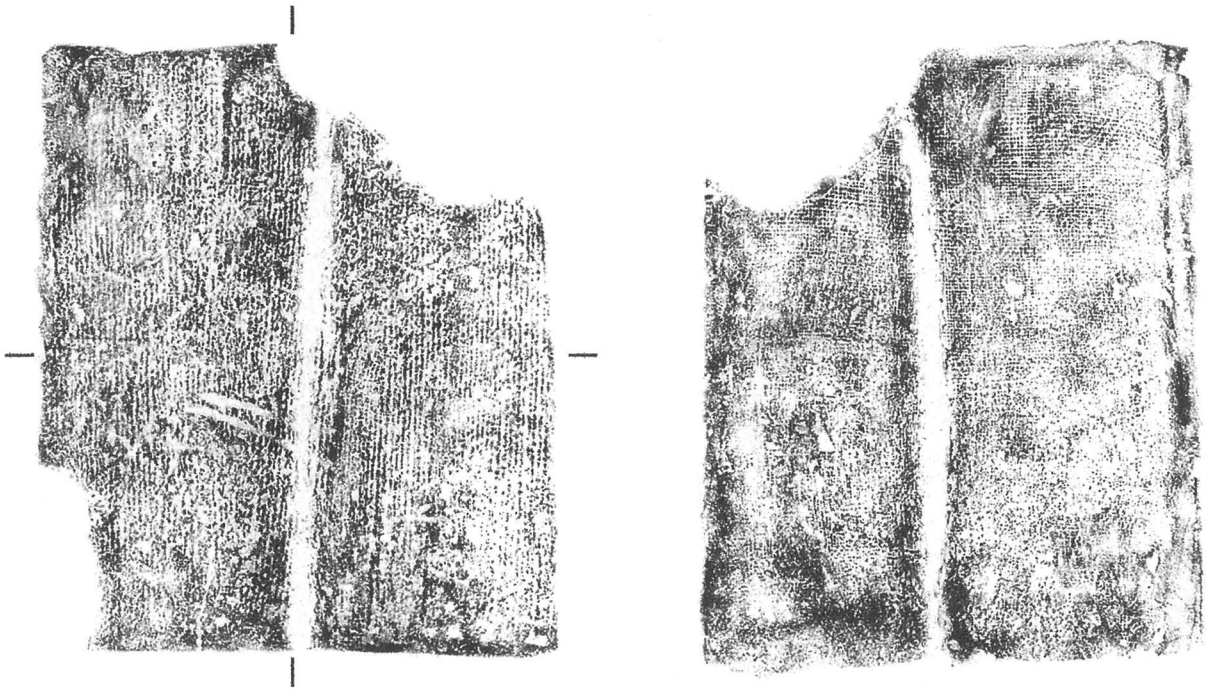
第25図　平瓦実測図　3



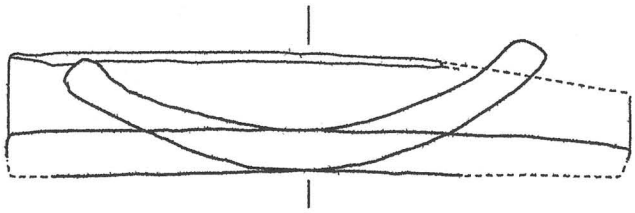
第 26 図　平瓦実測図　4



54

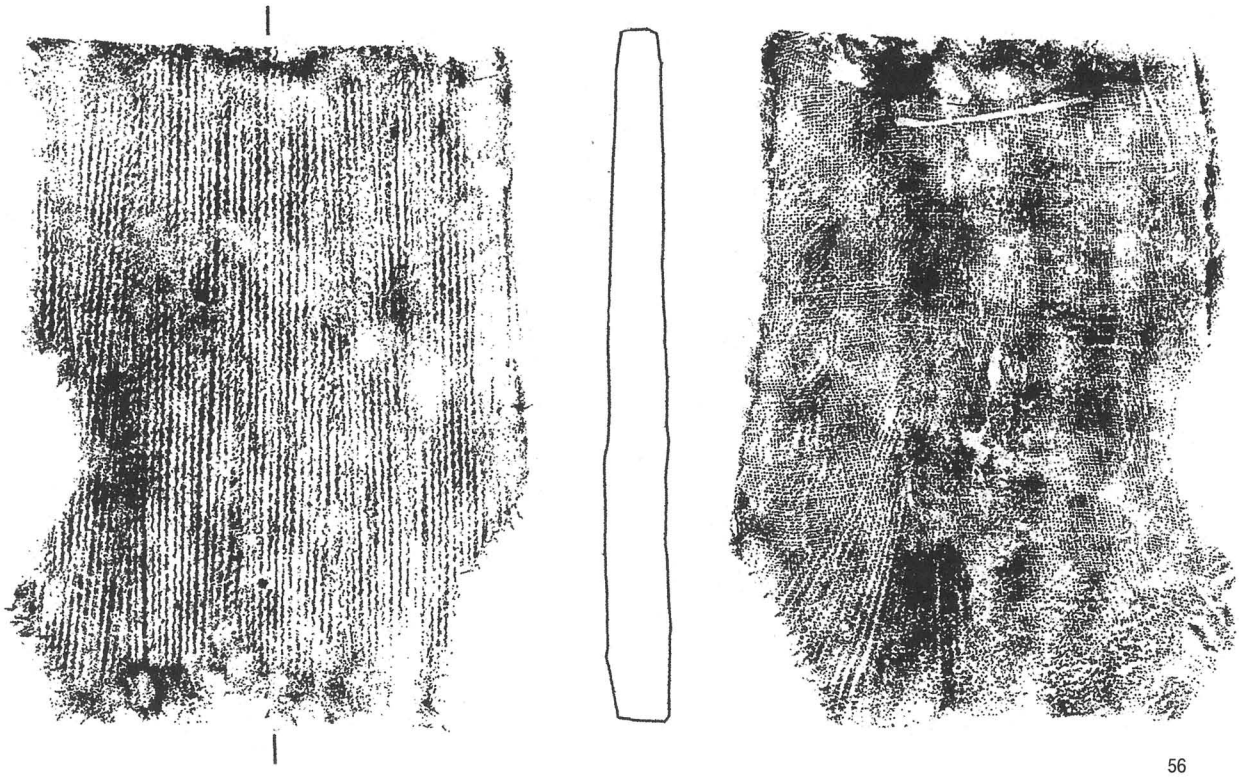


55

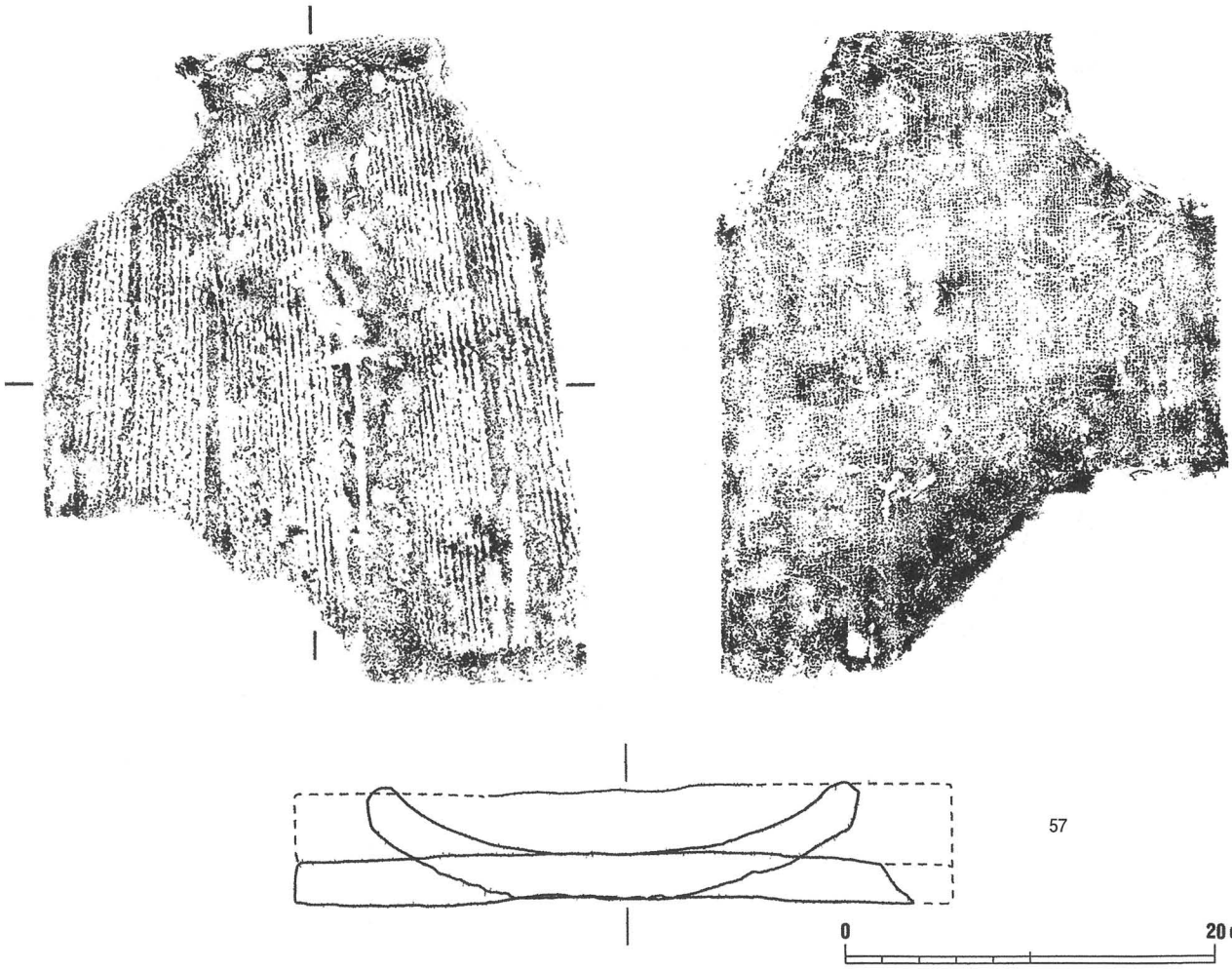


第27図　平瓦実測図　5

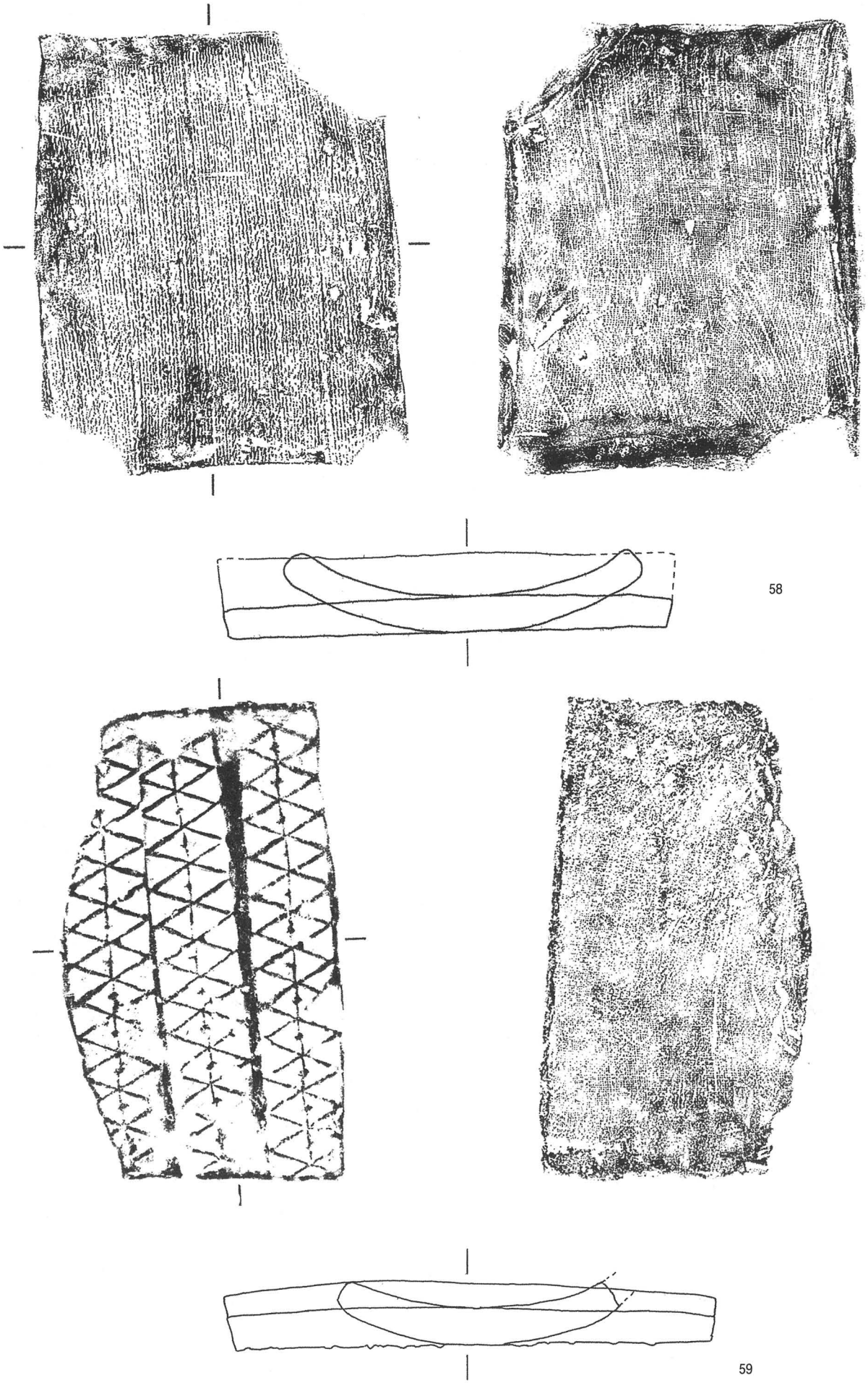
0　20cm



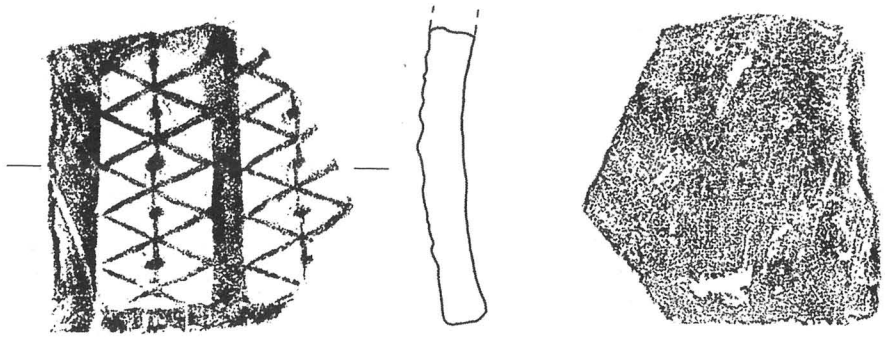
56



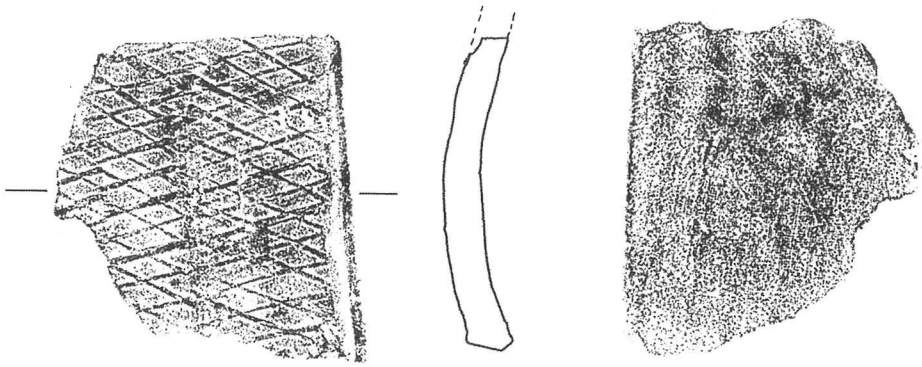
第 28 図　平瓦実測図　6



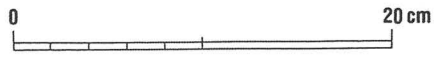
第29図　平瓦実測図　7



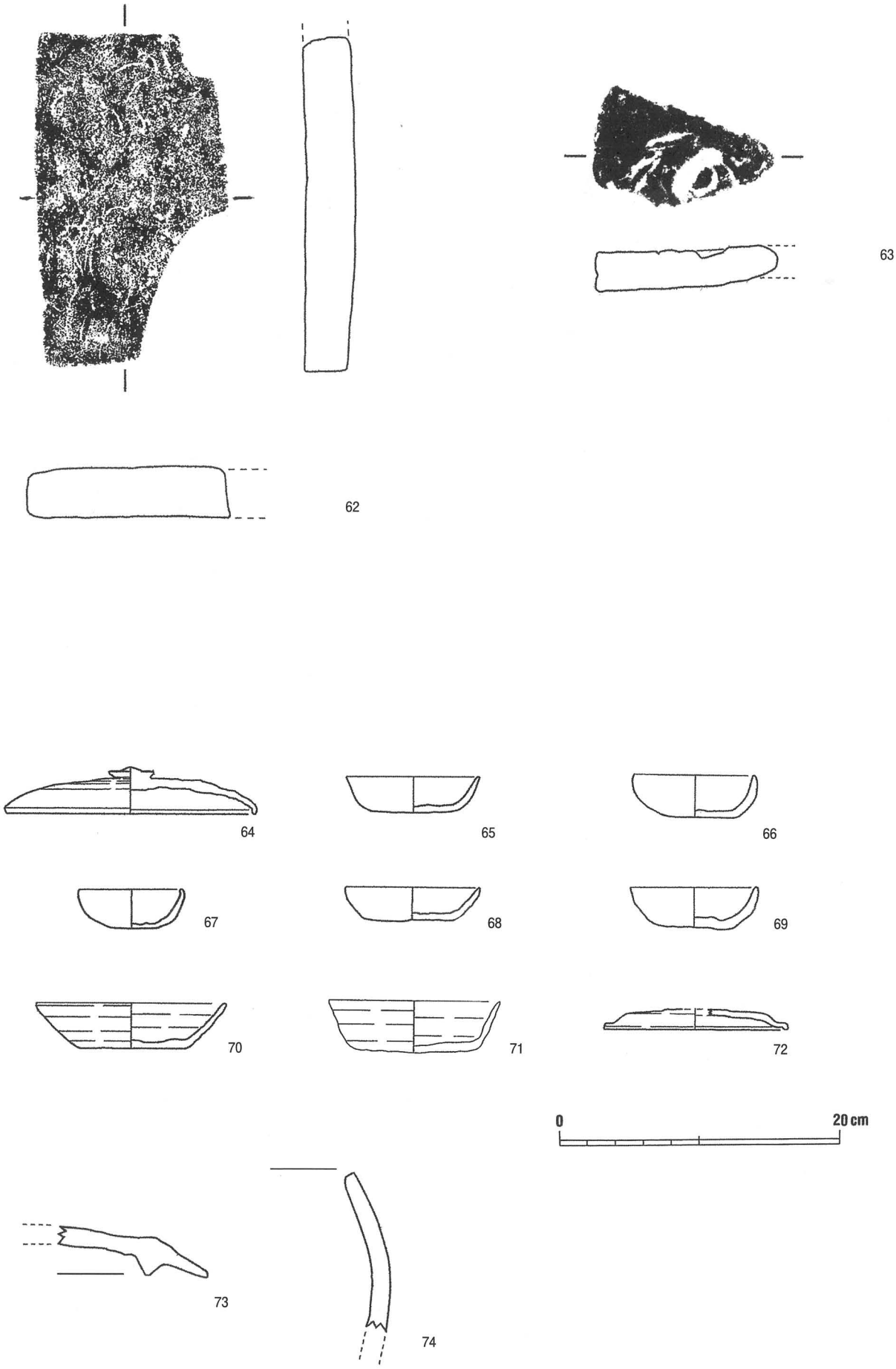
60



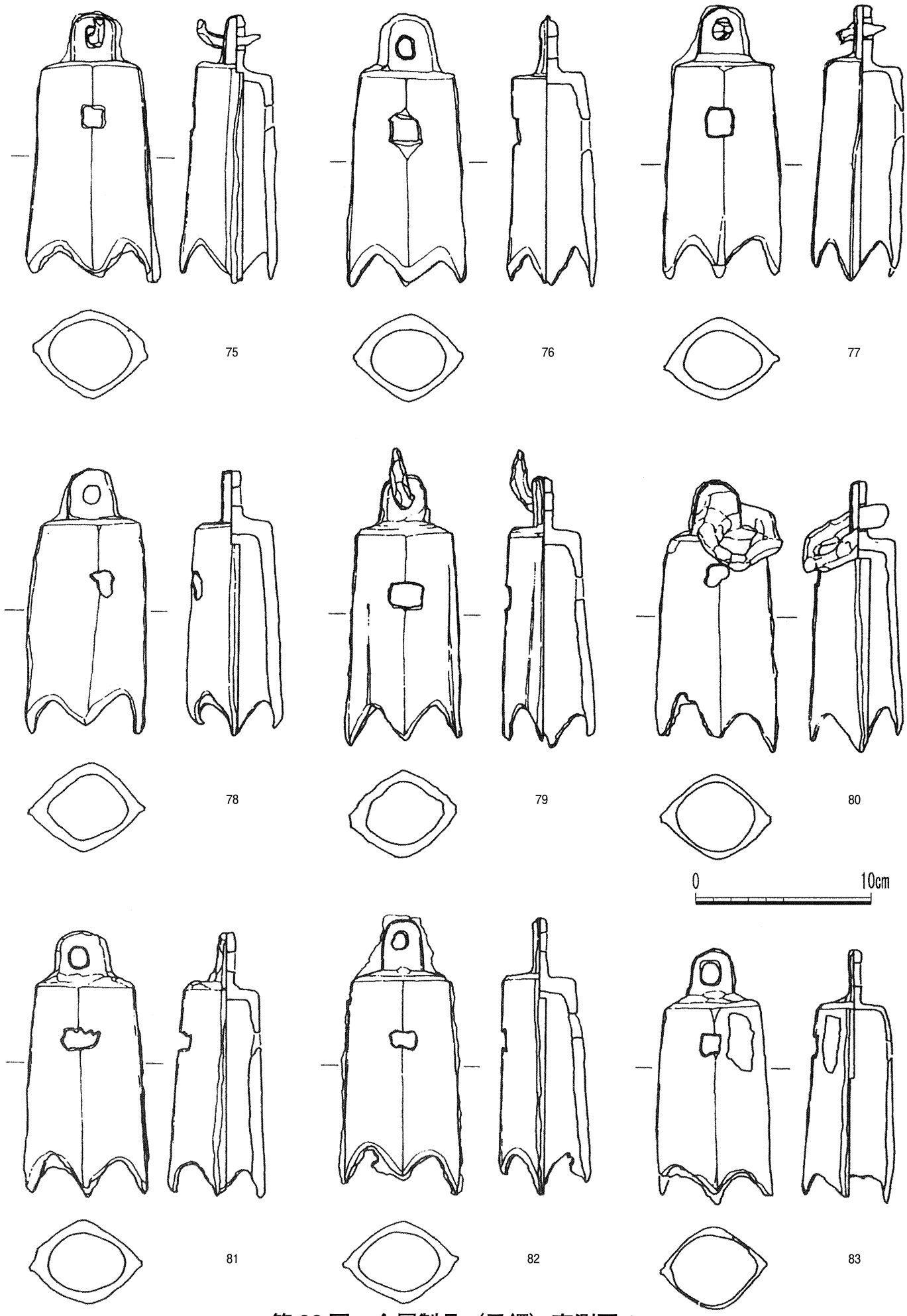
61



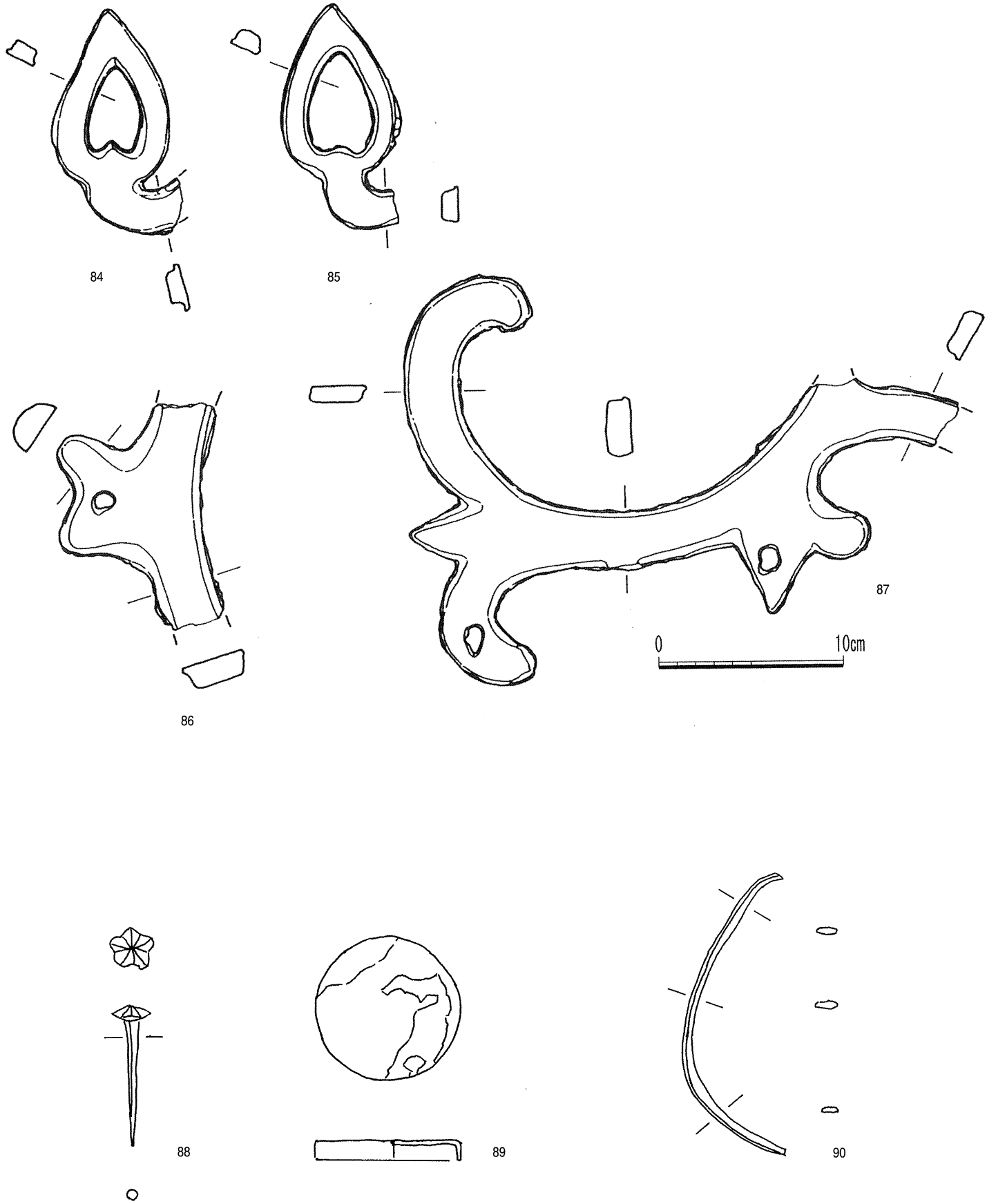
第30図　平瓦実測図　8



第 31 図　鬼瓦・土器実測図（73、74 のみ S ＝ 1 ／ 1）



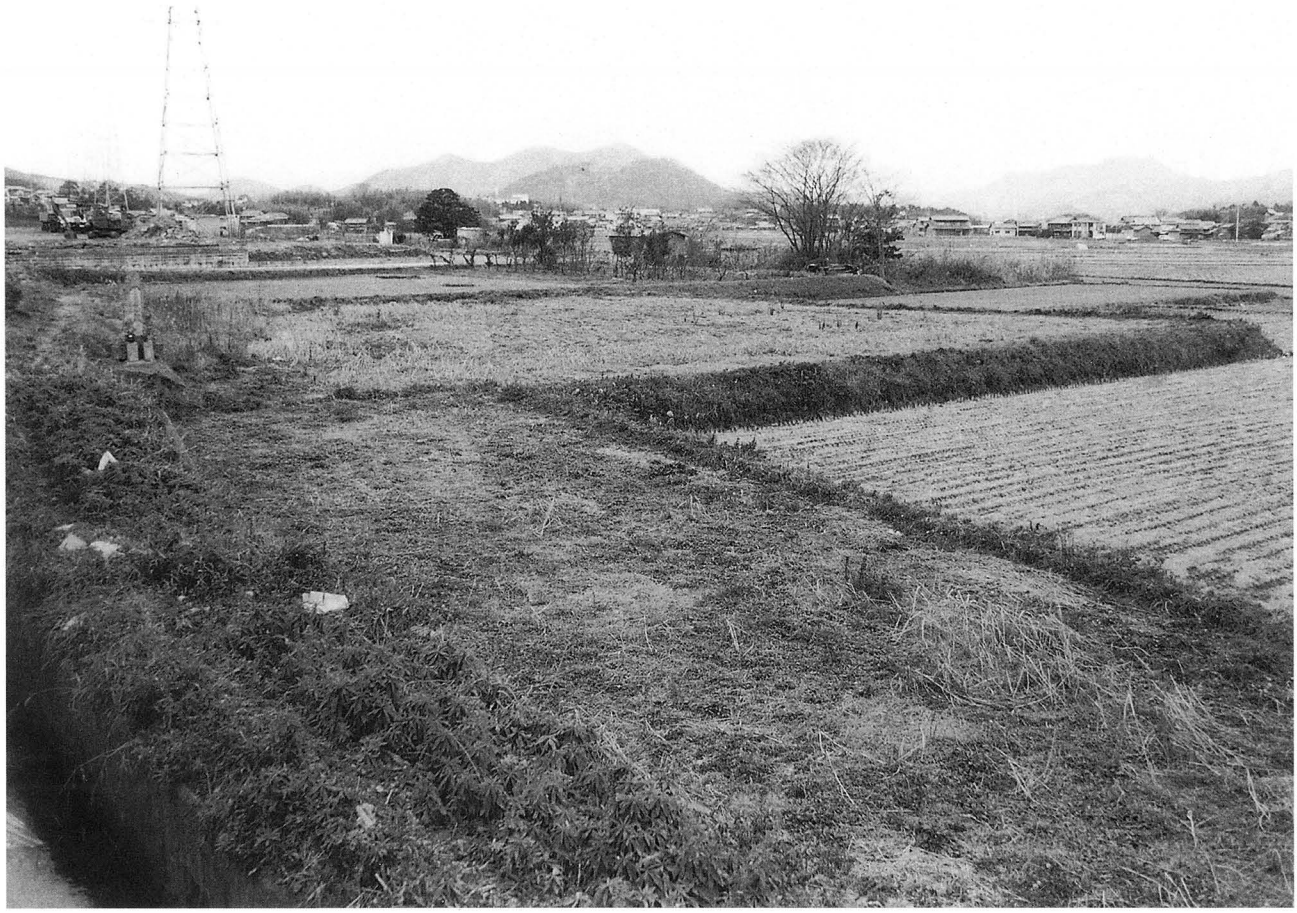
第 32 図　金属製品（風鐸）実測図 1



第33図　金属製品実測図2（88～90のみS＝1／2）

写　真　図　版

写真図版一　調査地全景写真一



調査地全景（東より）

調査地全景（西より）

金堂全景（南西より）

金堂全景（南より）

金堂南辺瓦積検出状況（南より）

金堂基壇南辺瓦積（東側部分）

金堂基壇南辺瓦積（西側部分）

金堂基壇西辺瓦積

写真図版五　塔跡調査写真一

塔基壇南辺、心礎抜き跡（南より）

塔基壇（南東より）

塔基壇南辺（南東より）

塔基壇南辺石積（南西より）

塔基壇東辺石積（北より）

東基壇東辺石積（北東より）

塔基壇西辺（南方向より）

塔基壇西辺及びサブトレンチ（南西より）

塔基壇西辺及びサブトレンチ（北より）

塔基壇西辺（南より）

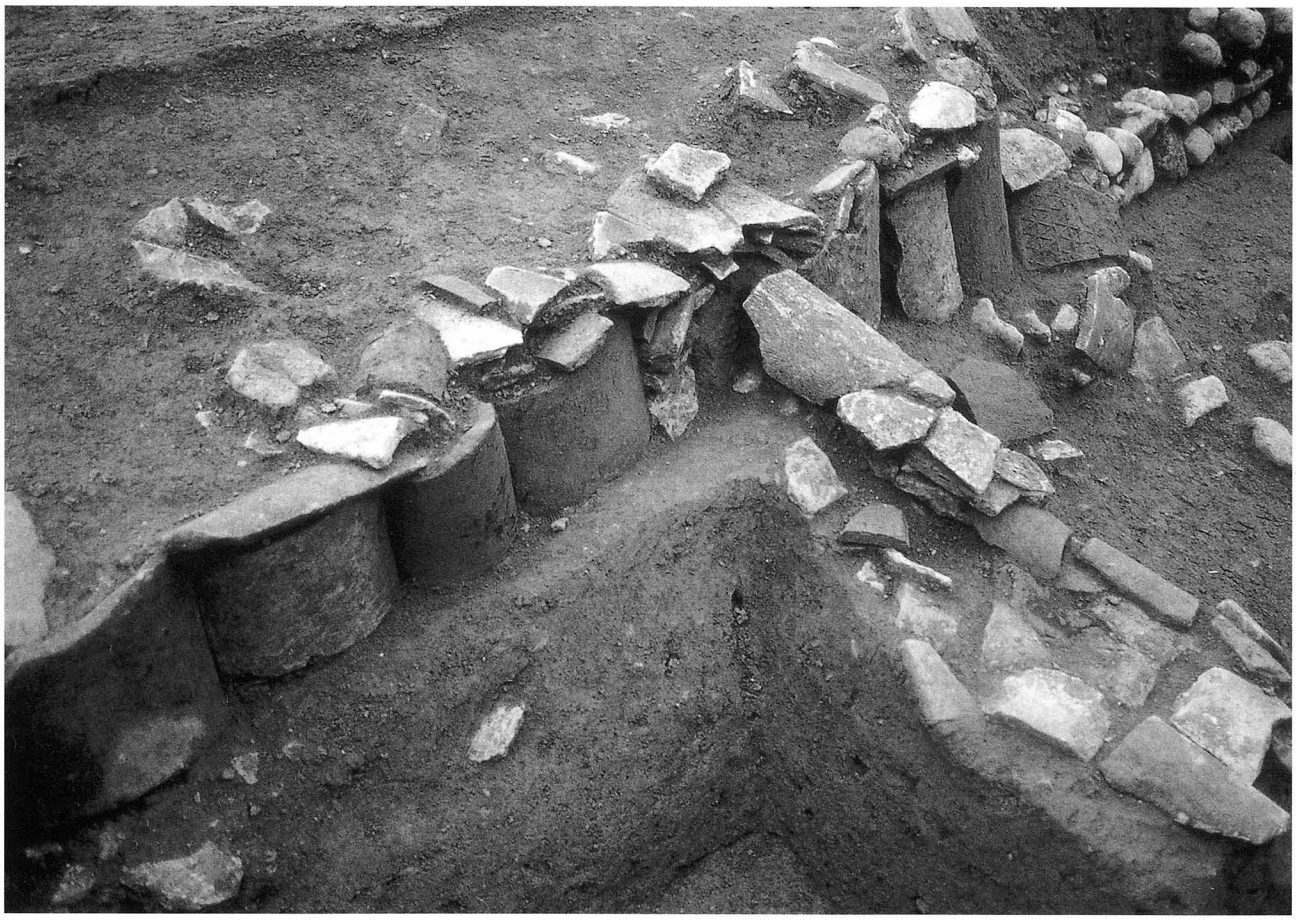
塔基壇北辺（北西より）

塔基壇北辺（東より）

塔基壇北辺石積（北東より）

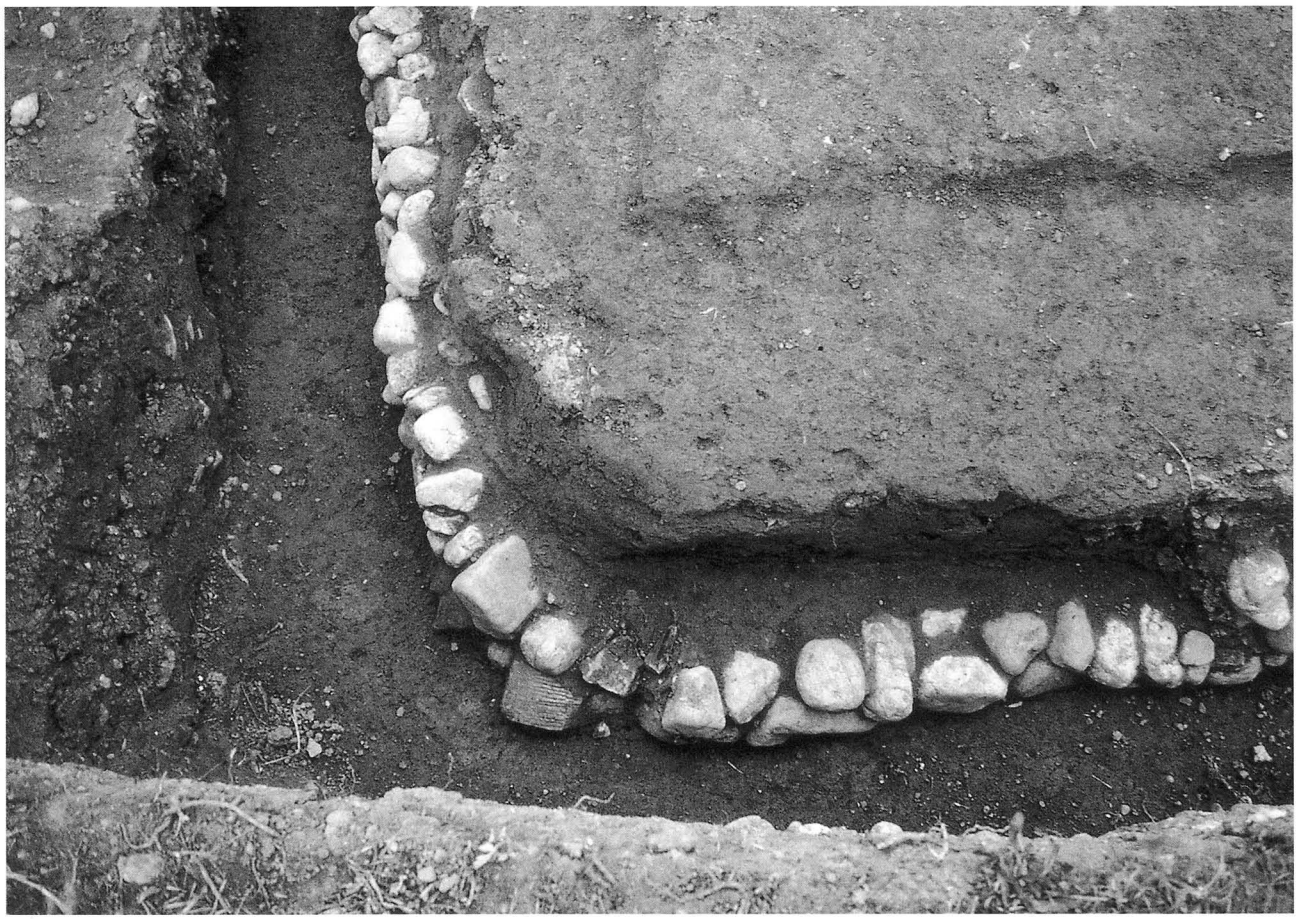
塔基壇北辺石積（北東より）

塔基壇北辺瓦列部分（北東より）



塔基壇北辺瓦列部分（北東より）

塔基壇北辺瓦列部分（北西より）



塔基壇北東隅（北より）

塔基壇北東隅（東より）

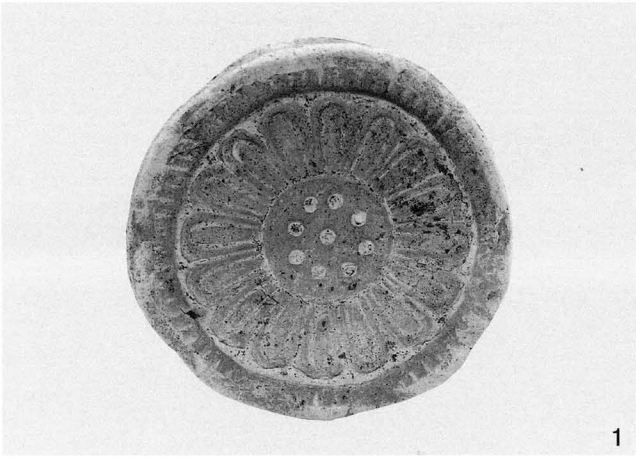
塔心礎

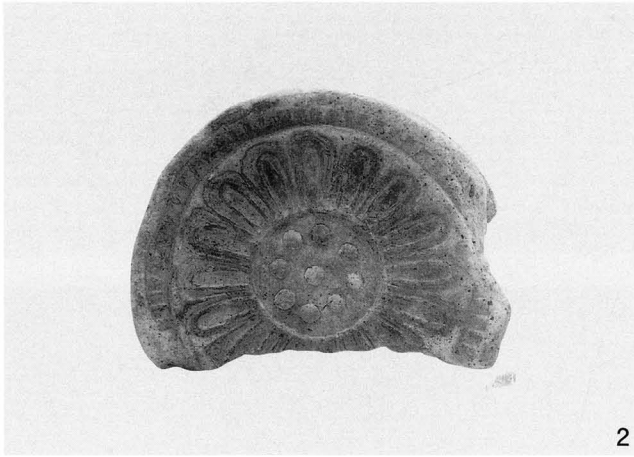
写真図版十五　中門跡調査写真一

中門跡（北西より）

中門跡（南西より）

写真図版十六　軒丸瓦写真一


1


2

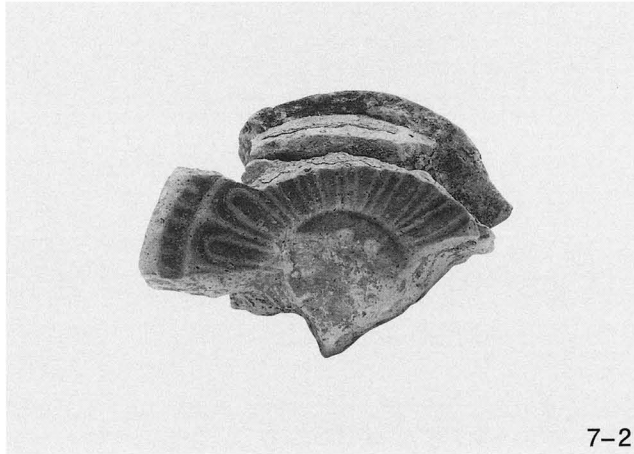
3

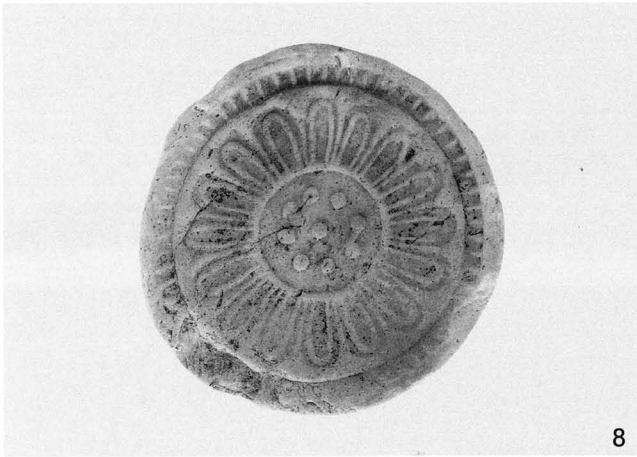
4

5

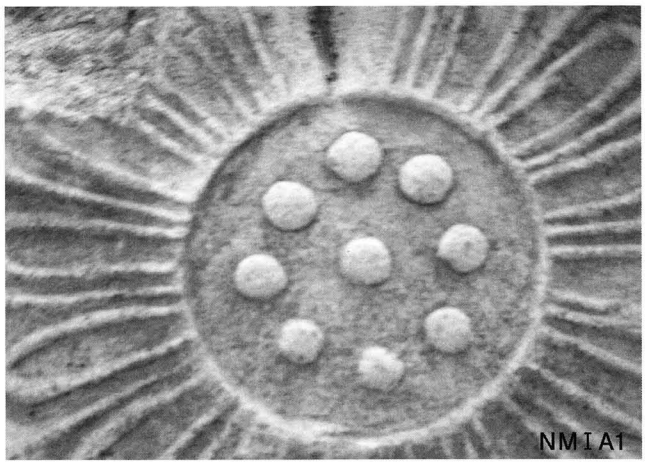
6

7–1

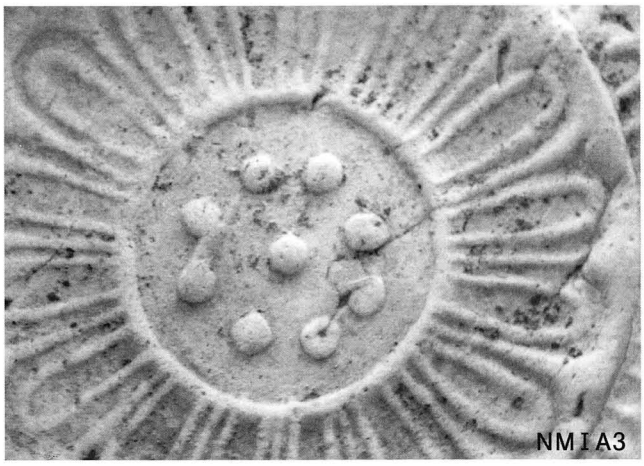

7–2

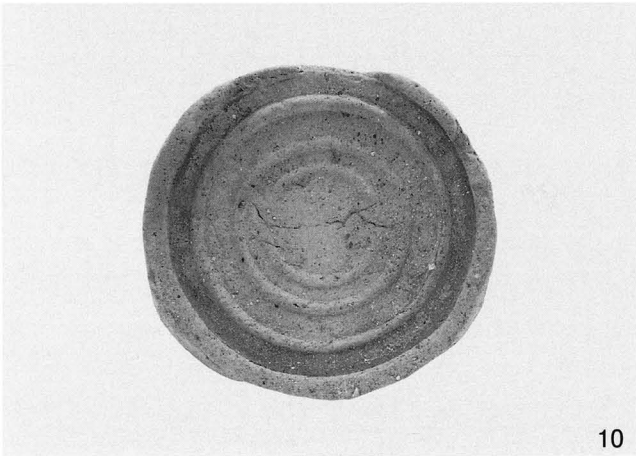

8

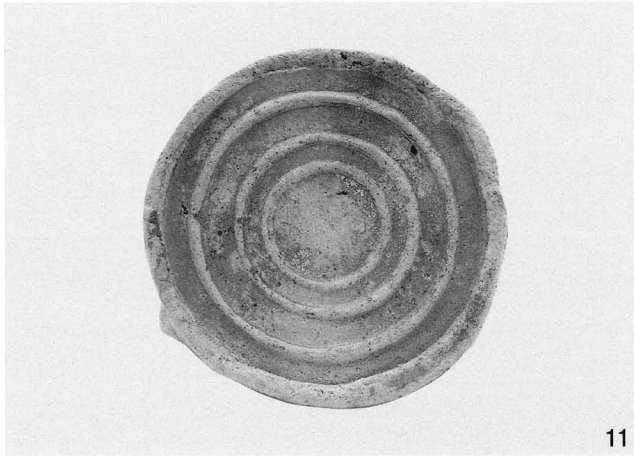
9


NMIA1

NMIA2


NMIA3


10


11

12

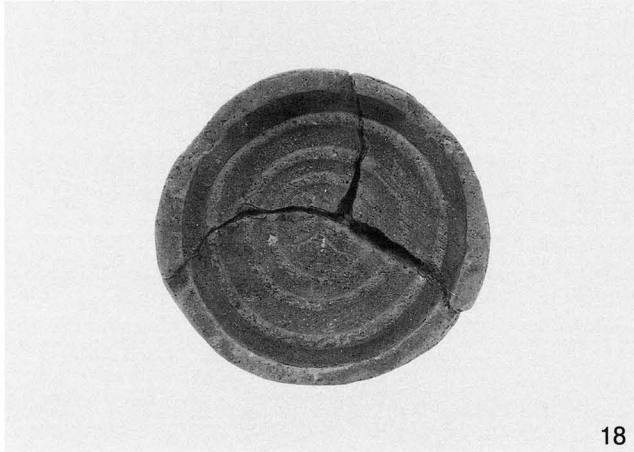
13

14

15

16

17


18

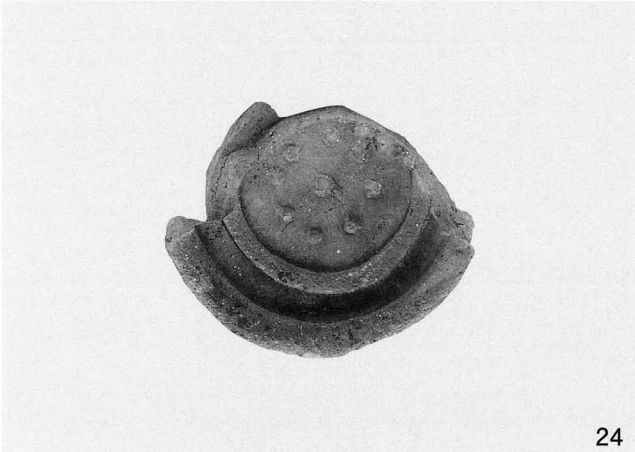
19

20

21

22

23

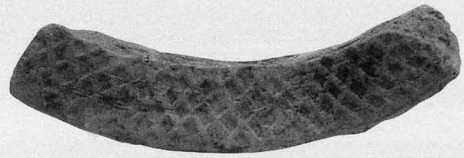

24

25

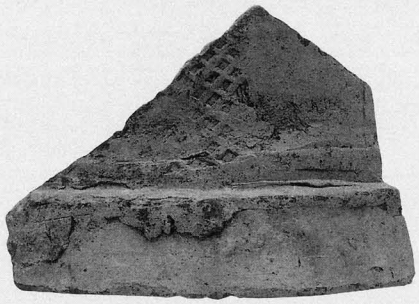
26

27

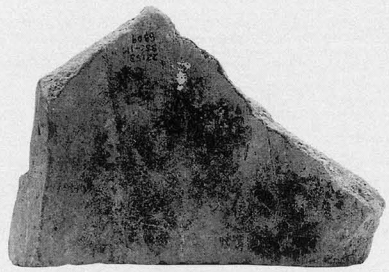
28



（瓦当面）29−1



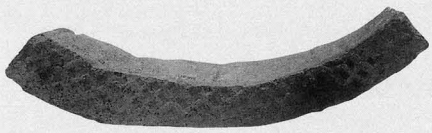
（凸面）29−2



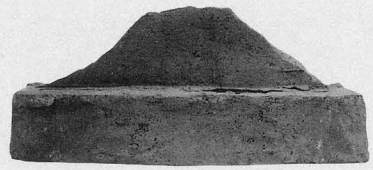
（凹面）29−3

（瓦当面）30−1

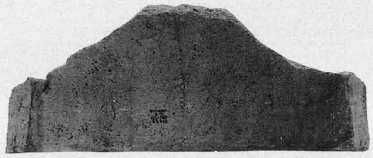
（凸面）30−2



（瓦当面）31−1



（凸面）31−2

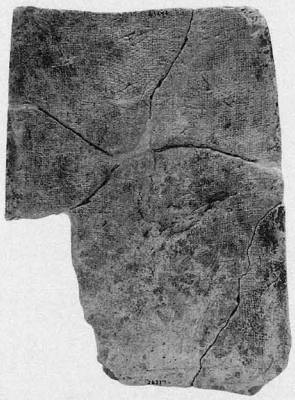


(凹面)31-3

32

(瓦当面)33-1

(凸面)33-2

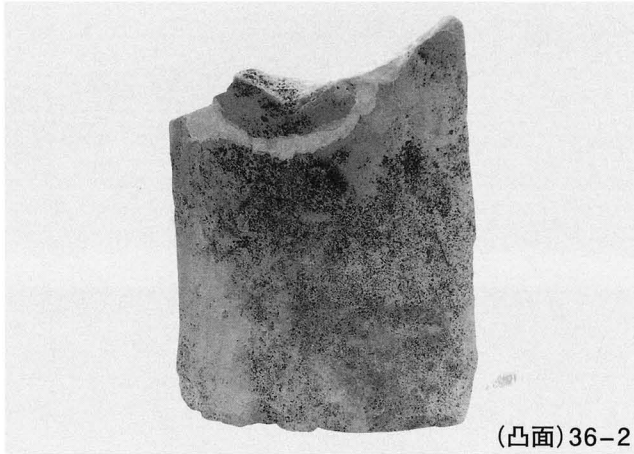


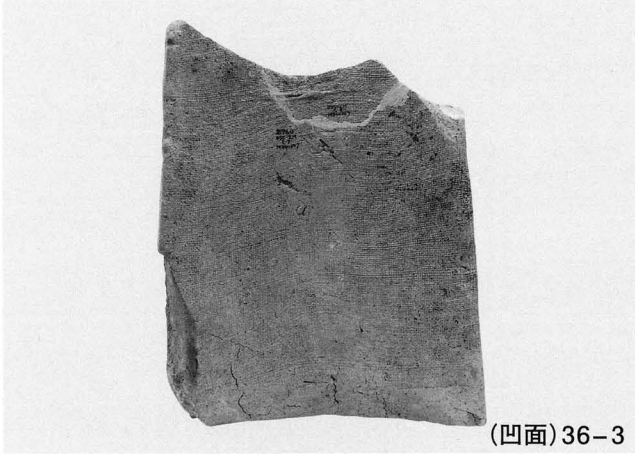
(凹面)33-3

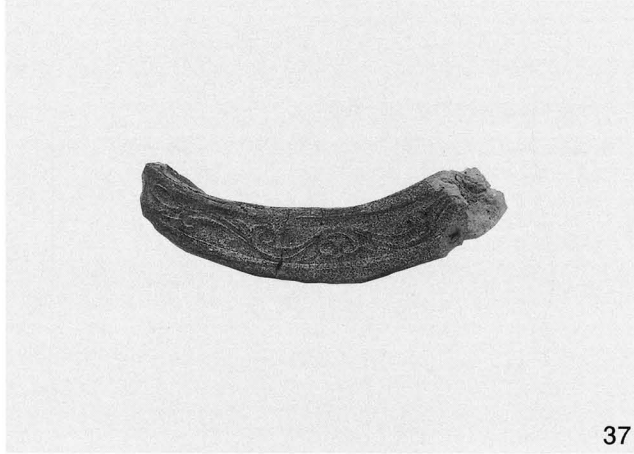
34

35

(瓦当面)36-1


(凸面)36-2


(凹面)36-3


37

(凸面)38-1

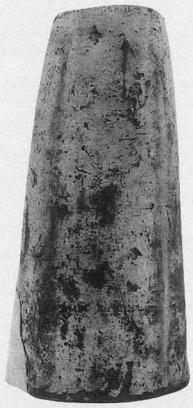
(凹面)38-2

(凸面)39-1

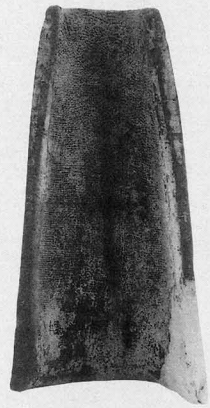
(凹面)39-2

(凸面) 40-1

(凹面) 40-2

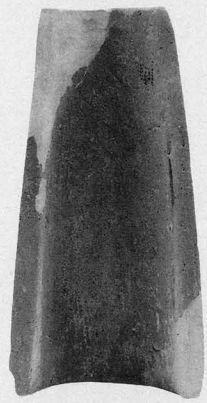


(凸面) 41-1



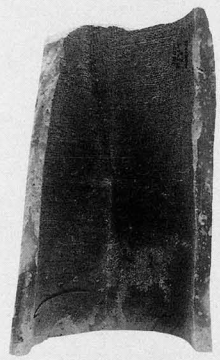
(凹面) 41-2

(凸面) 42-1



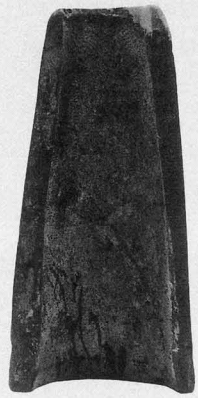
(凹面) 42-2

(凸面) 43-1



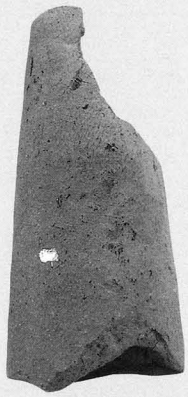
(凹面) 43-2

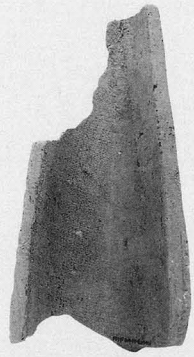
(凸面)44-1

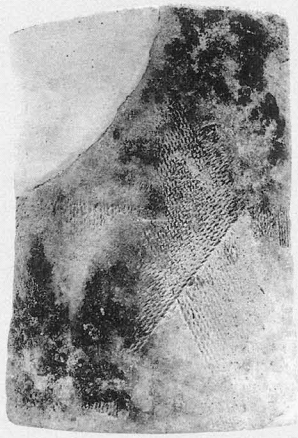

(凹面)44-2

(凸面)45-1

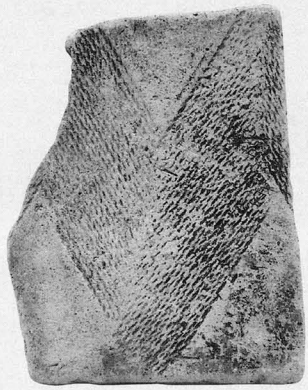
(凹面)45-2


(凸面)46-1

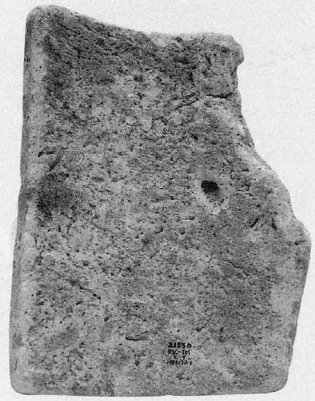

(凹面)46-2


(凸面)47-1

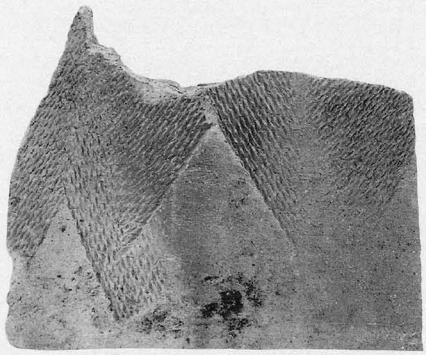
(凹面)47-2



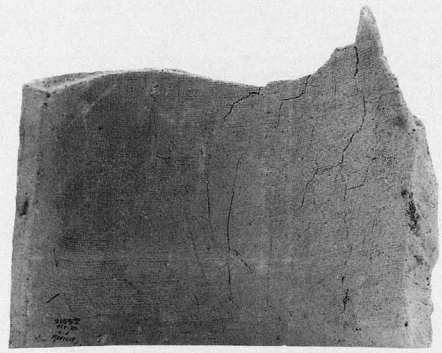
(凸面) 48−1



(凹面) 48−2



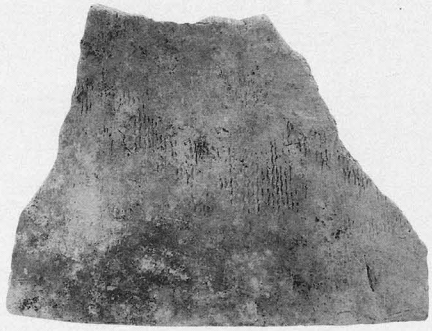
(凸面) 49−1



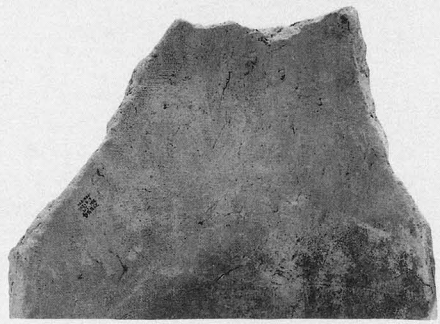
(凹面) 49−2

(凸面) 50−1

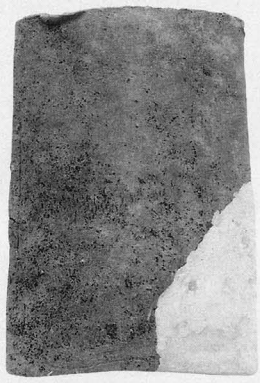
(凹面) 50−2



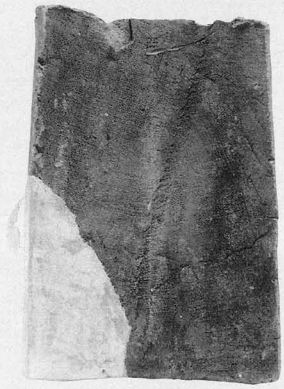
(凸面) 51−1



(凹面) 51-2

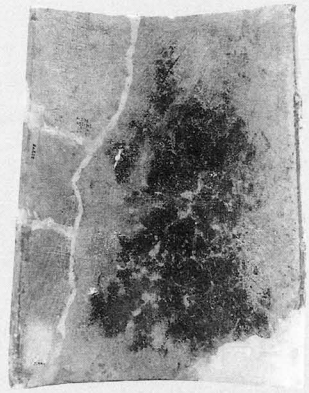


(凸面) 52-1

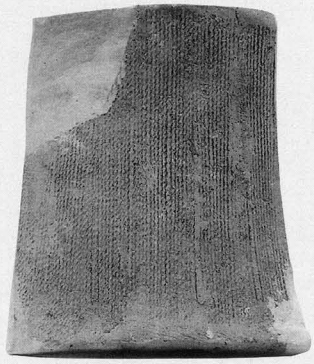


(凹面) 52-2

(凸面) 53-1

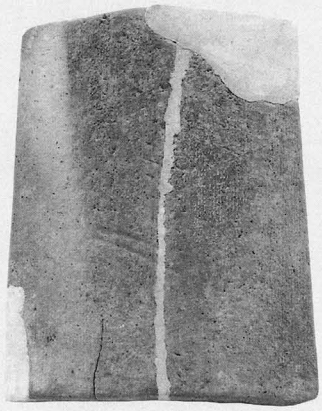


(凹面) 53-2



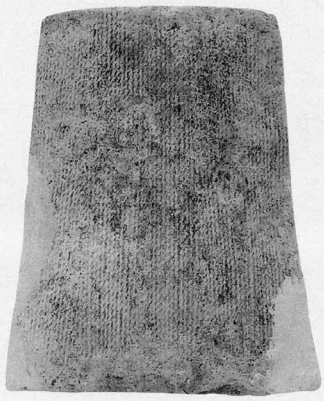
(凸面) 54-1

(凹面) 54-2



(凸面) 55-1

(凹面) 55-2



(凸面) 56−1

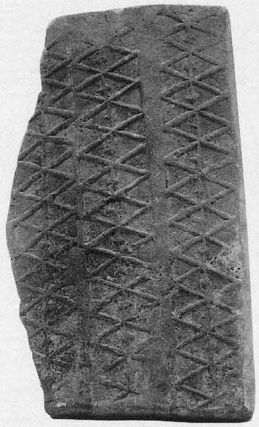
(凹面) 56−2

(凸面) 57−1

(凹面) 57−2

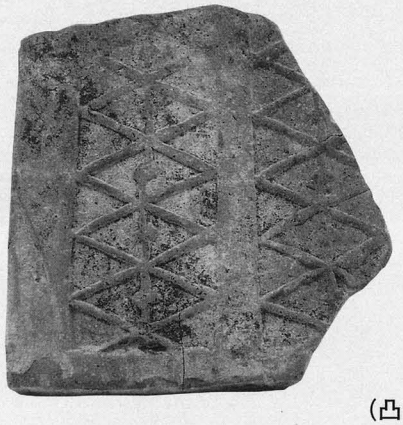
(凸面) 58−1

(凹面) 58−2



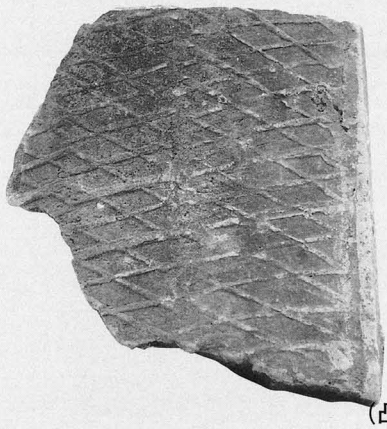
(凸面) 59−1

(凹面) 59−2



(凸面)60−1

(凹面)60−2

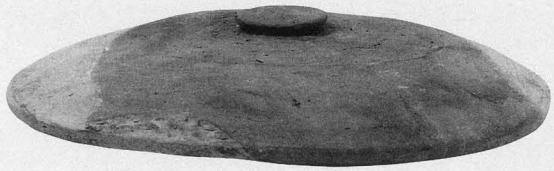


(凸面)61−1

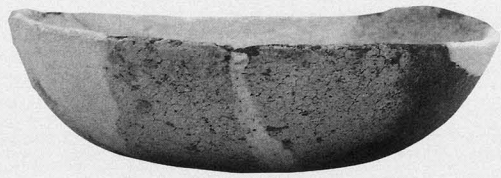
(凹面)61−2

62

63



64



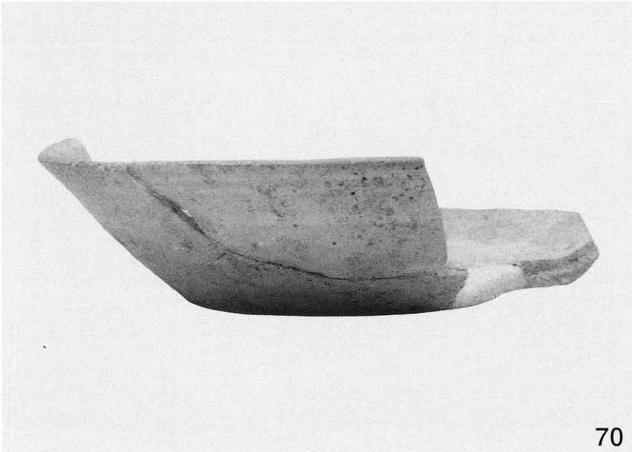
65

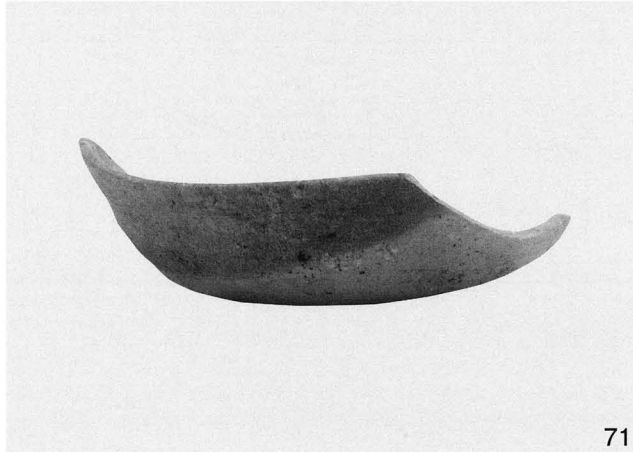
66

67

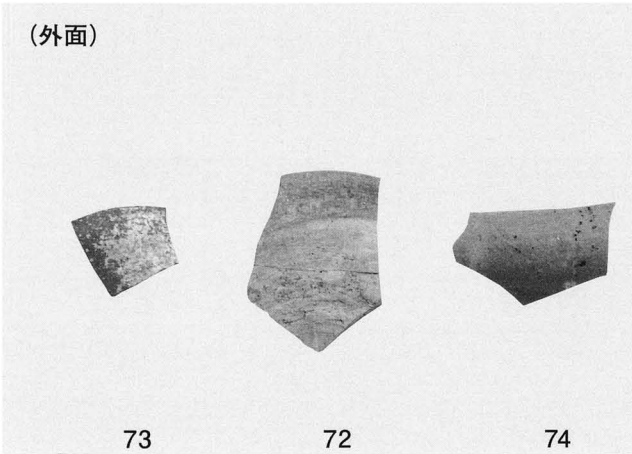
68

69

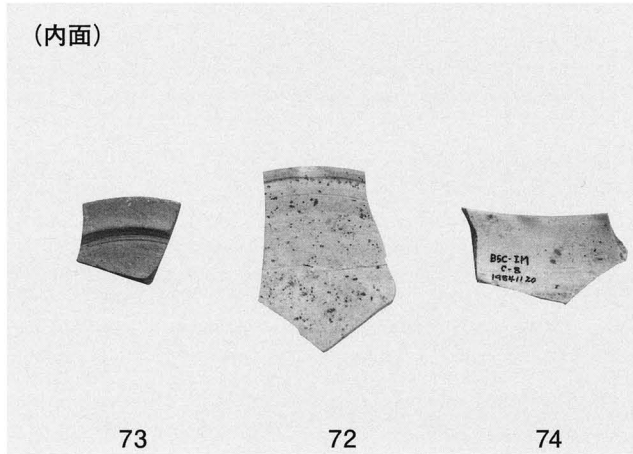

70


71

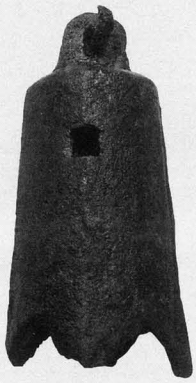
（外面）


73　72　74

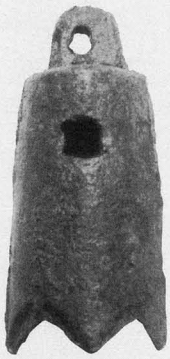
（内面）



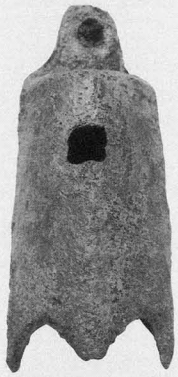
73　72　74


75-1

75-2


76-1

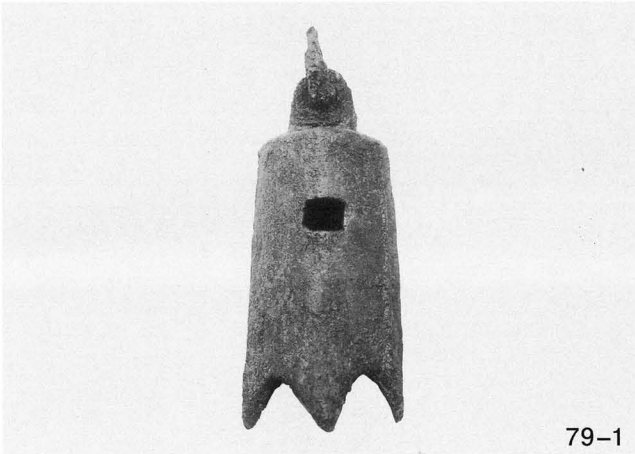
76-2


77-1

77-2

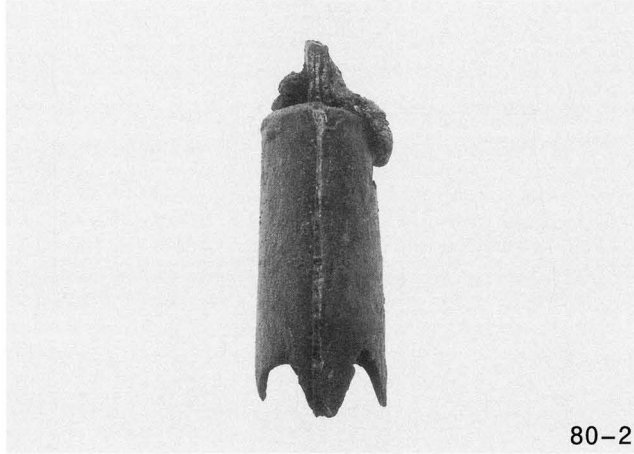
78-1

78-2


79-1

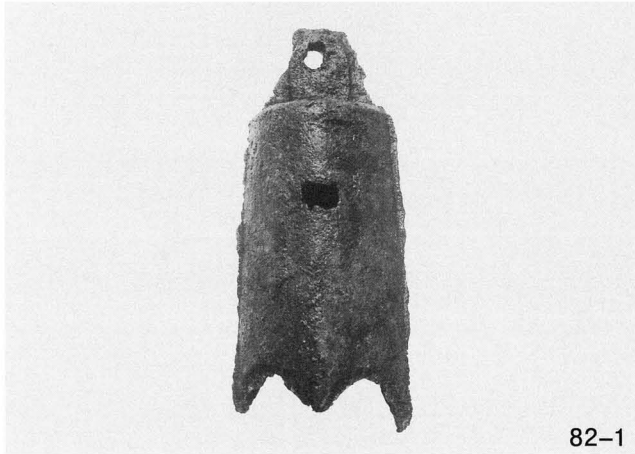
79-2

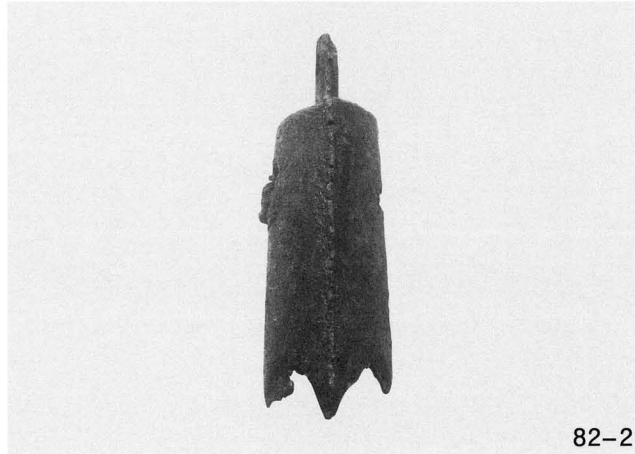
80-1


80-2

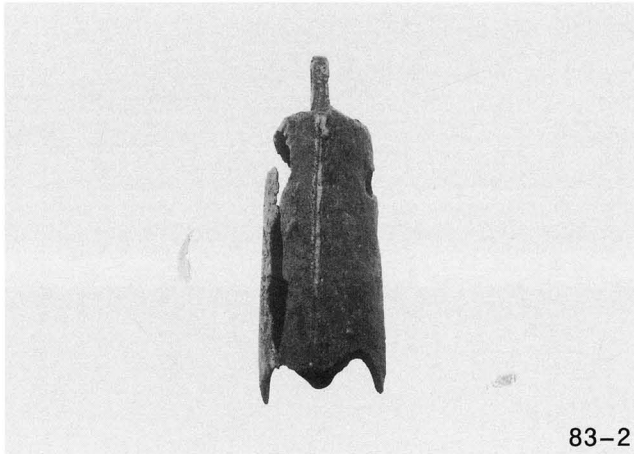
81-1

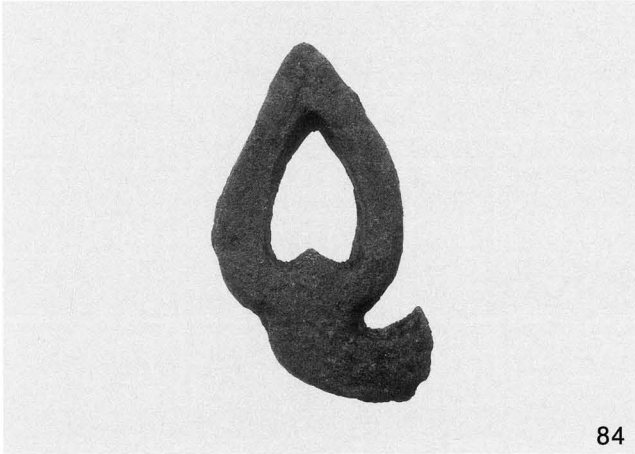
81-2


82-1

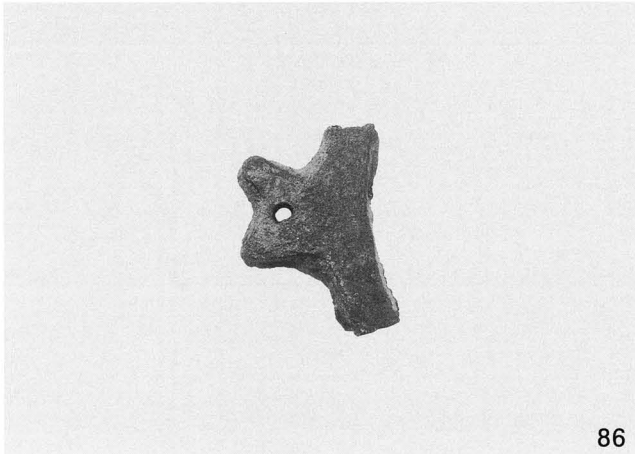

82-2

83-1


83-2


84

85


86

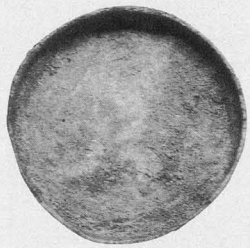
87

88-1

(釘頭部)88-2

89-1

89-2

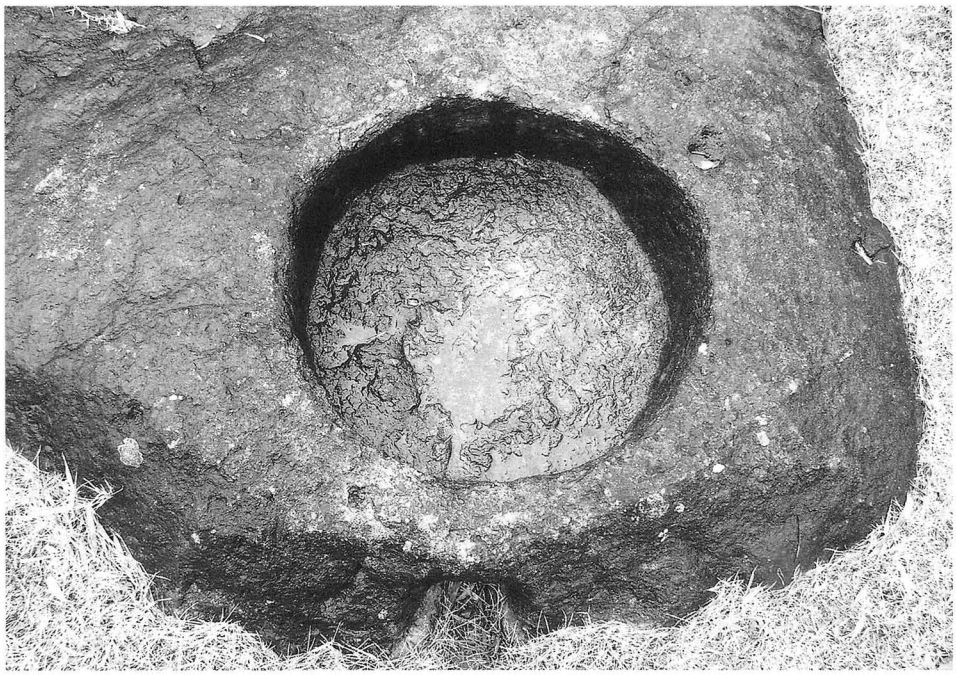


89-3

90-1

90-2

写真図版三十四　塔心礎写真



塔心礎（円形孔）

塔心礎（西より）

塔心礎（東より）

加古川市文化財調査報告　24
石守廃寺発掘調査概要報告書
2011年3月26日発行
編集・発行　加古川市教育委員会　文化財調査研究センター
〒675-0101　兵庫県加古川市平岡町新在家1224-7
TEL(079)423-4088
印　　刷　稲垣印刷
加古川市野口町古大内349-28